

第3章 京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

伊藤淳史 富井 眞 外山秀一* 上中央子**

1 調査の概要

今回の調査地点は、京都大学北部構内の南西部に位置し、北白川追分町遺跡の範囲内にある(図86, 図版1-276)。ここに理学部校舎6号館の新営が計画されたため、予定地全面の2158㎡を、2000年5月29日~11月21日にかけて発掘調査した。周辺では、南側の208・217地点で、縄文晩期~弥生前期の遺物包含層、平安中期の埋納遺構、幕末期土佐藩邸の堀、北方100mの54地点で、弥生中期の方形周溝墓や平安末期の火葬塚が見つかっており、今回も関連する遺跡の存在が予想された。また、花折断層が東方400mにあり、208地点では砂脈(噴砂)が多数確認されていることより、古地震の痕跡も予想された。

調査の結果、弥生前期末の土石流にともなう厚い黄色砂をはさんで、上層で弥生中期以降各期の遺物包含層、中・近世の耕作にかかわる小溝やピット群、幕末期の井戸を、下層で縄文晩期~弥生前期の遺物包含層と、その上面に築かれた小区画畦畔の水田遺構や流路を良好に検出した。遺物の総出土量は整理箱51箱。下層の弥生前期水田遺構は、先史時代の土地利用や地形環境の変遷を知らせる貴重な事例であり、10月20日に現地説明会を開催し、2001年5月には概略を速報した〔伊藤ほか2001〕。また調査では、耕作の状況をより詳しく検討するため、水田構成層を中心にプラント・オパール分析を実施した(第4節)。

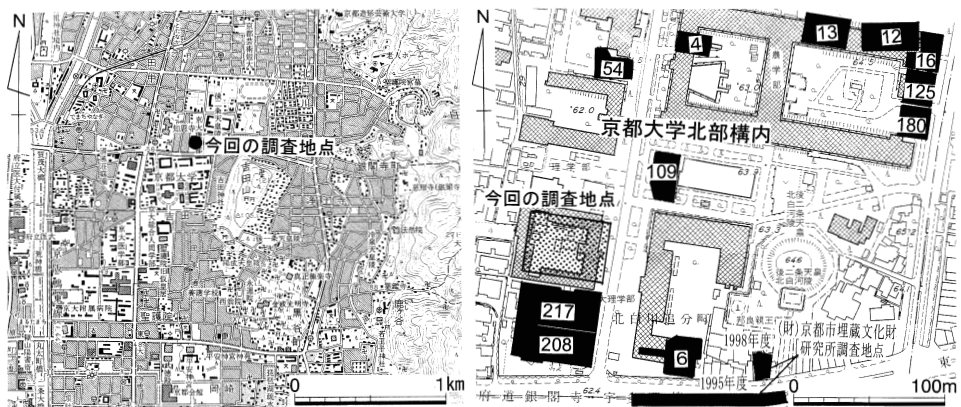


図86 調査区の位置(左:縮尺1/5万,右:縮尺1/5000)

*皇學館大学 **京都造形芸術大学大学院博士後期課程

以上のほか、水田構成層を突き破り黄色砂中に吹き上がる砂脈（噴砂）が随所で確認された。これらは、地震時の地盤の変化や強度を検討する素材として試料を提供し、地質学・土質工学的な解析の結果が報告されている〔関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編2002 pp.183-185, 竹村・三村2002〕。また、黄色砂をもたらした土石流についても、調査地の所見をもとに地質学の立場から構造が分析され、本書第Ⅱ部紀要に収録している。

そして、上層の堆積や遺構群は、黄色砂堆積後の開析で生じた段差や谷状低地が、弥生中期以降近代の田舎設置に至る長期の埋積で平坦地となった様子と、中世以降の著しい耕地化の状況を示している。中世都市京都近郊における開発と植生変遷の動向をより具体的に追究するために、堆積物を連続的に採取して花粉分析をおこなった（第7節）。

なお、発掘調査と整理作業は伊藤淳史と富井眞が担当し、梶原義実・北尾敬子・下坂澄子・菅野類・長尾玲・永井雄一郎・上杉和央・杉本真理子・松尾奈緒子・鈴木敬寛・小野多佳子・小西恵美の助力を得た。本章は、縄文・弥生時代の石器と第6節を富井、第4節を外山、第7節を上中、それ以外を伊藤が執筆し、全体を調整した。

2 層 位

調査前の地表面はほぼ平坦であったが、近・現代の堆積層である表土層を除去すると、調査区の東方が高く西方に低い状況が判明した。表土直下の第2層の上面は、東壁の灰褐色土が62.2m、西壁の赤褐色土が61.7mをはかる。そして、Y=2430付近を境として西へと下る段差があり、調査区の西半ではここに多数の層が埋積しているため、東半とは層序が異なっている。したがって、東壁、東西畔・西壁とでは互いに層位番号は共通していない。なお、東壁の第8層および西壁・東西畔の第13層については、上面に弥生時代前期の水田が確認されている層序であり、次節であらためて詳細を報告している。

東壁の層位（図87） 第2層灰褐色土は、近世の遺物包含層。第3層の黄灰色土、第4層の茶褐色土は中世の遺物包含層で、それぞれ15世紀代以降と、13・14世紀代を中心とする。X=2000付近より南においては、下層に東西方向にはしる流路SR1が埋積しており、その影響をうけて第3・4層は層厚が増すとともに、中世前半期の遺物包含層である第5層灰茶褐色土がさらに加わる。この流路SR1は、第7層の黄色砂を切って西流するもので、南側の立ち上がりは東壁ではあらわれていない。流路内の堆積a～h層のうち、下半部を占めるe層は、人頭程度までの礫を多数まじえた砂礫層で、洪水により短期間に埋積したものとみられ、流水による堆積であることを示すラミナが顕著に認められる部

層 位

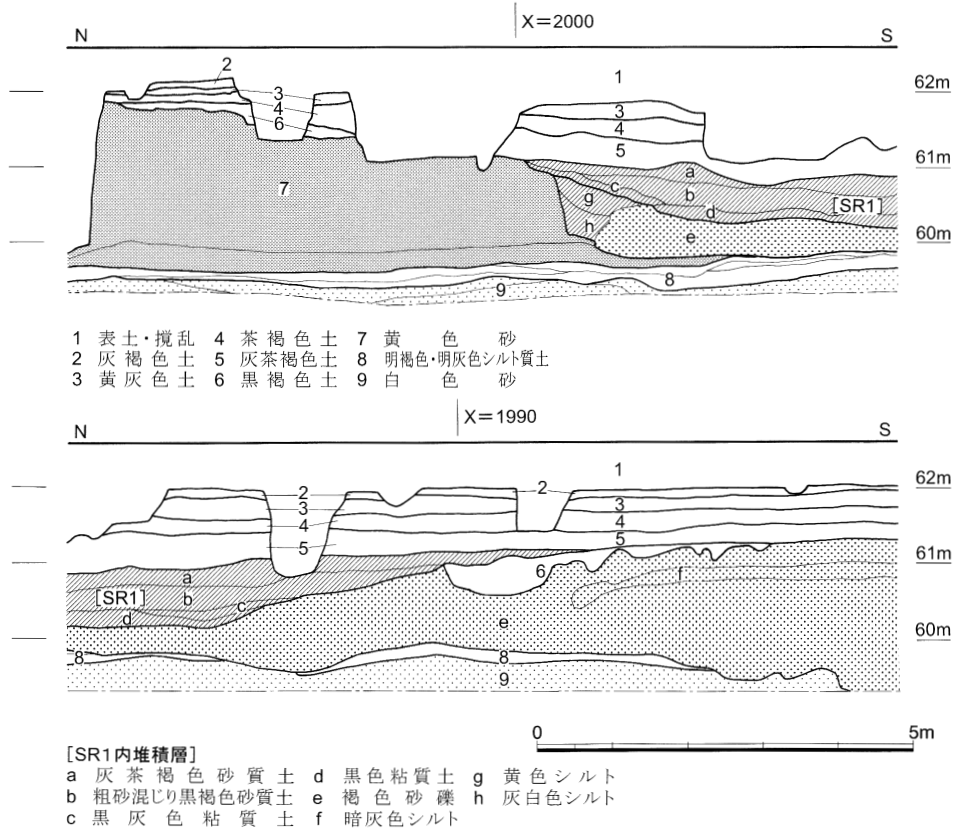


図87 調査区東壁南半(図114 a-a')の層位 縮尺1/100

分があるとともに、X=1985以南では、縄文晩期・弥生前期の遺物包含層第8層やその下の第9層白色砂も挟りながら深く埋積する。上半のa～d層は、砂礫埋積後に生じた幅10mほどの浅い窪地を埋めているもので、それぞれ白色粗砂を薄く介在させながら堆積する。図87においてはこの範囲をSR1として扱っている(狭義のSR1、以下SR1はこちらを指す)。上半のa層：灰茶褐色砂質土・b層：黒褐色砂質土は、10世紀代の遺物を含み、下半のc層：黒灰色粘質土・d層：黒色粘質土の包含遺物は少ないが、弥生中期～古墳時代のものが認められる。また、g・h層は、流路の北肩を早い段階で埋めていたとみられる砂層で、g層上面～上部にかけてで弥生中期後葉の土器の一括出土(SX5・6)や石庖丁の出土をみている。

以上の状況と、第7層の黄色砂が弥生前期末～中期初頭の一時기에想定される土石流堆積層であることを考慮すると、以下のように埋積過程を復元できる。すなわち、第7層を

京都大学北部構内B C28区の発掘調査

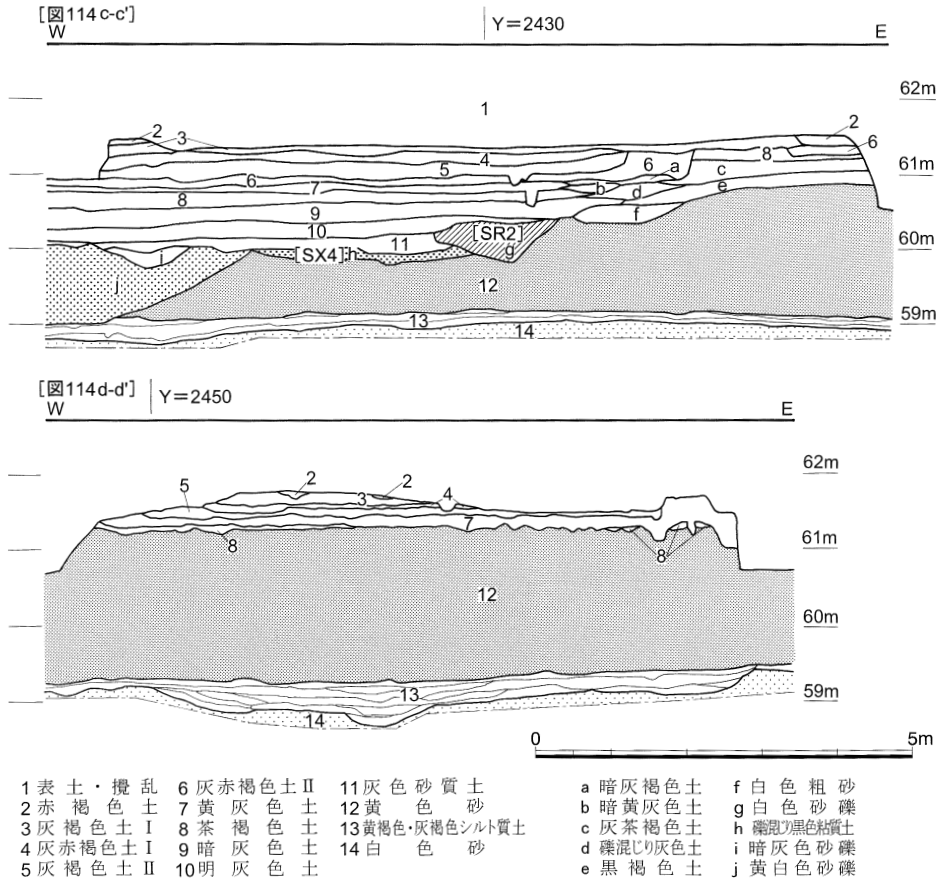


図88 東西畔南壁（図114c-c', d-d'）の層位 縮尺1/100

もたらした大規模な土石流の後、弥生中期後葉までの間に大規模な洪水によりSR1の最大輪郭が形成される。その後残された東西方向の浅い川状の窪地は、平安時代にかけて徐々に埋積し、幾分か影響をとどめながらも中世にいたって平坦地化している。なお第6層黒褐色土は、遺構などの埋土を中心にみられ、10世紀代の遺物を中心に包含する。SR1内のa・b層とは上下の関係にあるが、遺物内容に差はみられない。SR1の上部が埋積していく過程で小規模な流れの存在がうかがわれることから、10世紀代においても開析と埋積が周辺部で繰り返し生じていたことの反映とみられる。

東西畔の層位（図88） X=2010ラインに沿って設けた東西畔のうち、包含層の残っていた西半（図114c-c'）と東半（同d-d'）の南壁の状況を示す。西半は、Y=2430以東に西へ下る段差付近のみにみられる堆積a～g層がある。第2層～第6層は、それら

層 位

より上部の堆積である。第2層赤褐色土は、多くが表土に削平されているが、第4層灰赤褐色土Ⅰ・第6層灰赤褐色土Ⅱと同質の、固くしまった酸化鉄斑文の集積層である。特徴からみて水田耕作にともなう堆積だろう。いずれも近世遺物を包含しており、第3層灰褐色土Ⅰ以上の層では幕末期のものが含まれる。したがって、第2層・第3層は19世紀代後半、第4層以下がそれ以前、おおむね18世紀代に比定される。

灰赤褐色土Ⅱは、Y=2433付近で中世後半期の遺物包含層である第8層茶褐色土を50cm程度直線的に切り込んで段差を形成し、その西方1m程度でこの灰赤褐色土Ⅱが灰褐色土Ⅱに30cmほど切り込まれる。埋積の過程で徐々に段差が低くなりながら、その位置も西へ移動している状況を確認することができる。人為的な段差の形成は、段差内に堆積している中世後半期の第7層黄灰色土、第8層茶褐色土、斜面上に堆積するa・b層との関係から、中世末期まではさかのぼる可能性が高い。これより下層には、中世後半期の第9層暗灰色土、中世前半期の第10層明灰色土、10世紀代の第11層灰色砂質土が水平に堆積し、斜面でレンズ状に堆積している砂層や礫混じり層と互層を成していることから、古代・中世を通じて徐々に埋積していった様子が見られる。最下層にはh：礫混じり黒色粘質土やi：暗灰色砂礫がみられる。これらの包含遺物はきわめて少ないが、弥生中期以降のものが含まれ、段差の形成もその時期までさかのぼるとみられる。第12層黄色砂以下は、東壁の第7層以下と同じだが、ここでもj：黄白色砂礫の埋積する流路が黄色砂を切って流れる状況が観察される。この砂礫は、後述するように、南流するSR3にともなうもので、黄色砂埋積後にほどなく生じた大規模な流れとみられる。ここでの段差の形成要因であろう。

東半については、層序として全域で安定して検出されるのは、灰褐色土Ⅱ、黄灰色土の2層で、茶褐色土は部分的にしかみられない。中世前半期以前の土層の多くは削平されたのであろう。東端Y=2457付近では、灰褐色土Ⅱが西へ向かって段差状に落ち込む状況が確認された。水田が段差をもって連なっていた近世の耕地景観を反映するとみられる。

西壁の層位（図89） 表土以下第11層までは、上述の東西畔の層位と共通し、X=1993付近から北側にはほぼ水平に堆積している。それ以南の土層（a～e層）は乱れており、古代ないし中世の何らかの遺構の埋土である可能性が高いが、壁面での確認にとどまる。攪乱のため、第9層までとの相互の切り合い関係も不明であるが、平面的には、中世の段階には南から北へと下る明瞭な段差が区画となっていることが確認されている（図113）。この段差は、黄色砂の第12層を切るように東方からSR1の流れが及んだことにより形成されたとみられる。ただし、東壁においてはSR1の南肩の立ち上がりが確認されていない

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

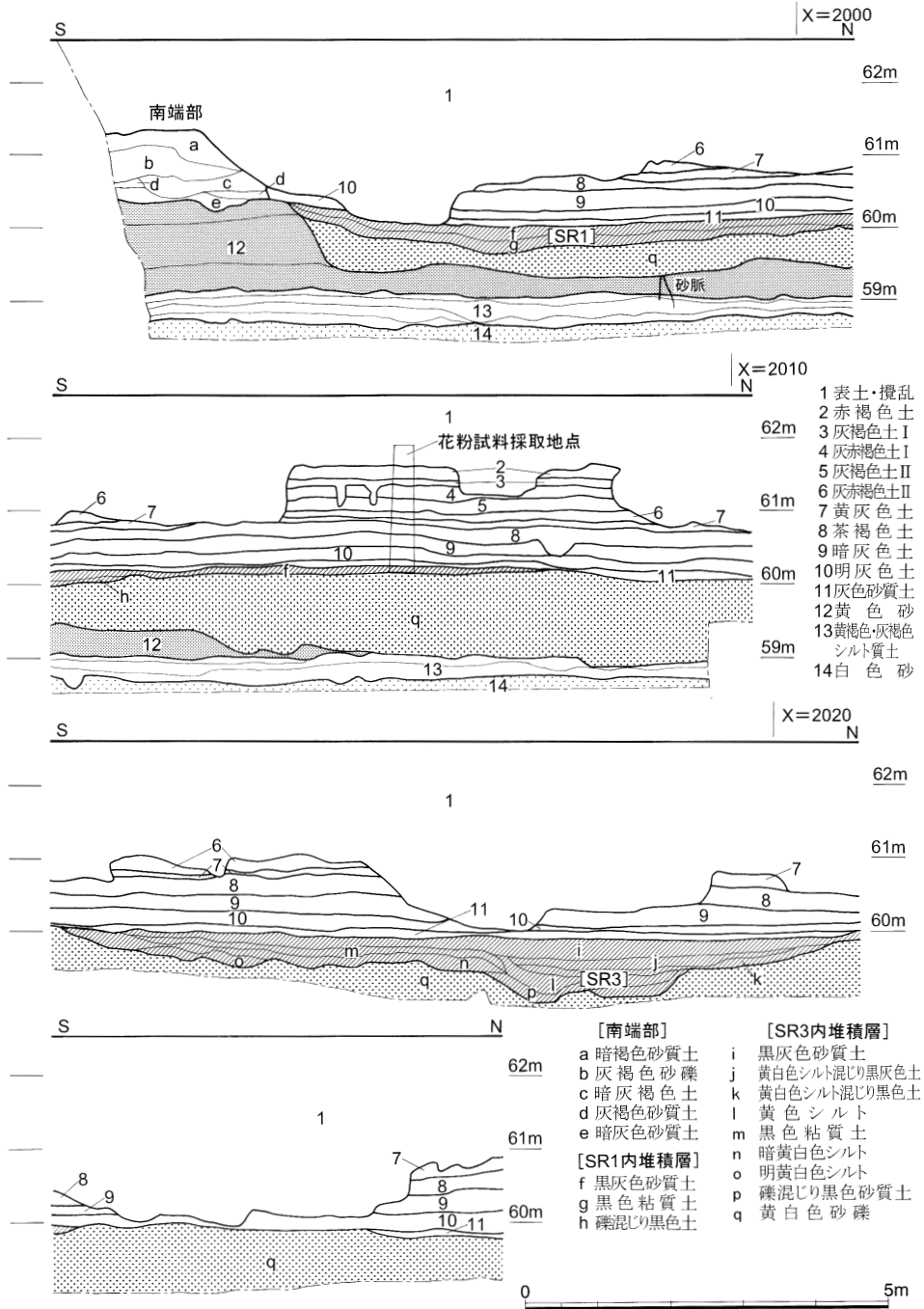


図89 調査区西壁 (図114 b - b') の層位 縮尺1/100

ので、SR1の流れは枝状に支流として分岐し、そのひとつが及んだものと理解される。

f～h層は、東壁のa～d層に対応するもので、SR1上部を埋積させている黒色の砂質土や粘質土である。また、i～p層は、X=2010～2020付近にかけて堆積している砂やシルト、一部に砂礫をまじえた黒色の砂質土や粘質土である。これらは、調査区の西北部を南流していたSR3を埋積させているもので、弥生中期以降の遺物が微量出土した。q層は、その下層にひろく堆積する黄白色砂礫で、第12層の黄色砂を切り、X=2005付近より北では層厚を増していき、第13層上面を削平して弥生前期末の小区画水田の一部を流失させるとともに、第14層白色砂にもおよぶようで、調査区西北隅では深さを確認できていない。南方では、SR1にともなう砂礫層と一体化しており、峻別できない。SR3は、SR1と同様に黄色砂を切って流れたもので、今回の調査区西端付近で合流するように生じた洪水層とみられる。上部を埋積させている土層の特徴や出土遺物からみて、発生時期はSR1とほぼ同じで、それ以後徐々に埋積していったものとみられる。

なお、黄色砂は、上半が比較的粒径が大きく下半が小さい傾向を示しており、層中には、周辺の既調査地点での所見と同様に1mを越える大きさの花崗岩が多数含まれていた。

3 弥生前期以前の遺跡

(1) 弥生前期の水田遺構（巻首図版，図版33・34，図90～97，表8）

水田の検出状況（図90・95，表8） 縄文晩期・弥生前期の遺物包含層（東壁の第8層・西壁の第13層）の上面で、小区画水田および周辺の微地形を良好な状態で検出した。黄色砂が、弥生前期末～中期初頭の一時期の土石流堆積層であり、今回も含めてこれより下層で弥生中期に下る遺物はまったく出土していないことから、弥生前期末段階の地表面がほぼそのまま遺存しているとみてよい。ただし、この土石流や、SR1・SR3などその後生じた洪水により、表面が損傷したり土壌が流出したと想定される部分があり、図90には範囲を示した。水田は東と西の2箇所があり、それぞれ東水田・西水田と呼ぶ。水田区画の番号・田面の平均標高・面積は図95と表8に示す。なお調査では、排土の都合から水田のある調査区北半と南西部を先行して完掘し、その後に残る南東部分を発掘した。

層位と土地条件（図91～94） 2つの水田域にまたがる東西方向（X=2010），東水田の南北方向（Y=2450），西水田の畦畔に直交する北東－南西方向（図90A－A'），西水田南壁際の土堤部分（図90B－B'）の層位を示す。黄色砂より下層で基本となる土層は、暗灰褐色砂質土（第2層）と黄褐色砂質土（第3層）で、水田畦畔や土堤部分を中心に黄

京都大学北部構内BC28区の発掘調査

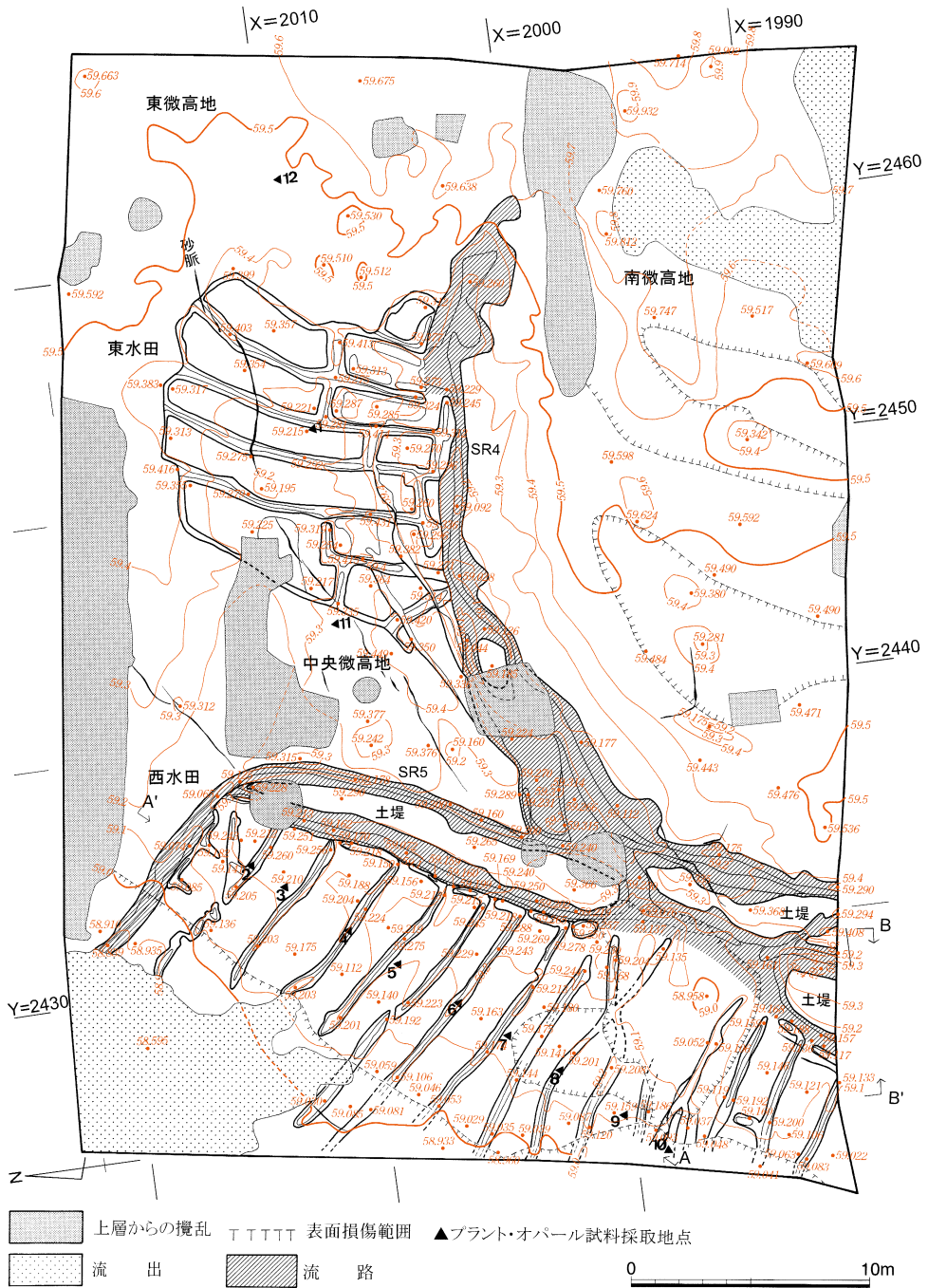


図90 黄色砂除去後の地形と遺構 縮尺1/300

弥生前期以前の遺跡

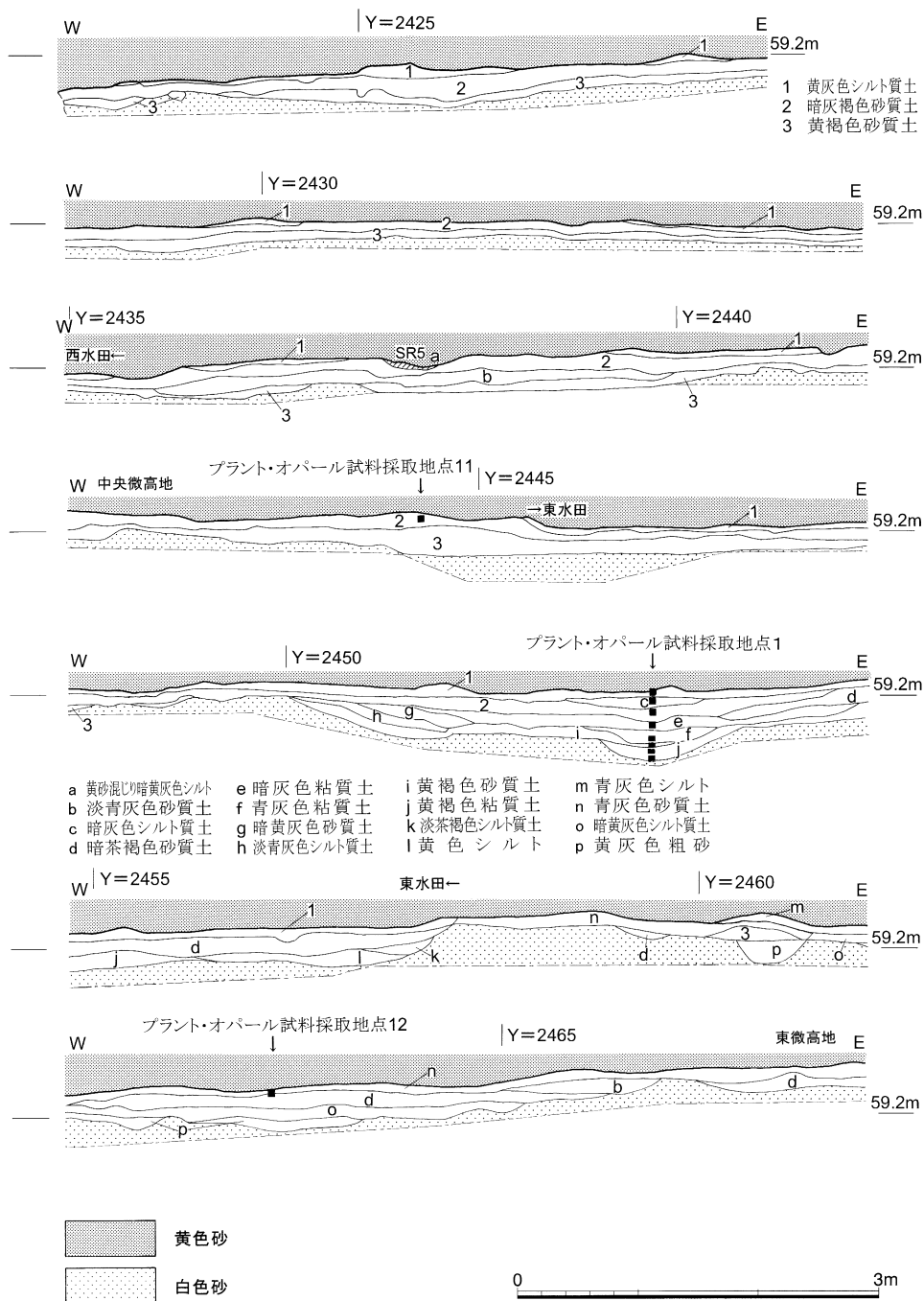


図91 東西畔 (X=2010) 南壁黄色砂以下の層位 縮尺1/60

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

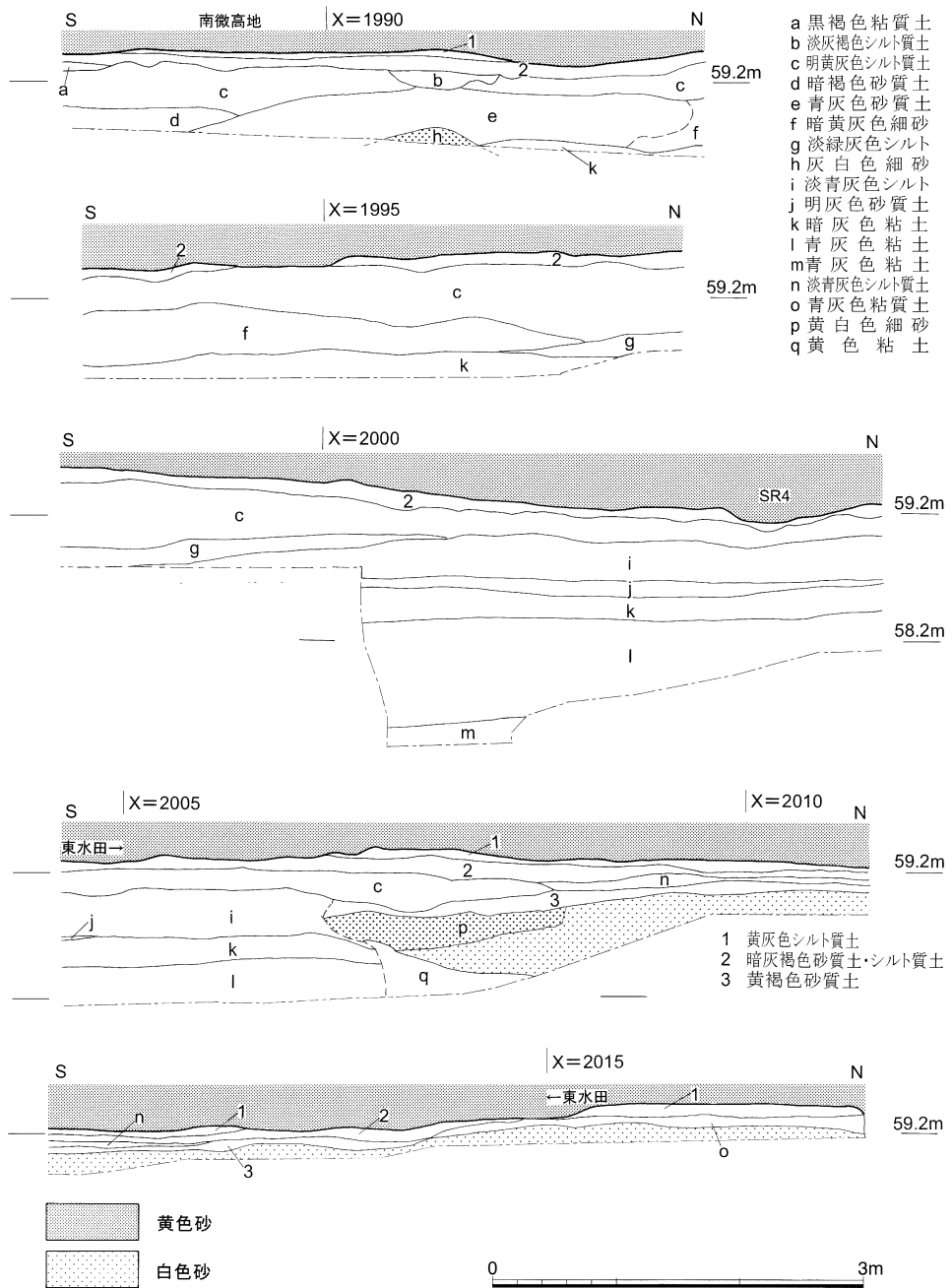


図92 南北畔 (Y=2450) 東壁黄色砂以下の層位 縮尺1/60

弥生前期以前の遺跡

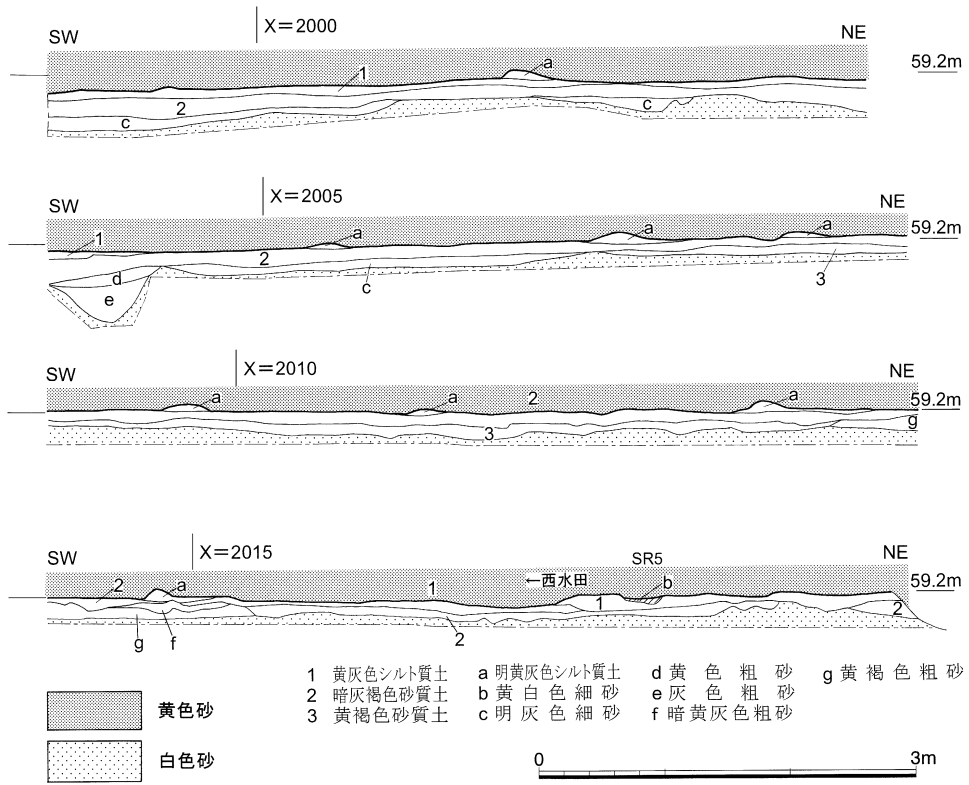


図93 西水田北東-南西方向 (図90A-A') 黄色砂以下の層位 縮尺1/60

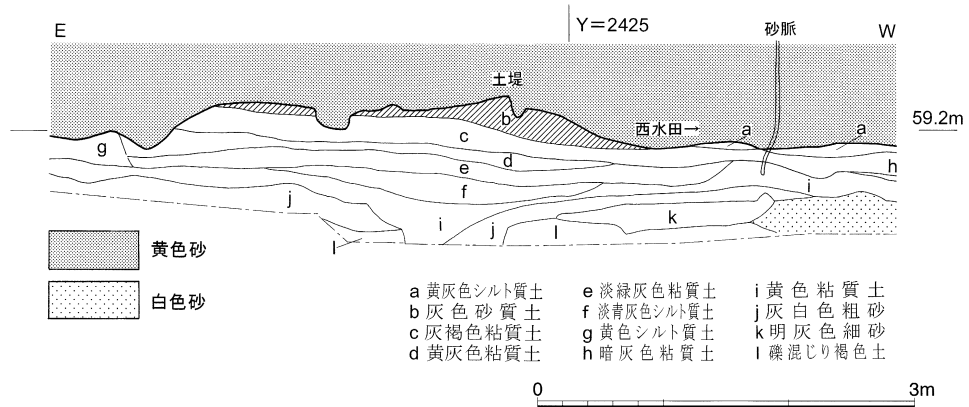


図94 調査区南壁西半 (図90B-B') 黄色砂以下の層位 縮尺1/60

灰色のシルト質土（第1層）が、それらの上面にのる。

東水田では、Y=2450以東において、第2層以下に窪地が存在し、複数層の粘質土や砂質土の堆積をみる。この窪地は、水田造営時までにはほぼ埋没していたとみられ、耕作に適切な場所として選択されたものとみられる。また、水田よりさらに東方一帯では、グライ化した青灰色の土壌が中心となっていく。そして、南北方向の層位でみると、X=2007付近で基盤の白色砂層がたちあがり、それより南方では強くグライ化した厚い粘土層やシルト層の複数の堆積が深さ1.5m以上はつづいていることを確認した（図92c～m層）。c層からは、時期不明の土器片を採集しているが、それ以下については断面確認のための機械力掘削にとどまり、遺物を確認していない。これらは、白色砂層もふくめて、晩期にいたって埋積し安定化する以前の谷の堆積で、起伏に富んだ複雑な地形環境を示すといえ、南微高地や流路SR4は、その影響を強く受けている。一方、西水田では、下層の基盤は白色砂であり、層序も比較的安定している。したがって西水田は、基盤が白色砂の範囲を中心に選択して、排水不良の粘質土の部分をできるだけ避けて設けた可能性がある。

地 形（図90・95） 東水田と西水田の間には、水田面との比高差20cmあまりでゆるやかに高まる空閑地が5mほどある（中央微高地）。また、東水田の南方一帯は、東方から張り出してきた比高差60cmあまりに達する尾根状の高まりがあり（南微高地）、その東方一帯は、比高差20cm前後の平坦地がひろがる（東微高地）。調査区全体の地形を俯瞰すると、南方にある尾根状の張り出しが地形の大勢を決定づけており、水田は、その縁部に形成された窪地や平坦地を巧みに利用するように設けていると言える。なお、東水田の南端は、西方の中央微高地に連なるような東西方向の高まりとなっており、そこに階段状に下る複数の段差がみられる（図版33-2参照）。これらは畦畔を分断しており、また地震にともなう砂脈の方向におおむね一致していることから、人工の造作ではなく、地震時の隆起と沈降など地盤変動により生じたものと判断する。したがって東水田は、現状では区画8が深く凹む地形となっているが、本来はもう少し平坦であった可能性が高い。

畦畔と流路（図90） 畦畔は、いずれも幅30cm高さ10cm程度の断面蒲鉾形を呈し、東水田は南北、西水田は北西-南東方向に配される。東水田には、内部区画のための東西方向の短畦畔があるが、西水田では流路と接する東端のみを水口を設けながら区切る形態が基本で、細長い区画が整然と並ぶ。また、東水田では、周囲からの導水や防水のための施設をとくには認めない。南側に、幅1m深さ30cm程度でおおむね西方へ向かって下る流路SR4があり、ここに排水されたと推察されるが、自然地形をそのまま活かしたものとみら

弥生前期以前の遺跡

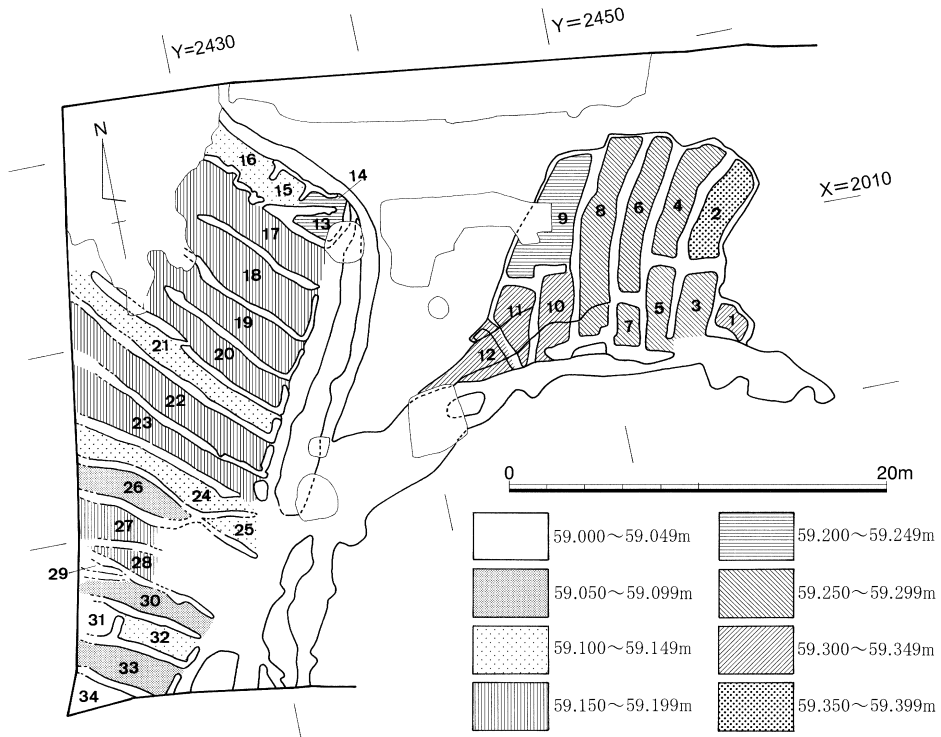


図95 水田面の平均標高 縮尺1/400

表8 各水田区画の田面平均標高と面積

地区	番号	平均標高(m)	面積(㎡)	地区	番号	平均標高(m)	面積(㎡)
東水田	1	59.332	1.994	西水田	13	59.228	2.662
東水田	2	59.357	8.761	西水田	14	59.228	1.455
東水田	3	59.293	5.809	西水田	15	59.141	3.214
東水田	4	59.288	9.385	西水田	16	59.141	5.880
東水田	5	59.286	5.379	西水田	17	59.199	17.976
東水田	6	59.266	10.079	西水田	18	59.189	16.762
東水田	7	59.270	2.665	西水田	19	59.162	13.647
東水田	8	59.256	16.069	西水田	20	59.178	14.562
東水田	9	59.221	15.088	西水田	21	59.129	14.221
東水田	10	59.311	6.342	西水田	22	59.157	15.057
東水田	11	59.339	5.711	西水田	23	59.180	12.648
東水田	12	59.343	3.938	西水田	24	59.104	11.508
東全域		59.297	137.620	西水田	25	59.104	3.785
				西水田	26	59.087	7.318
				西水田	27	59.159	8.464
				西水田	28	59.159	7.802
				西水田	29	59.037	0.733
				西水田	30	59.084	7.040
				西水田	31	59.048	1.153
				西水田	32	59.146	5.366
				西水田	33	59.097	7.799
				西水田	34	59.022	3.812
				西全域		59.135	281.746

備考

- * 面積は畦畔の内法で算出した
- * 攪乱によるあきらかな欠落は想定復元した
- * 西水田は残存する範囲の面積を表示した

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

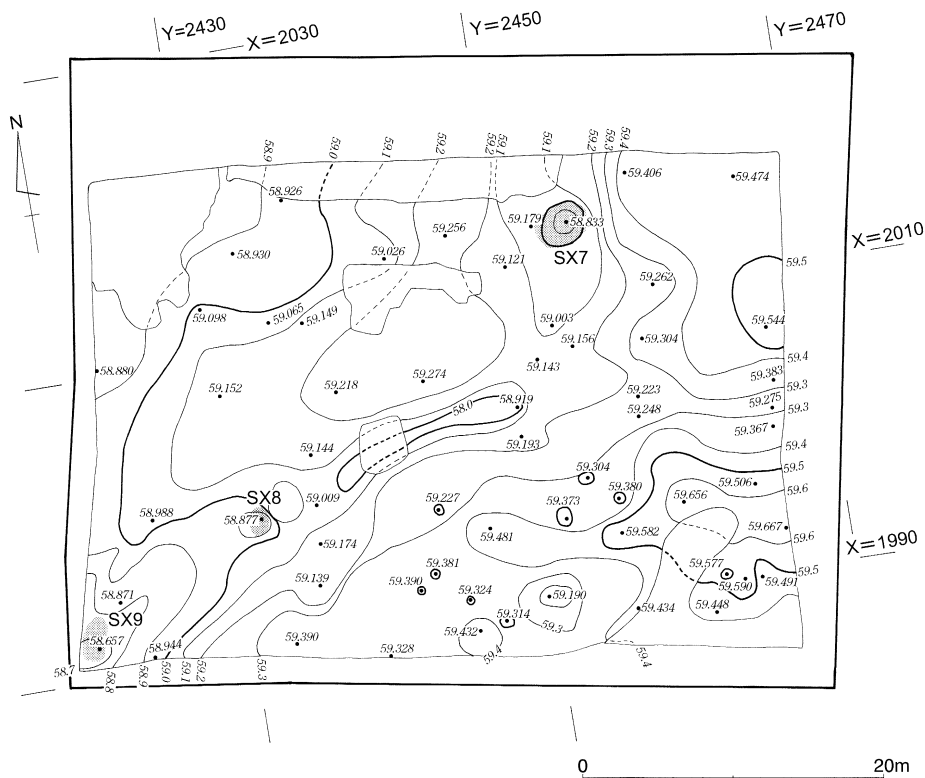


図96 遺物包含層完掘後（白色砂・青灰色砂質土上面）の地形 縮尺1/500

れ、改変の痕跡は確認されなかった。一方西水田では、東側に幅1 m比高差10cmあまりの土堤を設けるとともに、幅60cm程度の浅い流路SR5を東～北方にめぐらし、明らかに西側からの流水の管理調節をはかっている(図版33-3)。SR5は、一定方向に流れるものではなく、中央付近から南北の双方へ下るようになっており、東水田より平坦さの度合いの強い西水田に、広範に水をまくるための配慮を読みとることができる。こうした東・西両水田の異なるありようは、それぞれの立地する微地形への対応といえる。両水田が一連のものとして同時に機能していた可能性を十分に示す状況といえる。

遺物出土状況(図96・97) 黄色砂より下層の、黄灰色シルト質土(第1層)、暗灰褐色砂質土(第2層)、黄褐色砂質土(第3層)等からは総計4996点の遺物を取りあげた。水田範囲の内外を問わず層中に万遍なく遺物片が包含される状況が、全域に及んでおり、水田と関連づけられる出土状況にはない。また、細別した層位は、全域で面的に安定したのではなく、特定層に遺物が集中する状況もない。層位間での接合は多数みられる。これ

弥生前期以前の遺跡

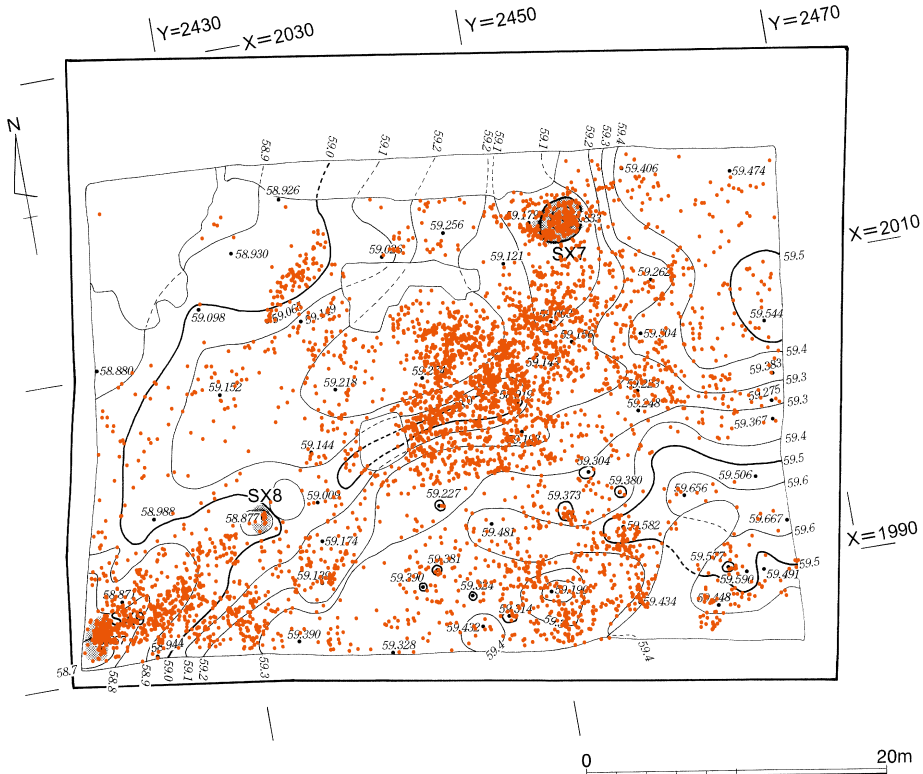


図97 遺物の出土傾向 (赤色のドット1つが遺物1点を表す) 縮尺1/500

ら遺物包含層掘り下げ後の白色砂（調査区南半では青灰色砂質土）上面の地形を図96に、また遺物の出土傾向をそれに重ねて図97に示した。出土密度の高い範囲が、調査区を東北東-西南西方向にはしる。これは、SR 4およびそれに先行して存在する谷状の地形部分におおむね相当しており、地層の堆積時に、自然の営為によってある程度は低い部分に集められた可能性が高い。ただし、密度の高い範囲は、そのなかでも谷状部の北側に一定程度偏っている。土器の磨耗もほとんどみられないことにも考慮するならば、廃棄はごく近傍で為されたもので、谷状部の北側一帯でとくに多く為されたもの、と判断される。

なお、互いに接合する大きな土器片を含む遺物集中地点が3カ所あり、それぞれSX 7～SX 9とした（図版34-4・5）。SX 7は、東水田の北縁部一帯で、大型の2条突帯深鉢（II 38）や特殊な沈線文土器（II 37）をはじめ、II 31・II 57・II 81・II 131・II 217・II 233などがまとまって出土した。SX 8は、突帯のめぐらない粗製深鉢の胴部破片がまとまっていた。SX 9は、頸部に沈線文をもつ大型壺II 39の胴部破片がまとまっていた。

(2) 土器・土製品 (図版35~41, 図98~106, 表9)

既述のように、細別した層位は、遺物の整理に有効な指標とはしがたいので、黄色砂より下層出土の土器・土製品としてまとめて、おおむね時代順に示す。便宜的に突帯文土器はすべて縄文晩期、遠賀川式土器を弥生前期として扱う。口縁部や有文の胴部破片はできるだけ呈示したが、すべてではない。種類別の内訳は表9を参照されたい。なお、いわゆる生駒西麓産とされる角閃石を多量に含む異質な胎土の土器は、断面表示を梨地とした。これらにも、暗茶褐色と暗赤褐色の2種の色調が認められる。

縄文後期の土器 (II 1~II 9) 晩期末の遺物に混じって、ごく少量の出土がある。おもに後期初頭~前葉に属する中津式から北白川上層式1期ごろまでの諸型式に比定される。例外はII 9で、後期末宮滝式、ないし晩期前葉に下る可能性もある。横走る凹線が施された胴部片で、暗茶褐色を呈する。南方50mの208地点でも微量出土している。

縄文晩期の土器 (II 10~II 164) 晩期末の突帯文土器が大多数を占めるなかに、晩期中葉にさかのぼるものが少量ある。まず底部以外をとりあげる。

II 10~II 16・II 20~II 23は、素縁の口縁部。口唇部は、II 11が篋刻み、II 21が面取りする以外は、丸く収める。II 10~II 12・II 20・II 22は、外面を撫でや篋削りで仕上げ、外に開き気味の口縁部で、晩期中葉篠原式の粗製深鉢だろう。口縁を短く外折させるII 23も、その可能性が高い。一方、砲弾形の器形で下から上に軽く削り上げるII 21は、晩期末の長原式に下るものだろう。II 13~II 15は内彎気味の、II 16は短く外反気味の、それぞれ浅鉢口縁部とみられる。II 17~II 19は、浅鉢の屈曲する胴部とみられ、II 16のような口縁部に対応するものだろう。II 16~II 19は比較的精良な胎土で器表面を平滑に仕上げている。

II 24~II 35・II 38・II 40~II 112は突帯文で飾る口縁部。多くは深鉢だが、II 26・II 33

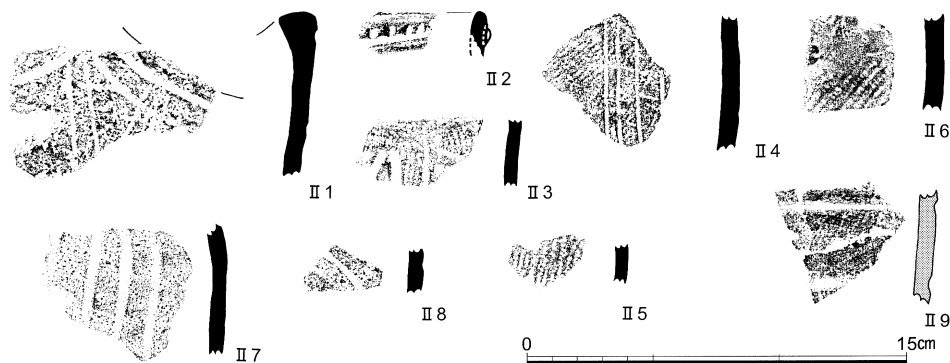


図98 縄文後期の土器 縮尺1/3

弥生前期以前の遺跡

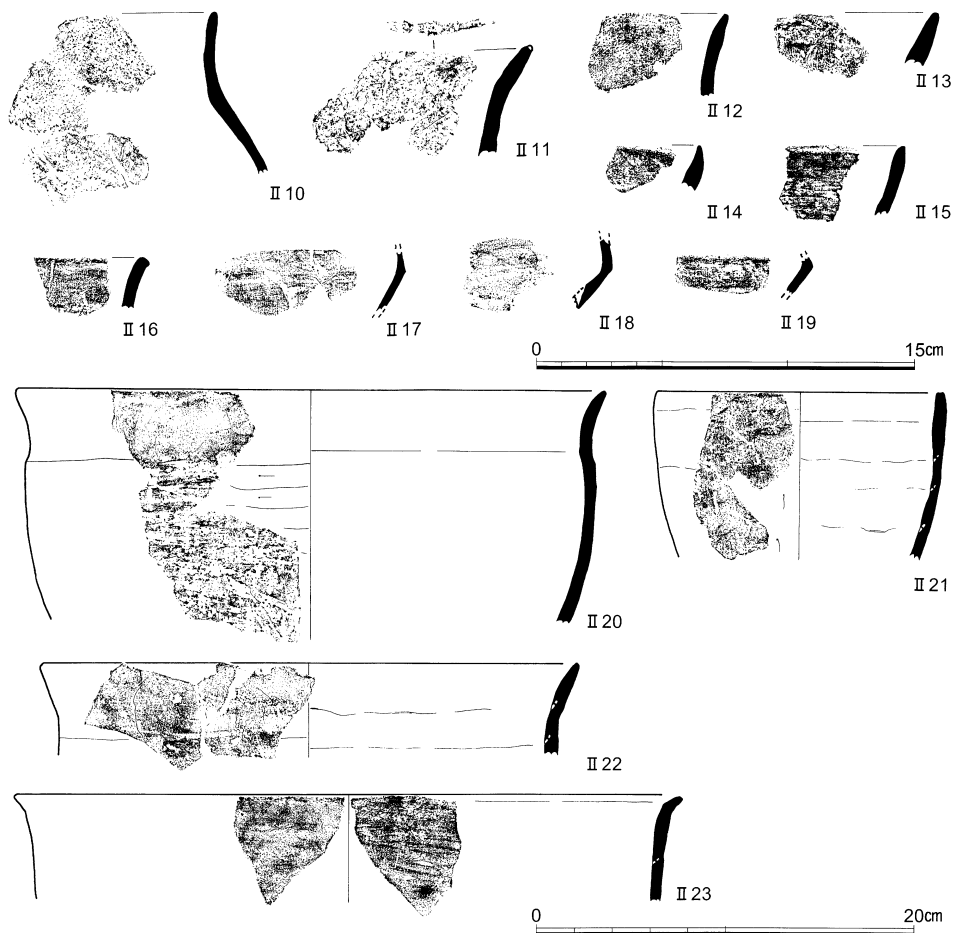


図99 縄文晩期の土器(Ⅰ) 縮尺1/3

は、口径と傾きからみて頸部のすぼまる壺状の器形となる可能性がある。口唇部に刻みを施すものはみられず、ほとんどが丸く収めて仕上げ、面取りするものはわずかである。また突帯貼り付け位置は、ほぼ8割が端部に接している(表9参照)。突帯上の装飾は、無刻(Ⅱ24・Ⅱ40～Ⅱ52)、V字状刻み(Ⅱ25・Ⅱ38・Ⅱ53～Ⅱ74)、D字状刻み(Ⅱ26～Ⅱ30・Ⅱ75～Ⅱ103)、O字状押捺(Ⅱ31～Ⅱ35・Ⅱ104～Ⅱ112)の大別4通りがあり、O字状押捺が他の3種に比べ若干少ない。胴部まで遺存して確実に1条突帯文深鉢と認定できるのはⅡ31、2条突帯文深鉢はⅡ29・Ⅱ38のみにとどまる。突帯のありようで特異なものとして、刻目突帯を2帯並行してめぐらせるⅡ32・Ⅱ38がある。同種の例は北部構内の234地点(B F 34区)で出土している〔千葉1998 I 43〕。Ⅱ38は口径30cmを越える大型品で、

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

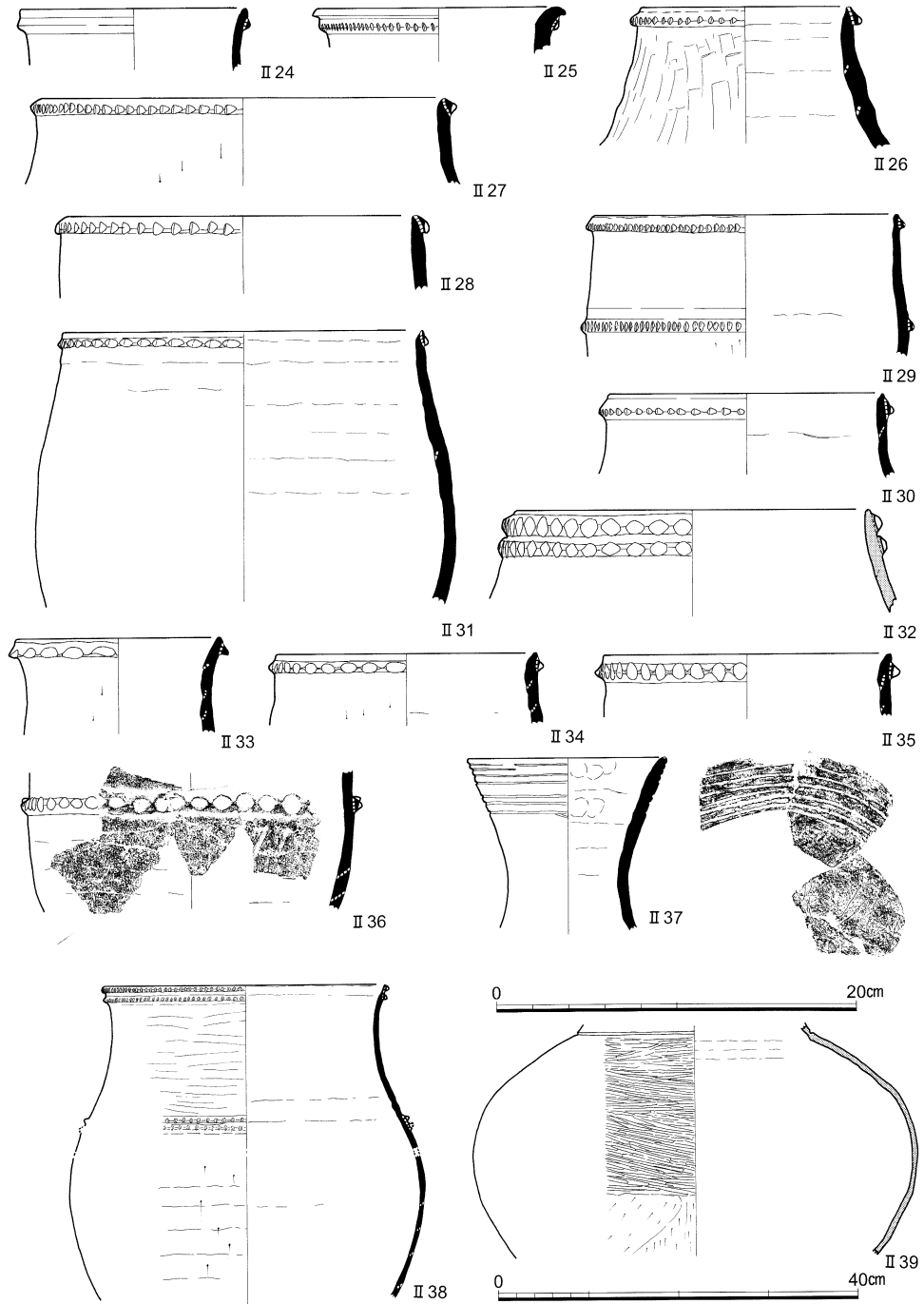


図100 縄文晩期の土器(2) II 24~II 37縮尺1/4, II 38・II 39縮尺1/8

弥生前期以前の遺跡

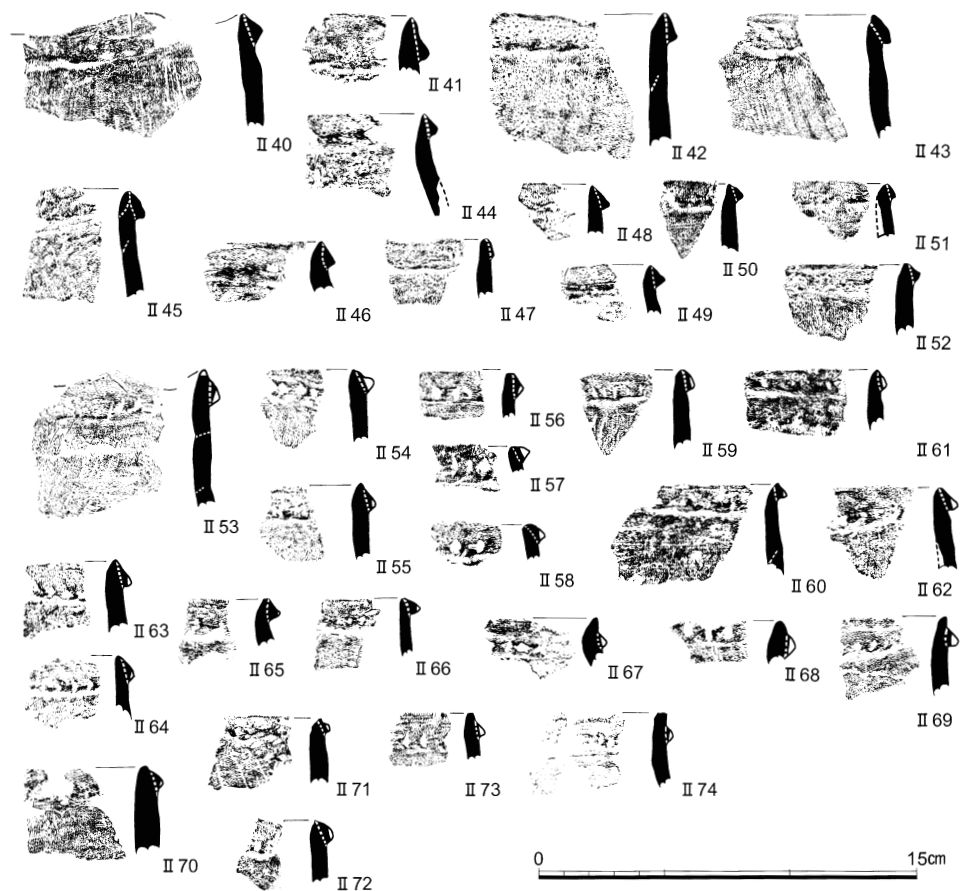


図101 縄文晩期の土器(3) 縮尺1/3

胴部突帯は剥離しているが、幅広い剥離痕と脱落した突帯の破片から、口縁部と同種の突帯がめぐっていることがわかる。このほか、口縁端部からの垂れ下がりよりの著しい突帯があり、仮に垂下三角（II 41・II 62・II 63・II 78・II 79・II 81・II 83・II 85）、垂下偏平（II 75～II 77・II 80・II 84）としておく。いずれも、突帯上に貼付時の指頭圧痕がよく観察されるが、後者の一群は幅広い突帯が造出され、細かなD字状刻みであることが共通する。器形では、II 40・II 53に波状口縁の特徴がみとめられ、II 53は、波頂部にも上面から刻みを施している。

II 37は、特殊土器。径7cm程度の細くくびれた部分から直線的に外方に立ち上がる器形で、全形は不詳。あるいは細頸壺状の器形か。端部は丸く収め、窺描沈線6条（一部7条）が施される。内面は、外面の施文に対応する部位を中心に指頭圧痕の凹凸が著しい。大粒

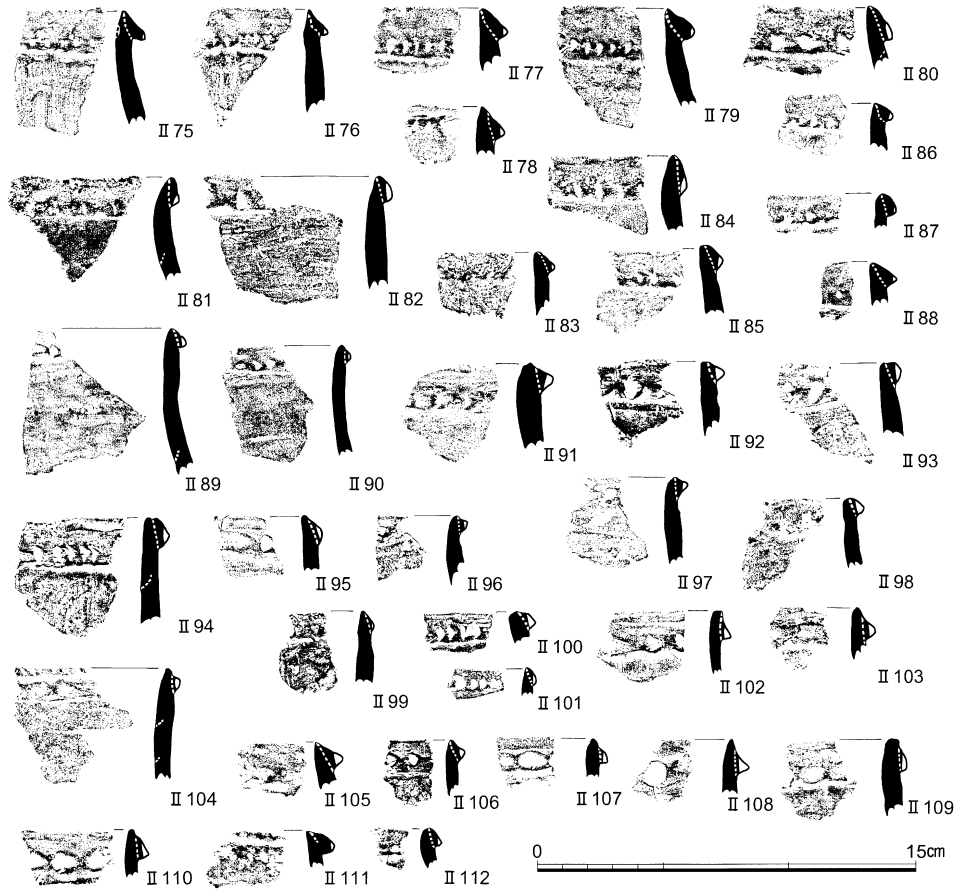


図102 縄文晩期の土器(4) 縮尺1/3

の石英砂粒を多量に含む胎土で、内外面は赤褐色、断面は黒色を呈する。遠賀川式土器とは特徴・質感ともに異なる。土器集中部S X 7からII 38などとともに出土しており、同時期の所産とみられるが、類例を知らない。

II 39は、S X 9で一括出土した胴部の最大径が50cm程度に達する大型壺の胴部。破片は多数あり、接合後の胴部上半はほぼ完存するが、下半はごく一部のみしか復元できない。頸部との境の屈曲部に、先の丸い棒状具により真横から施したと想定される幅3mmほどの太い沈線が1条めぐる。下半を下から上へ削り、上半を横位に粗く窺磨きして仕上げる。角閃石を多量に含む胎土で、暗茶褐色を呈し、いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれる特徴を示す。縄文晩期末の大型壺の類例は北部構内の180地点（B D 33区）にあり、胎土は共通しているが、沈線を施さず、外面の調整も細部が異なる〔浜崎・千葉1990 III 61〕。

弥生前期以前の遺跡



図103 縄文晩期の土器(5) 縮尺1/3

Ⅱ 36・Ⅱ 113～Ⅱ 164は突帯文で飾る胴部。突帯上の装飾は、口縁部と同様に、無刻（Ⅱ 113～Ⅱ 120）、V字状刻み（Ⅱ 121～Ⅱ 132）、D字状刻み（Ⅱ 133～Ⅱ 154）、O字状押捺（Ⅱ 155～Ⅱ 164）の大別4通りがある。ここでは無刻のものが他の3種に比べて若干少ない。突帯の形状は、口縁部と同様に垂れ下がる特徴をもつものが垂下三角（Ⅱ 121～Ⅱ 126・Ⅱ 135～Ⅱ 140）および垂下偏平（Ⅱ 134）として区別されるが、後者のように偏平化したものは1点にとどまっている。外面の調整は、Ⅱ 38のように、胴部の突帯以下を縦位方向の削り、それより上部は横位や縦位に板状工具で撫でて平滑にするのが基本となっている。

なお、突帯を有する胴部の破片は、基本的に2条突帯文深鉢の胴部とみなしてよい。これら胴部突帯の出土点数は、口縁部突帯の出土点数とほぼ等しいので、1条突帯文深鉢と2条突帯文深鉢の比率は、それほど違わなかったものと推察される。ただし、無刻の突帯や垂下偏平の形態的特徴を示すものは、明らかに胴部破片での比率が低く、1条突帯文深鉢に偏る属性といえる（表9）。

弥生前期の土器（Ⅱ 165～Ⅱ 194） いわゆる遠賀川式土器あるいはそれと強い関連を有する土器をまとめて示す。無文の小破片で帰属の曖昧なものを極力含めても、出土総量の2%あまり、文様などから限定できるものはさらにその半数の1%程度しかない。

Ⅱ 165～Ⅱ 185は壺形土器の口縁部～胴部。装飾は5条までの篋描沈線文を中心とするが、Ⅱ 182・Ⅱ 183には貼付突帯の剝離痕と下書の沈線がある。Ⅱ 169は頸部とみられるが、横位の多条沈線の下を斜方向の沈線で埋める特異なもの。Ⅱ 170～Ⅱ 172・Ⅱ 175は胴部上半で、沈線で施文しない側を篋磨きでわずかに低めて段差を造り出す。Ⅱ 177は斜方向の弧線が浅い沈線で描かれており、斜軸木葉文のモチーフの一部分と思われる。Ⅱ 178の小破片もその種のモチーフの可能性もある。Ⅱ 181は、横位の沈線文の上に、2条の連弧文風のモチーフを組み合わせている。Ⅱ 184は、無頸壺の口縁部かとみられ、端部に沿って篋描沈線と刻目突帯を並行させる。Ⅱ 185はまっすぐ立ち上がる口縁部片。甕の可能性もある。端面を刻み、斜方向の沈線文と端部に沿う1条の篋描沈線文という特異な構成である。

Ⅱ 186は笠形を呈する壺用の蓋。全面を丁寧に磨いている。

Ⅱ 187～Ⅱ 194は甕。Ⅱ 187は、口縁端部が玉縁状に肥厚し、その上端部に上から細かなD字状刻みを施す。頸部はちょうど施文部で破損しており、沈線文の存在は確実だが詳細は不明。胎土中には細かな雲母片を含み、暗赤褐色を呈する。これは、明らかにⅡ 188以下と特徴を違えており、伊勢湾地方西岸部から尾張地域北部にかけて分布して「亜流遠賀川式土器」と呼ばれる土器群の特徴といえる〔鈴木1990〕。本例も、当該地域からの搬入品で

弥生前期以前の遺跡

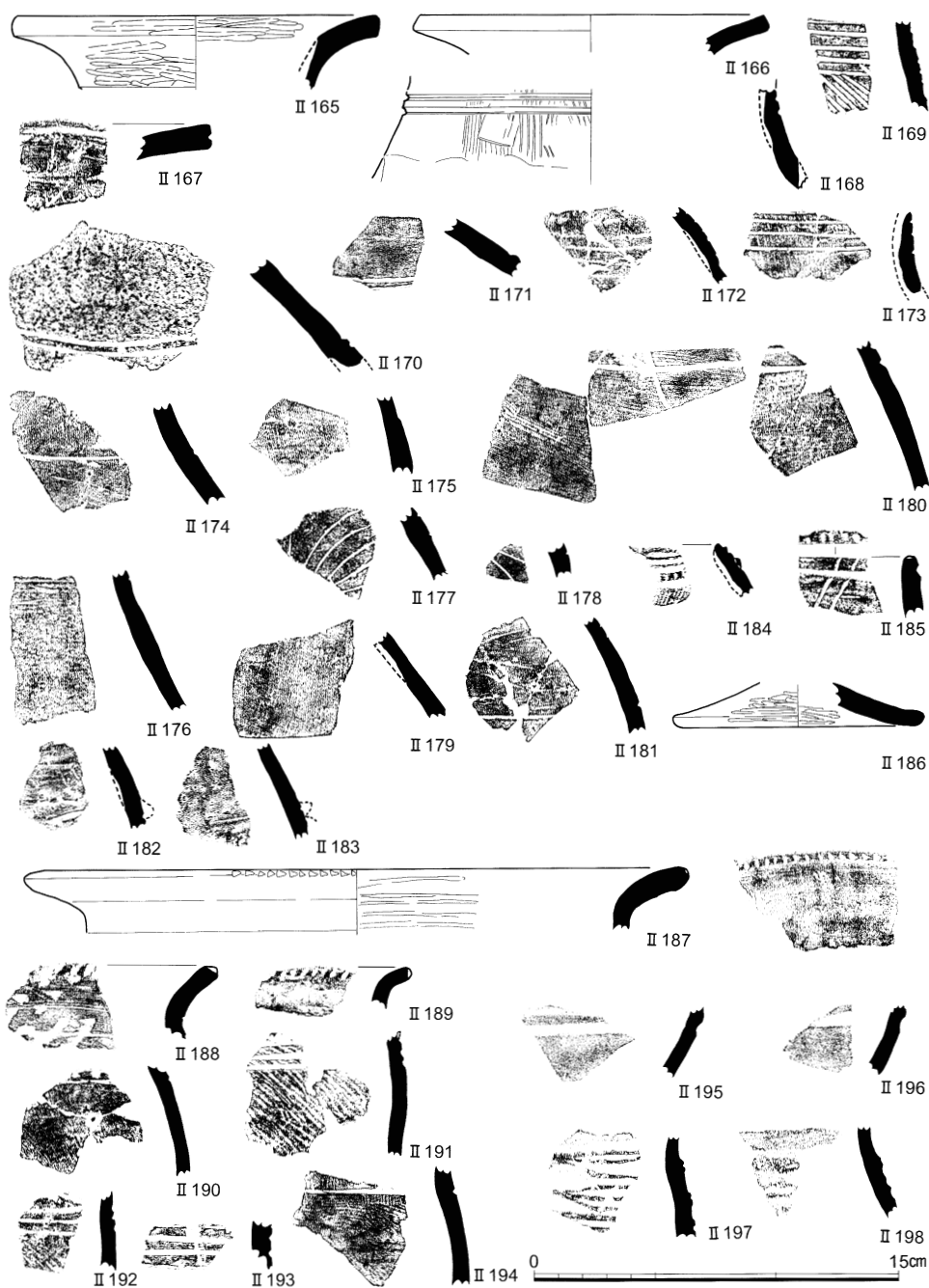


図104 弥生前期の土器（II 165～II 194），浮線文土器（II 195～II 198） 縮尺1/3

あろう。Ⅱ188・Ⅱ189の口縁部は、端面を正面から大きくV字状に刻んでおり、大粒の石英砂流を含む胎土で淡黄褐色を呈する。Ⅱ190～Ⅱ194は、頸部～胴部の破片で、頸部には1～4条の沈線文がめぐり、外面は刷毛目調整する。

浮線文土器（Ⅱ195～Ⅱ198） 中部高地地方をおもな分布範囲とし、浮き彫り風に造り出した線により装飾して浮線文(系)土器と呼ばれる特徴をもつものが4点確認された。趣の異なる2種に分けられる。Ⅱ195・Ⅱ196は、ともに鉢状の器形の胴部片とみられ、幅5mmほどの横位の凹線部と隆線部がのこる。内外面とも横位の篋磨きを基調として器表面を平滑に整える。微小な石英砂粒や雲母片を含むが精良な胎土で、内面は黒褐色、外面は淡褐色を呈する。一方、Ⅱ197・Ⅱ198は、精良さがやや劣るもので、壺状の器形の肩部付近かとみられる。Ⅱ198は器表面が荒れており判然としないが、残りのよいⅡ197によると、破片上端に無文部、その下に、篋磨きにより造り出された細い隆線によって横長のレンズ状や三叉状のモチーフを施している。内面はやや粗雑な撫で仕上げで、凹凸がある。微少な石英砂粒を多く含む胎土で、暗灰褐色を呈する。文様モチーフは石川日出志氏の分類のa2類に相当するとみられ〔石川1985〕、氏の第2群土器、浮線文第2期の離山式に並行する時期の資料と位置づけられる。なお、4点は互いに離れて出土しているが、類似するⅡ195・Ⅱ196とⅡ197・Ⅱ198はそれぞれ同一個体である可能性もある。

底部（Ⅱ199～Ⅱ233） 縄文晩期か弥生前期か判別できない小片も多い。おおむね底径の小さな順に、各時期の底部をまとめて示した。Ⅱ199～Ⅱ201のように、径4cm程度の突出気味の例は、確実に縄文晩期後葉といえる。Ⅱ202は、厚みを持たない底部で、晩期中葉にさかのぼる可能性がある。このほか呈示したなかでは、形態的特徴と外面の磨きや撫で調整の丁寧さから、Ⅱ206・Ⅱ210・Ⅱ217・Ⅱ231・Ⅱ232は弥生前期の遠賀川式土器の可能性が高いと判断している。それ以外はほとんど縄文晩期後葉の所産とおもわれ、とくに径の小さなものを中心に、内面側が円盤状に剝離している事例が多くみられる点が注意される。遠賀川式土器にはみられない現象であり、製作技法の違いを反映しているのだろう。Ⅱ233は、縦位の粗い条痕調整がみられる底部付近の破片である。

環状土製品（Ⅱ234～Ⅱ238） 径1.0～1.5cm程度の丸い棒状製品の断片が5点出土している。いずれも弧を描くような形状とみられるので、仮に環状土製品としておく。Ⅱ234はいわゆる生駒西麓産の胎土による製品で、暗茶褐色を呈する。Ⅱ236は赤褐色、Ⅱ235・Ⅱ237・Ⅱ238は外表面が灰白色で内側が黒色を呈する。Ⅱ237とⅡ238は特徴が類似しており同一個体の可能性もある。類似する土製品は、約1km南方の吉田近衛町における

弥生前期以前の遺跡

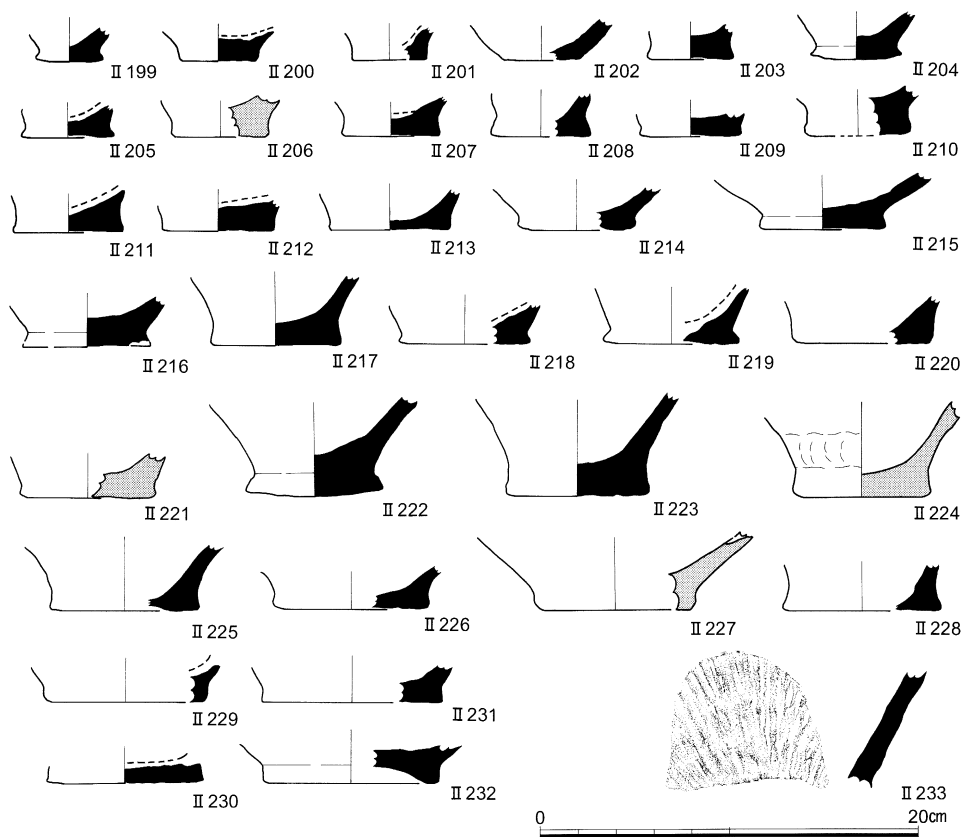


図105 縄文晩期・弥生前期土器の底部 縮尺1/4

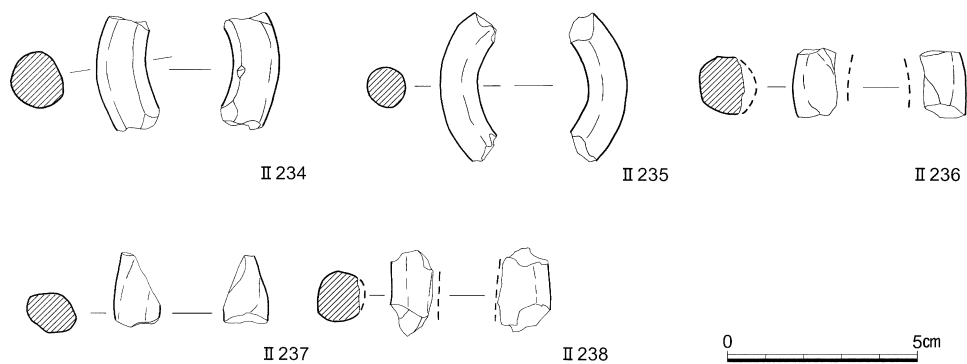


図106 環状土製品 縮尺1/2

調査で出土している〔南編1989 第93図〕。

出土土器の編年的位置（表9） 以上の土器は、微量の後期以前の資料を除くと、縄文晩期～弥生前期の複数土器型式を含み、単一時期の所産ではない。うち、少量の素縁の深鉢と浅鉢の一部は、おおむね晩期中葉の篠原式に比定される。主体を占める突帯文深鉢は、口唇部を刻むものがまったくないこと、また面取りするものもわずかであること、突帯は口縁端部に接して貼り付けられるものが主体となること、2条突帯文深鉢が多数と想定されること、などから、滋賀里Ⅳ式に比定されるものを欠き、船橋式と長原式の双方で構成されるといえる。そのなかで、著しく垂下した突帯に細かな刻目を施す一群は、より新相に位置づけられよう。一方で、おおぶりのD字状刻みやO字状押捺をしっかりと施す事例は、どちらかと言えば古相の特徴を示すといえよう。これらのいずれかに偏る構成ではないので、船橋式・長原式の時間幅での継続的な活動の反映ととらえるべきであろう。

少量みられた遠賀川式土器には、中段階と新段階の双方が含まれる。そして、沈線文の多条化の度合いが乏しく、貼付突帯も多条化したものが見られないことから、新段階でも前半期までにとどまるものと評価する。

表9 型式別出土点数

突帯文土器口縁部				無突帯（素縁）口縁部			
端部／突帯位置	端部接	端部離	計	端部／装飾	有刻	無刻	計
面取有	2	4	6	面取有	1	1	2
面取無	119	27	146	面取無	0	16	16
計	121	31	152	計	1	17	18

口縁部突帯の特徴							胴部突帯の特徴						
形状／刻み	D字	V字	O字	無刻	不明	計	形状／刻み	D字	V字	O字	無刻	不明	計
三角	37	30	18	33	21	139	三角	30	39	26	12	27	134
垂下扁平	5	0	0	0	0	5	垂下扁平	1	0	0	0	0	1
垂下三角	5	2	0	1	0	8	垂下三角	8	6	0	0	0	14
計	47	32	18	34	21	152	計	39	45	26	12	27	149

弥生土器の内訳		その他の土器等	
種類	点数	種類	点数
壺口縁部片	6	浮線文	4
壺有文胴部片	22	縄文後期以前	12
無頸壺	2	各期底部	58
甕口縁	6		
甕有文頸部片	8		
計	44		

(3) 石器 (図版42・43, 図107~110, 表10~13)

層厚が平均して20cm程度の縄文晩期中葉から弥生前期末までの遺物包含層(黄灰色・暗灰褐色シルト質土)から出土した。現地調査は、約20名の作業員(発掘経験者)による手ガリや手スコを用いた人力発掘であり、土壌洗浄などは一切していないので、回収できた石器は現地で肉眼で石器と認識されたもののみで、微細剥片は回収し損ねていると思われる。出土石器については、そのほとんどが出土地点を記録されている(表10)。しかし出土層は、シルト質土であるとはいえ、あまり土壌化の進んでいないことと、水田に供するほどに水の影響を無視できない環境であることから、礫石器は容易には原位置を損なわないと考えられるものの、剥片石器は原位置を保っていないものが多いと思われる。また、遺物の原位置取り上げ時には人工的に4層に区分して層位を記録したが、東西両方の水田域でも微高地でも、土器型式・石器製作技法という点では層位的な差異はうかがえない。そこで、この層から出土した石器全体を、時間的にひとまとまりの石器群とみなして検討する。なお、出土石器の多くに対し、器面観察に効果的な、超音波洗浄を行った。

出土した石器は、剥片剥離による石器68点(剥片を含む)、礫石器7点であり、それぞれ1点ずつを除いて原位置が記録されている。剥片剥離による石器の石材は、チャート2点と粘板岩3点の他はすべてサヌカイトであるが、肉眼で見える限りサヌカイトにも何種類もあり、白味がかったものや、1mmほどの白い斑点を多く含むものなどがある。細部調整の施された剥片石器では、未製品や破損品を含め石鏃が8点(チャート製1点)のほかに、刃器5点(粘板岩製2点)と錐2点がある。また、いわゆる楔形石核が8点はある。刃器と錐については、高倍率顕微鏡によって使用痕観察を試みたが、錐1点に磨滅痕が認められた他は、線状痕や光沢などの明瞭な使用痕を確認できなかった。68点の剥片石器のうち、叩き潰したような線状打面でも主剥離面の縦断面形が直線的になったり、打点が残っていても打点付近に階段状の細かい剥離が多数認められたり、縦長の先行剥離面がヒンジを生じていたりするような、挟み撃ちがおこなわれたと思われるものは38点はある(56%)。しかし、チャートや粘板岩の剥片石器には、そうした挟み撃ちの痕跡を積極的には見出しがたいので、63点あるサヌカイトだけで見るとその割合は60%(38/63)を超える。

剥片石器の特徴を、製作技術的観点から把握しようとする場合、製品は一点からでも多くの情報を引き出せることは無論であるけれども、いろいろな形状の素材から製品の形態を獲得するまでの一連の製作工程においては、一点の製品製作のために多数の剥片が生じている。つまり、剥片は一点ではあまり多くの情報をもちえないけれども、剥片のまとも

京都大学北部構内BC28区の発掘調査

表10 原位置取り上げ石器等一覧

取上番号	報告番号	X座標	Y座標	標高	地点名	層位名	分類	挟み撃ち
422	II 251	2009.095	2451.605	59.116	東水田	下層	楔形石核	○
504	—	2009.015	2457.525	59.195	東水田	最下層	自然石か	×
554	—	2009.046	2452.203	59.126	東水田	最下層	自然石か	×
559	—	2009.241	2459.924	59.261	東微高地	砂礫	楔か	○
575	II 244	2011.697	2449.426	59.173	東水田	上層	挟み撃ち剥片	○
820	—	2007.203	2447.698	59.343	東水田	上層	挟み撃ち剥片	○
848	—	2004.109	2451.280	59.213	S R 4	上層	楔か	○
903	—	2002.271	2461.284	59.438	東微高地	中層	挟み撃ち剥片	○
939	—	2015.116	2452.563	59.353	東水田	上面	楔か	○
941	—	2013.762	2452.854	59.262	東水田	上面	挟み撃ち剥片	○
1088	—	2001.488	2451.068	59.228	南微高地	中層	自然石か	×
1102	II 267	2004.047	2452.097	59.161	S R 4 底面	中層	チャート石鏃	—
1150	—	2008.679	2446.094	59.270	中央微高地	上層	挟み撃ち剥片か	○
1177	II 272	2011.225	2452.135	59.203	東水田	中層	敲石	×
1193	II 258	2008.735	2457.299	59.309	東水田	中層	刃器	×
1230	—	2000.143	2444.328	59.348	南微高地	上層	剥片	—
1231	—	1999.856	2444.602	59.392	南微高地	上層	挟み撃ち剥片	○
1335	II 249	2003.764	2455.062	59.170	S R 4 底面	中層	楔形石核	○
1354	II 248	2000.027	2442.949	59.302	南微高地	上層	楔形石核	○
1384	II 256	2004.040	2455.348	59.219	東水田	中層	錐	—
1551	II 260	2012.195	2457.761	59.264	東水田	中層	石鏃	—
1552	—	2011.340	2458.267	59.289	東水田	中層	楔か	○
1573	II 250	2008.571	2452.084	59.151	東水田	中層	楔形石核	○
1657	—	2011.409	2456.773	59.279	東水田	中層	チャート剥片	×
1688	II 274	2008.448	2449.369	59.252	東水田	中層	磨石	×
1724	—	2002.776	2446.592	59.141	S R 4	中層	楔か	○
1864	—	2014.899	2436.014	59.163	西水田	上層	剥片	—
1940	—	2005.028	2456.312	59.236	東水田	下層	自然石か	×
2025	—	2003.429	2443.792	59.075	S R 4	中層	剥片	—
2037	—	2004.597	2448.572	59.124	S R 4	中層	楔か	○
2042	—	2005.028	2448.606	59.183	東水田	中層	挟み撃ち剥片	○
2110	—	2003.976	2457.692	59.273	東微高地	下層	挟み撃ち剥片	○
2134	—	2008.131	2431.257	59.196	西水田	上層	楔か	○
2177	II 265	2004.925	2443.028	59.106	中央微高地	下層	石鏃	—
2210	II 252	2016.211	2455.330	59.210	北微高地	下層	楔形石核	○
2314	II 269	2002.160	2430.471	59.193	西水田	上層	粘板岩刃器	—
2439	II 255	1992.941	2423.742	59.083	西水田	上層	錐	○
2445	—	2002.775	2443.686	58.971	S R 4	最下層	剥片	—
2456	—	2003.622	2430.674	59.191	西水田	中層	自然石か	×
2605	—	1996.655	2422.727	58.990	西水田	中層	挟み撃ち剥片か	○
2610	II 262	1991.219	2427.318	59.216	西南土手	中層	石鏃	—
2614	II 240	1992.369	2428.606	59.038	S R 8	中層	フリー剥片	×
2624	—	1999.299	2428.976	59.038	西水田	中層	自然石か	×
2651	II 263	2015.379	2437.570	59.055	西水田	中層	石鏃	—

弥生前期以前の遺跡

表10 つづき

取上番号	報告番号	X座標	Y座標	標高	地点名	層位名	分類	挟み撃ち
2704	II 241	1991.739	2425.939	59.092	西南土手	下層	フリー剥片	×
2708	—	1990.597	2429.232	59.276	土手	上層	剥片	—
2836	—	1991.979	2425.374	59.117	西南土手	下層	挟み撃ち剥片	○
2837	—	1992.131	2425.869	59.160	西南土手	下層	挟み撃ち剥片	○
2903	—	1993.007	2427.325	59.118	西南土手	下層	剥片	—
3056	II 253	1993.318	2428.707	59.088	西水田	中層	楔形石核	○
3057	—	1994.155	2429.437	59.068	西水田	中層	粘板岩剥片	×
3129	—	2016.796	2449.734	59.345	北微高地	上層	自然石か	×
3152	—	2009.669	2452.581	59.118	東水田	中層	剥片	—
3209	—	1991.527	2423.563	58.966	西水田	下層	剥片	—
3214	—	1992.568	2424.141	59.012	西水田	下層	剥片	—
3223	II 247	1994.649	2425.731	58.942	西水田	下層	楔形石核	○
3247	—	1991.191	2428.941	59.255	土手	中層	剥片	—
3311	—	2003.044	2441.207	59.140	S R 4	最下層	挟み撃ち剥片	○
3416	II 254	1994.476	2422.711	58.898	西水田	最下層	楔形石核	○
3456	—	1997.397	2427.003	58.933	西水田	下層	楔か	○
3459	II 242	1997.825	2427.088	58.913	西水田	下層	挟み撃ち剥片	○
3496	—	2010.101	2460.742	59.367	東微高地	中層	挟み撃ち剥片	○
3582	—	1997.161	2437.711	59.260	南微高地	上層	自然石か	×
3583	—	2010.282	2459.526	59.318	東微高地	中層	挟み撃ち剥片	○
3617	—	1997.518	2439.099	59.331	南微高地	上面	刃器か	○
3858	II 266	1991.494	2446.307	59.602	南微高地	上層	石鏃	—
3861	II 239	1993.374	2446.811	59.513	南微高地	上層	フリー剥片	×
3884	II 275	1992.110	2419.331	58.859	S X 9 南	最下層	台石	×
3906	II 264	1994.696	2447.863	59.538	南微高地	上層	石鏃	—
3910	II 259	1993.568	2447.919	59.488	南微高地	上層	刃器	○
3926	II 268	1992.027	2448.334	59.486	南微高地	中層	粘板岩刃器	—
3977	—	1999.436	2435.737	59.005	S R 4	最下層	楔か	○
4013	II 276	1995.823	2451.715	59.654	南微高地	上層	台石	×
4014	II 273	1995.347	2452.486	59.670	南微高地	上層	磨石	×
4084	II 243	1988.646	2449.342	59.400	南微高地	中層	挟み撃ち剥片	○
4112	—	1996.087	2451.152	59.468	南微高地	上層	自然石か	×
4113	II 271	1995.965	2451.691	59.566	南微高地	上層	敲石	×
4117	II 246	1989.743	2459.685	59.628	南微高地	上層	石核	×
4122	II 257	1988.064	2460.033	59.633	南微高地	上層	刃器	○
4180	—	1988.857	2452.080	59.447	南微高地	中層	自然石か	×
4209	—	1997.020	2453.500	59.499	南微高地	上層	自然石か	×
4211	—	1997.260	2454.615	59.532	南微高地	上層	剥片	—
4259	—	1990.561	2465.851	59.831	南微高地	上層	剥片	—
4476	II 245	1992.957	2455.036	59.469	南微高地	下層	挟み撃ち剥片	○

取上番号は図110参照。X、Y座標は構内座標。「フリー剥片」はフリーフレイキングによる剥片。挟み撃ち欄の「—」は判断保留のもの。

りを分析すれば、そこで用いられている製作技術について、ある程度の情報を得ることができるし、場合によっては、製品からは見えてこない情報も引き出せるかも知れない。そこで、まず、剥片の種類を把握することにする。剥片石器製作においては、石材の選択が重要であるから、ここではまず、近畿地方中部の剥片石器に主体的な石材であるサヌカイトから記述する。

サヌカイト剥片 32点あり、そのうちで主剥離面がフリーレイキングによって形成されていると思われるのは3点、挟み撃ちによって形成されていると思われるものは17点、打撃法を推定できないものが14点ある。打撃法を推定できる剥片のうち、代表的なものを図示した。Ⅱ239～Ⅱ241はフリーレイキングによる剥片。Ⅱ239は表面の50%以上に原面を残し、先行剥離の剥離方向は主剥離のそれと並行する。主剥離の打点は飛んでいるが、バルブの発達が顕著である。基端部に敲打痕が多く認められるが、そうした先行する打撃によって生じたひびなどが、主剥離面のやや歪んだ形状を導いたのだろう。Ⅱ240は、剥片の左縁端部。先行剥離の方向は主剥離のそれに対してやや斜行しているものや直交するものがあり、たびたび打面の転移があったことがわかる。Ⅱ241は、打面も残る完形の剥片で、表面は偏平で、先行剥離は主剥離と直交する剥離方向である。Ⅱ242～Ⅱ245は挟み撃ちによると思われる剥片。Ⅱ242は、先行剥離は3方向からで、うち1方向は主剥離と直交する。最も古い先行剥離面を構成する縁部を線状打面にしている。Ⅱ243は、表面の50%近くに原面をもつ。先行剥離は主剥離と直交する剥離方向でヒンジを生じている。線状打面の打点付近の表面側には先行する階段状剥離が多数みられる。主剥離面のあり方から、この剥片が一度の打撃で剥がれたのではなく、数度の加撃の末に剥がされたことがわかる。Ⅱ244は剥片の基端部で、左右の側縁は垂直割れによって残っていない。原面が20%ほど残る表面の先行剥離の方向は、主剥離と並行する。バルブが明瞭だが線状打面である点と縦断面形から、挟み撃ちによると判断した。そしてそのバルブの存在から、この剥片が生じるときの石核は、例えば、Ⅱ243の剥片が生じるときの石核と同様の大きさだったものと思われる。Ⅱ245は、完形の剥片で、バルブは顕著ではない。表面の階段状剥離に切られる先行剥離の剥離方向は主剥離のそれとおよそ並行している。

サヌカイト石核 Ⅱ246は、もともとはⅡ240のようにフリーレイキングによる剥片の左縁端部であったものに、剥片剥離が加えられている。刃部を生み出すような角度の緩く深い剥離ではないので石核とみなした。打面調整の途中で利用を断念したのかもしれない。Ⅱ247～Ⅱ254はいわゆる楔形石核（表11）。Ⅱ247は、先行する剥離の方向はいずれも

弥生前期以前の遺跡

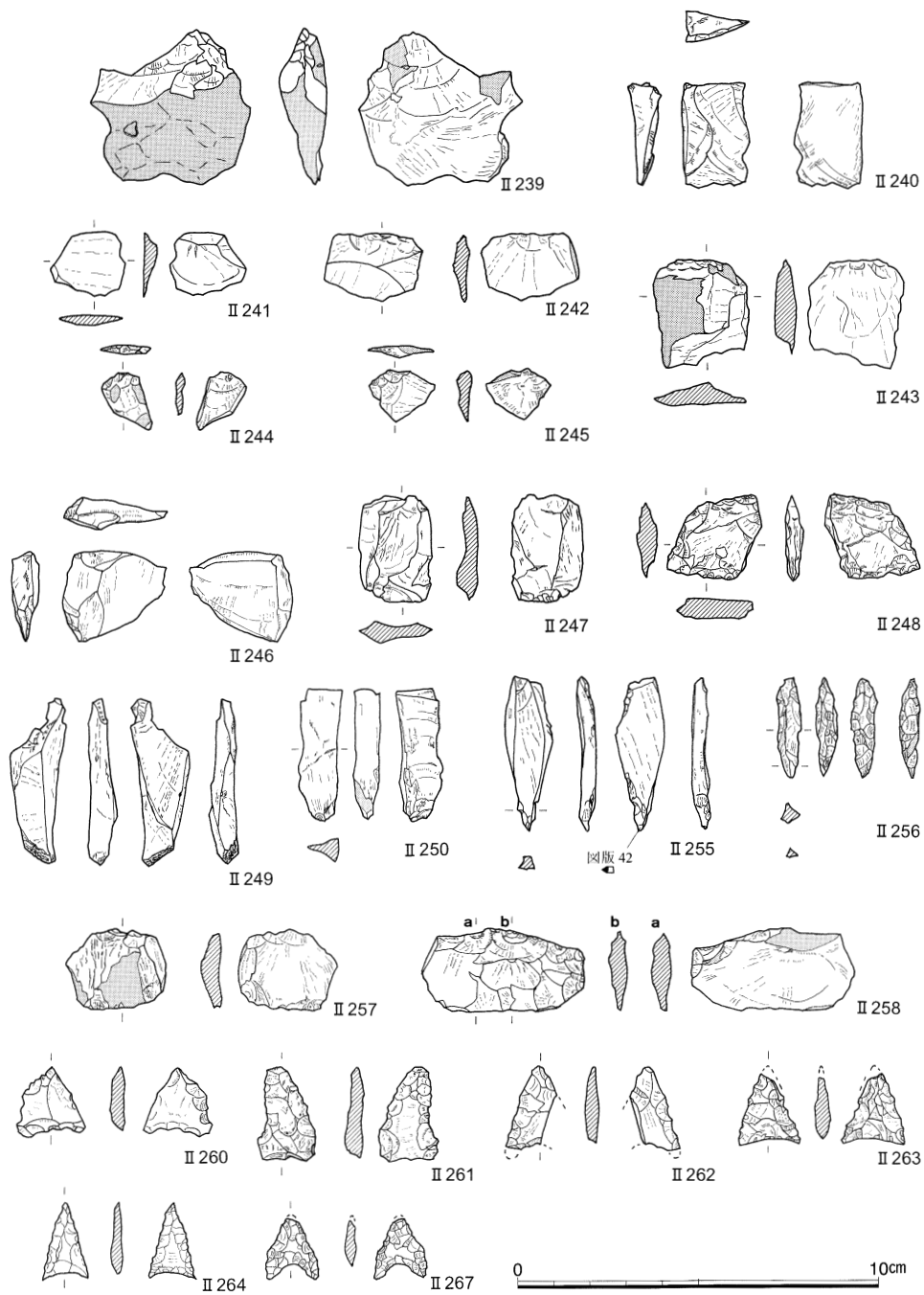


図107 剥片石器 (II 239~II 243剥片, II 246~II 250石核, II 255・II 256錐, II 257・II 258刃器, II 260~II 264・II 267鏃) 縮尺1/2

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

表11 楔形石器一覧

番号	長	幅	厚	打面数・部位	打点欠損	垂直割れ	原面	備考	取上番号
II 247	29	20	6	2 (両端)	なし	なし	なし		3223
II 248	23	<u>27</u>	5	3 (両端+1側縁)	なし	あり	なし		1354
II 249	<u>45</u>	<u>15</u>	8	1 (縁端)	あり	あり	なし		1335
II 250	<u>37</u>	<u>12</u>	8	1 (縁端)	あり	あり	あり	垂直割れ面に原面	1573
II 251	37	<u>18</u>	7	2 (両端)	なし	あり	なし		422
II 252	27	22	7	2 (両端)	なし	なし	なし		2210
II 253	30	<u>27</u>	9	2 (両端)	なし	あり	なし		3056
II 254	23	<u>19</u>	6	2 (両端)	なし	あり	あり	古い垂直割れ面を打面	3416

長、幅、厚の数値はmm。下線は欠損による残存を示す。取上番号は図110参照。

表12 石鏃一覧

番号	長	幅	厚	基部形	基部調整	中央断面形	折損	原面	備考	取上番号
II 260								なし	未製品	1551
II 261								なし	未製品	なし
II 262	<u>23</u>	<u>14</u>	3	極凹?	片面	両凸か	片縁・脚端	なし		2610
II 263	<u>19</u>	17	4	凹	両面	両凸	先端	なし		2651
II 264	21	13	3	凹	両面	両凸	なし	なし		3906
II 265	<u>16</u>	<u>15</u>	3	極凹	両面	平凸	脚端	なし		2177
II 266	19	14	3	凹	両面	菱形	なし	なし		3858
II 267	<u>16</u>	15	3	極凹	両面	両凸	先端	なし	チャート	1102

長、幅、厚の数値はmm。下線は欠損による残存を示す。取上番号欄の「なし」は原位置取り上げをしていないもの。

表13 礫石器一覧

番号	長	幅	厚	重	機能部特徴	機能部位数	破損	備考	取上番号
II 270	47	52	9	27	剝離と擦切痕	1側辺	なし		なし
II 271	123	87	55	772	敲打痕	2面+2側面	なし		4113
II 272	<u>68</u>	<u>55</u>	<u>47</u>	<u>219</u>	敲打痕	2面+1端面	面あり	破損後も使用	1177
II 273	<u>84</u>	102	58	<u>710</u>	研磨痕	2面+全側面	面あり		4014
II 274	98	96	42	<u>446</u>	研磨痕	3面	剝離あり		1688
II 275	<u>196</u>	<u>128</u>	116	<u>2910</u>	敲打痕	1面	面あり		3884
II 276	182	124	134	4030	敲打痕	1面	なしか		4013

長、幅、厚の数値はmm。重の数値はg。下線は欠損による残存を示す。取上番号欄の「なし」は原位置取り上げをしていないもの。

平行で、側縁には階段状剥離は認められない。Ⅱ248は垂直割れした楔形石核。側縁にも階段状剥離があるので、垂直割れで失われた対向する側縁との挟み撃ちもおこなわれていたことがわかる。この部位に垂直割れを起こすような打撃があったことから、楔として用いられたのではなく、意図的に垂直割れになるように割った可能性もあろう。なお、器体の中央付近には夾雑物がある。Ⅱ249・Ⅱ250も垂直割れしている楔形石核。Ⅱ249は、打点は飛んでしまっている。先行剥離の方向は主剥離のそれと平行するが、どちらも器体の長軸におよそ直交している。板状の素材の側縁からあまり遠くないところでの挟み撃ちによって垂直割れを起こしているが、この垂直割れに対向する側縁は切断されている。素材の中心付近でなく側縁端に近い部分を叩いていることと、側縁端そのものは切断されていることから、この楔形石核の形状は意図的に生み出されたものと思われる。すなわち、事故的な垂直割れではなく、意図的に、剥片獲得とは90°異なる方向から加撃して垂直に割った可能性が高い。Ⅱ250は、垂直割れの割れ面に原面があることから、Ⅱ249と同様の意図を読みとることができるが、対向する側縁は欠損していない。打点がないのは飛んでしまったからかも知れないが、器体上面は折断されたようにも思われる。先行剥離の方向は主剥離のそれとおよそ並行し、器体の長軸に並行する。この他、図示していない楔形石核も含めて、線状打面で階段状剥離が認められる石核は8点は出土している。

サヌカイト製品 細部調整が施されて製品とみなせるものは、錐2点、石鏃7点、刃器3点である。Ⅱ255は錐。板状の素材を挟み撃ちで垂直に割ってその垂直割れの対向辺を切断した楔形石核の、先端に細部調整を施して機能部を作出している。細部調整は、四角形の断面の一組の対角部分しか行わない。先行剥離の方向は主剥離のそれとおよそ並行し、器体の長軸とも並行する。使用痕は、高倍率の検鏡で、先端部に磨滅による平坦面が確認でき(図版43-2)、また先端部付近はその他の部位よりも磨滅による光沢が進んでいるようにも思われた。Ⅱ256は断面三角形の錐で、器体のほぼ全面に細部調整が施されているが、わずかに原面も残っている。使用痕は確認できなかったが、形状から錐と判断した。主剥離と先行剥離とは剥離方向がおよそ並行している。尖頭でありながらやや湾曲している形状が、主剥離の面影を残しているとすれば、Ⅱ239のような表皮剥ぎ取りのフリーフレイキングによる剥片を素材にしていた可能性がある。細部調整の剥離面を見てみると、陰瘤痕のようなネガ部やフィッシャーが明瞭な剥離だけでなく、打点が点としては確認できずにリングが発達している剥離もあるので、押圧剥離も併用されていると思われる。Ⅱ257は細部調整がわずかに認められる剥片石器。表面側に表面積の30%程度の原面

をもつ、挟み撃ちによると思われる剥片を素材にしている。表面と主剥離面の両面に縁端側から角度の緩い細部調整を数箇所施しているのも、Ⅱ243のような剥片とは区別し製品と判断した。刃器の刃部再調整の可能性もあるが、使用痕は確認できず、また、大きな原面を残していることから、石鏃などの未製品の可能性もある。Ⅱ258は、口唇状打面を加撃したと思われる横長剥片を素材にした刃器。主剥離に先行する剥離は、主剥離と並行する剥離方向である。基端部と左側縁に刃潰し状の階段状剥離が施されている。表面中央部には、明瞭な打点をもつ剥離面が認められることから、パンチによる間接打撃が行われたと考えられる。また、その剥離によって刃部側からの剥離が切られているものがあるので、もともとは障害でなかった基端付近の凸部が刃部再生によって器体中央部付近の凸部として障害になり、それが取り除かれたのかもしれない。ただし、刃部だけでなく器体中央付近にも、線状痕も磨滅痕跡も認められなかった。Ⅱ259は、垂直割れした楔形石核のその対向する側縁に、角度が緩く浅い連続する細部調整が認められるので、刃器と判断したが、使用痕は認められなかった。Ⅱ260～Ⅱ266は石鏃で(表12)、打点や剥離面の形状から推察すると、押圧剥離と間接打撃とを組み合わせて用いているようである。Ⅱ260は石鏃の未製品。主剥離面側には細部調整が少なく、主剥離面を広く残す側縁部があることから未製品と判断した。主剥離面が非常に平坦なので、挟み撃ちによる剥片を素材にした可能性もある。先行剥離は主剥離と直交する剥離方向である。Ⅱ261も石鏃の未製品。表面に残る凸状の隆起部があることと非対称形の形状から、未製品と判断した。先行剥離の方向は主剥離のそれと直交する。基部には表面側の中央部にのみ、細部調整の剥離がある。表面中央の凸部を取り除けずに製作を断念したものと思われる。Ⅱ262は、先行剥離は主剥離と並行する剥離方向である。基部の細部調整は表面側のみであるが、形状から製品と判断した。しかし、これ以外の石鏃の製品は、基部の細部調整剥離は両面から行われている。Ⅱ263とⅡ264は凹基の石鏃。剥離面の磨滅が進んでいるⅡ264は、幅狭である。この他、図示していない石鏃もふくめて、基部はすべて凹基ないし極凹基である。

その他の剥片石器 サヌカイト以外の石器では、チャートの石鏃と剥片各1点、粘板岩の刃器2点と剥片1点が回収されている。Ⅱ267はチャート製の極凹基の石鏃。細部調整はサヌカイトの石鏃よりもやや浅く急角度に見える。Ⅱ268・269は粘板岩製の刃器だが、どちらも明瞭な使用痕は確認できない。Ⅱ268は横長剥片を素材にしているが、主剥離面のフィッシャーが複数箇所収斂しており、一度の打撃では剥がれなかったことがわかる。先行剥離の方向は主剥離と直交する。側縁と刃部対向辺に刃潰し状の細部調整が施さ

弥生前期以前の遺跡

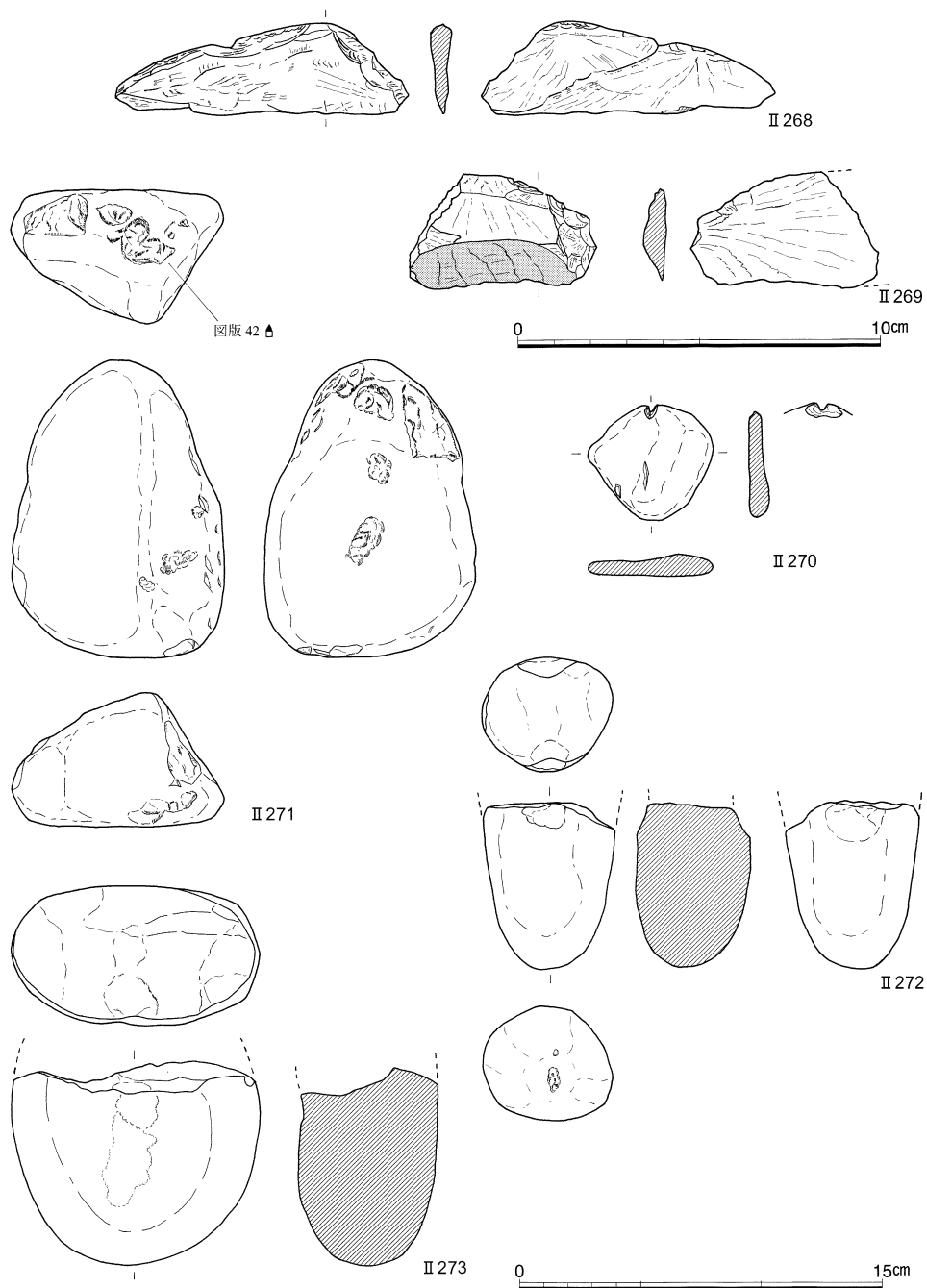


図108 剥片石器と礫石器 (II 268・II 269刃器, II 270石錘, II 271・II 272敲石, II 273礫石器)
 II 268・II 269縮尺1/2, II 270~II 273縮尺1/3

れる。II 269は、縦長剥片の側縁である原面を刃部にしている。表面の側縁および刃部対向辺に刃潰し状の細部調整が施される。先行剥離は主剥離と直交する剥離方向である。

剥片石器の特徴 剥片剥離による石器について、サヌカイトを中心に考えてみる。まず、もともとの素材については、フリーレイキングによる大型の剥片が少ないこと、挟み撃ちによる剥片が圧倒的に多いこと、原面をとどめている剥片が一定量あることから、せいぜい拳大くらいの大きさのものが多かったと思われる。ただ、その程度の大きさにもかかわらず、製品で原面をもつのはII 256の錐と石鏃未製品の可能性もあるII 257の2点だけである点や、II 239のように原面の占める割合の高い大型の剥片がある点から、原面を意図的に排除する傾向があったことはうかがえる。また、剥片と製品とを問わず、そしてフリーレイキングと挟み撃ちとを問わず、打面の転移が頻繁におこなわれているようである。こぶりの刃器や錐や石鏃のような製品の場合は、志向する機能部ないし機能形態を生み出すまでに、定型的な剥片剥離技術ないし技法がなくても充分に対応できるからであろう。すなわち、こぶりの刃器ではフリーレイキングで鋭い縁端をもつ剥片を獲得できればよく、錐や石鏃では細部調整までにある程度の薄さの板状素材を挟み撃ちなどで獲得できればよいのである。さて、フリーレイキングの痕跡を明瞭にとどめる剥片は、法量が大きくない上、数量も少ないので、その打撃法のみ技術形態が存在したとは考えにくい。II 258のような製品も、口唇状打面であることから、剥片のあり方に一致せず、従って体系的な技法の所産とはいえない。むしろ、事故で割れても石核となったII 246のように、原面がなく法量が許容範囲内ならば、そのまま剥片石器製作の流れにとどまっていたと思われる。実際にII 246は、法量的には楔形石核と同程度であり、楔形石核の中にはこうした由来のものもあった可能性はある。

挟み撃ちが多用されていることは先に指摘した通りであるが、これは、同じ京都盆地に位置する同時期の雲宮遺跡のあり方と矛盾しない〔中川1997〕。そのような打撃の典型的な産物である楔形石核を見てみると、II 249・II 250のように剥片剥離をおこなわずに長軸方向に垂直に割ったものと、II 247・II 248のように剥片剥離をおこなったものがある。法量で見ると、前者は長軸は35mmを優に超え、後者は長軸30mm程度である。後者にもII 248・II 254のような意図的と思われる垂直割れはあるが、それらは短軸での垂直割れであり、むしろ法量調整と思われる。こうした2種の楔形石核では、前者は錐の製作と、後者は石鏃の製作と、それぞれ関わる可能性がある。すなわち、II 249のような細長い形状を得てII 255のような錐を生み出す流れと、II 248のような平たい矩形に近い四辺形の形状を得

て（Ⅱ257のような段階を経て）Ⅱ260のような石鏃を生み出す流れである。ただし、個々の剥片の出土位置という点では、こうした推測を指示する状況はうかがえなかった。

鏃は2点あるが、それらは互いに、細部調整を施す位置も機能部の断面形状も異なり、おそらく素材の生成要因も異なる。石鏃は、基部に片面調整のものと両面調整のものがある点は、技術形態の差を示すのかも知れない。また、石鏃では、石材の質的な差異に起因するかもしれないが、チャートとサヌカイトとで細部調整の角度に違いがある。このほか、石材による必然的傾向ではあるけれども、粘板岩製の刃器は板状の剥片を素材にしている点で、サヌカイトの挟み撃ちによる板状素材の獲得と志向の同調性がうかがわれる。

この地点の剥片剥離石器群の特徴を整理する。①サヌカイトでも粘板岩でも、素材は縦断面形が平たくなるような板状である。②サヌカイトでは挟み撃ちが顕著である。③楔形石核には少なくとも2種あり、一つは鏃製作と、もう一つは石鏃製作と、それぞれ関連していると思われる。④鏃には未製品と思われる楔形石核と製品がある。⑤石鏃には未製品と製品がある。⑥鏃にも石鏃にも2種の技術形態がある。

礫石器 Ⅱ270～Ⅱ276は礫石器(表13)。Ⅱ270は、27gをはかる抉りのある石器である。平たい頁岩の一側縁を片面だけ打ち欠いてそこに切目を入れているが、対向する側縁は加工していない。打ち欠き面とは反対の面の中央部には側縁の切目の延長線上にわずかに切目を確認できる。打ち欠き面は平坦だが反対の面には瘤状のふくらみが軸線に斜行するかたちであるために、最終的に製品化を断念したのかもしれない、それならば切目石錘の未製品といえる。Ⅱ271は鱈節形をした粗粒砂岩製の完形の敲石で、772gをはかる。あばた状の敲打痕が、2箇所ある面と1箇所ある面とがあり、側面には、雁行状に連続する箇所もある爪形の敲打痕の集合部などの剥落部を確認できる。Ⅱ272は、破損面が1つある砂岩製の敲石で、残存重量219g。敲打痕は、先端部に長軸10mm弱のあばた状の広がりを確認できる。また、やや平坦な面とそれに対向する部分の、共に破損面際に、凹部がある。破損面を見ると、前者の凹部は破損面と同時ないし後続して形成された可能性があるが、後者の凹部は破損面に切られており、また、そこに打瘤のような微突部を確認できる。従って、破損は、この残存部ではなく欠損部分を掌で保持して、凹部で対象物に加撃した結果と思われるが、その後も、掌になかった方のこの残存部が使用された可能性があり、その場合は、敲打痕をもつ先端部が最終的機能部だったと考えるのが妥当であろう。Ⅱ273は破損面を1つもつ石英斑岩の磨石で、残存重量は710g。二つの平坦面と側面全面に研磨痕がある。一方の平坦面の破損面際には、直径2cm程度の広がりをもつあばた状の敲打痕

がある。破損面を見ると、この敲打部から陰瘤痕状の扇形の窪みを確認できるので、そこを基点の一つにして破損面が形成されていることがわかる。この残存部を掌に保持して敲打した際に破損したと思われる。II 274は、機能面が3面ある花崗斑岩製のほぼ完形の磨石で、446gをはかる。II 275は、破損面が1面ある砂岩製の台石。残存重量2910g。機能面には、中央部分と思われる辺りに4cm四方程度の広がりをもって、線状の敲打痕と、雁行状に連続する爪形の敲打痕が多数みられる。破損面には、その敲打痕を基点にした陰瘤痕状の窪みが確認できるが、対向する辺には基点となるような部分が認められないので、この台石自体は、堅いところに据え置かれて挟み撃ちされるような状況では用いられなかったのかもしれない。II 276は断面逆台形の砂岩製の台石で、4030gをはかる。II 271の敲打石と隣接して出土している(図110)。機能面には、5cm×3cmほどの広がり、II 275と同様に、線状の敲打痕と、雁行状に連続する爪形の敲打痕が多数みられる。

礫石器については、雁行状に連なることもある爪形の敲打痕をもつものについて考えてみる。礫石器の使

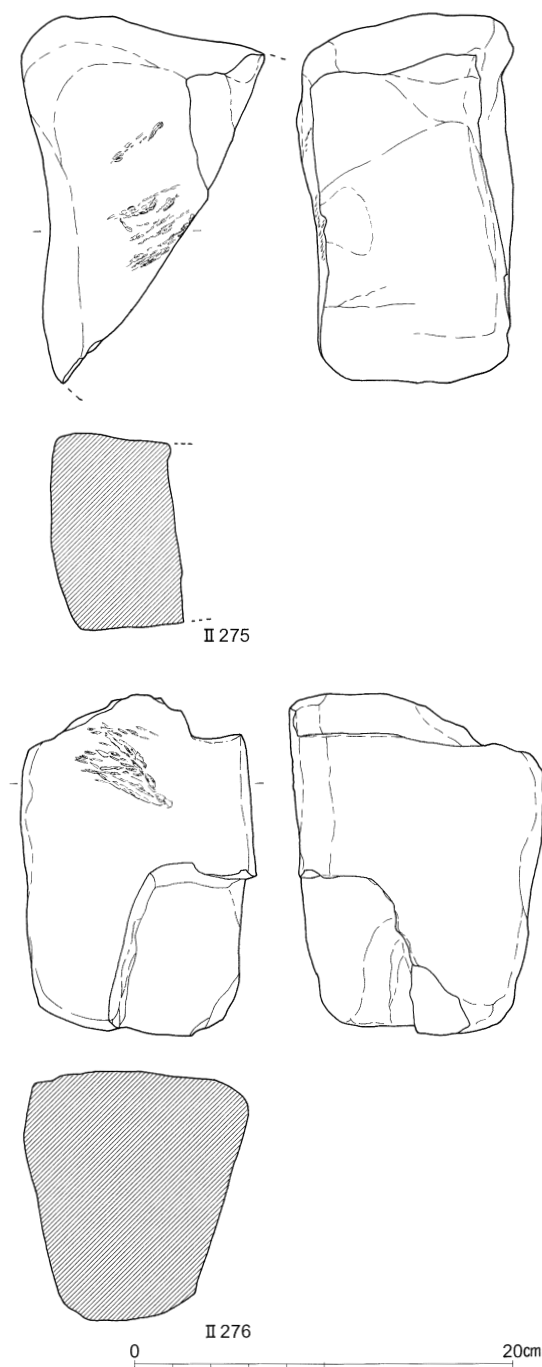


図109 礫石器 (II 275・II 276台石)

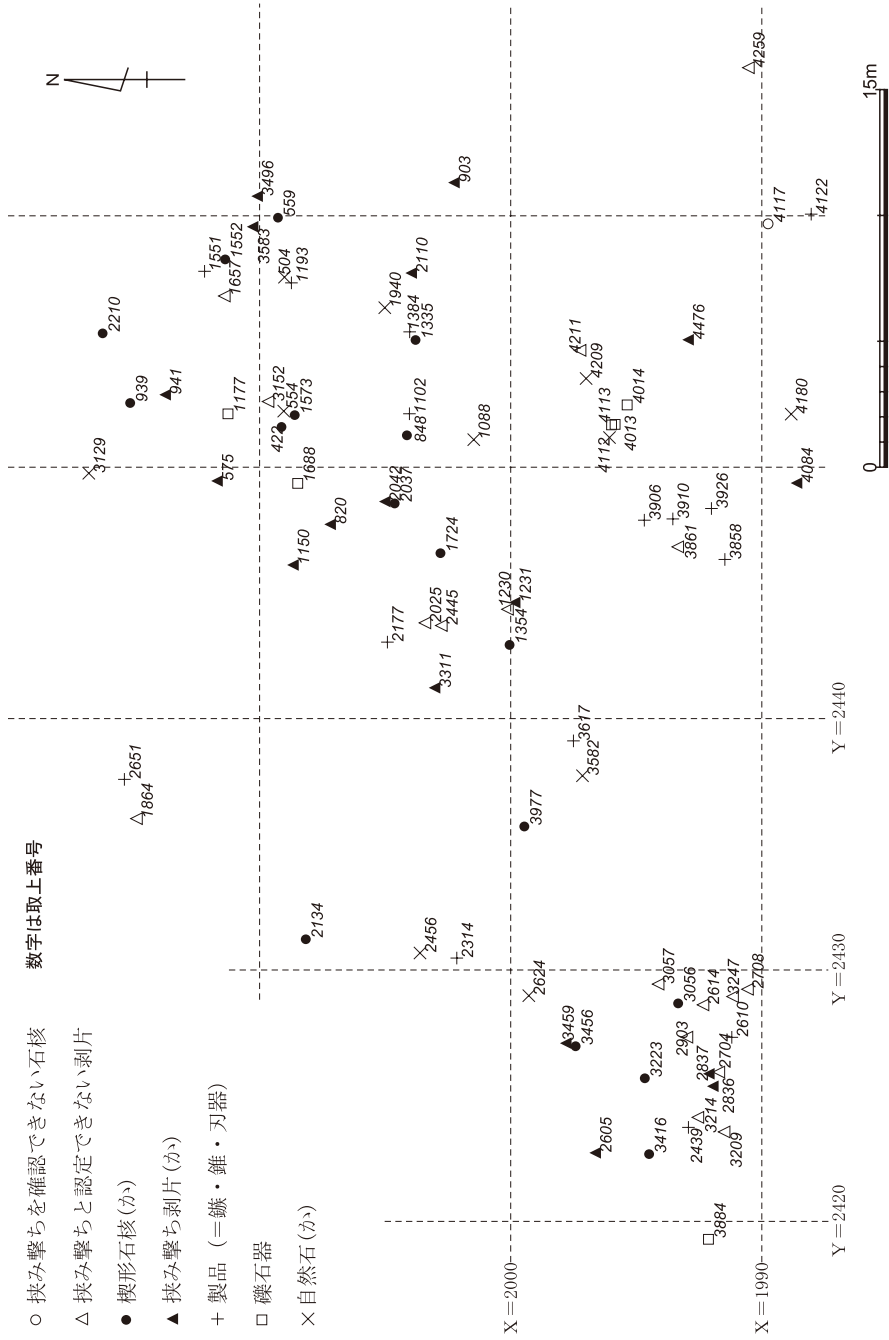


図110 黄色砂下層の出土石器等の分布 縮尺1/300

用痕研究はあまり進んでいないけれども、砂岩の台石の上でサヌカイトの板状の素材剥片に挟み撃ちをおこなった実験では、機能面にこのような敲打痕が確認されることがある〔松田1999〕。そこで、Ⅱ271・Ⅱ275・Ⅱ276の敲打痕をそうした作業にも大きく関わった痕跡と判断することも許容されよう(図版43-2)。こうした使用痕からの想定は、挟み撃ちによる剥片や楔形石器が多くみられる剥片石器の全体的様相と整合的である。ハンマーの可能性があるのはⅡ271で、その側面が機能部となっていたと考えたい。台石についてみると、Ⅱ276を両方の太股に長軸が脚と並行するように挟み込むと収まりがよいが、その保持状態は、Ⅱ275の破損面の特徴に整合的である。さて、右利きの行為者がⅡ276をそのように固定したとすると、左上がりになる敲打痕は、右手のハンマーを振り下ろすときのハンマーの軌跡とおおよそ並行することになる。爪形の敲打痕が板状のサヌカイト剥片との接触で生じたとみなせば、この台石に据えて挟み撃ちをしたのであれば、垂直割れを生じさせようとしていたといえるかもしれない。そしてⅡ275についても同様に考えることが許容されるならば、その右上がりになる敲打痕は、右手のハンマーを振り下ろすときのハンマーの軌跡と直交することになり、その台石を用いて板状のサヌカイト剥片からさらに剥片を取る剥離をおこなっていたといえるかもしれない。このように、2点ある台石の敲打痕の方向がそれぞれで異なる点は、サヌカイトの板状素材に対して2種の加撃方法の推測された楔形石核(とそこから派生する錐と石鏃)のあり方と一致しており、非常に興味深い。敲石や台石の出土した地点と、挟み撃ちを用いた痕跡のある剥片石器の出土地点とでは、後者が原位置を保っていない可能性が高いこともあって、特筆できるような相関関係は見られないが、前者においては、ハンマーと思われるⅡ271と台石であるⅡ276とが隣接して出土している。

石器の分布(図110) 水田の造営に時期的に近い遺物包含層上部(表10の「上層」)から出土した石器の分布傾向について触れておく。後の東水田になる辺りや中央微高地では、上層出土の石器が6点あるが、そのいずれもが、挟み撃ちの痕跡をもち、また製品ではない。これに対して、南微高地では石鏃や刃器や研磨痕・敲打痕をもつ礫石器など製品が比較的高率に出土しており(上層出土の14点のうちの6点)、後の西水田になる一帯でも、上層出土は製品2点のみ(錐と粘板岩製の刃器)である。点数が少なく、また剥片などの出土石器は原位置を維持していない可能性が高いとはいえ、剥片と製品の分布における差異は指摘できる。土器片の出土傾向が異なることに照らしても(図97)、南微高地は場の機能が異なっていたと思われる。

4 弥生前期水田のプラント・オパール分析

(1) 試料の概要 (図90・91)

東水田の地点1 (図90-▲1) で、地層断面から垂直方向に8サンプル (図91)、西水田の地点2~10 (図90-▲2~▲10)、東水田に近接する地点11 (図90-▲11・図91) と水田域外の地点12 (同▲12・図91) の各最上層で11サンプル、計19サンプルを採取した。なお、今回は検出状況を中心に略述し、詳細な考察は後日機会を改めておこなう。

(2) 分析結果 (図版44, 図111)

東水田の地点1では、上部の1 a層と2 a層からイネの機動細胞プラント・オパールがわずかに検出された。全般的に検出数と量がきわめて少なく、1 a層~7 b層 (図111中の各層に対応) の全層が洪水堆積物と考えられる。1 a層中には炭化物がみられ土壌化していることから、地点1で水田が営まれたのは同層準のみであろう。なお、下層の2 a層はレンズ状に挟在しており、同層準で稲が栽培されていた可能性は低く、同層から検出されるイネは上層からの落ち込みとみられる。

また、その他のプラント・オパールの検出状況を見ると、ウシクサ族やタケ亜科などがわずかながら検出され、やや高燥な土地条件が考えられる。ただし、火山ガラスも同様にみられることから、洪水による地層堆積時のプラント・オパールも含有されていると考えられる。

西水田の地点2~10では全試料からイネが検出された。しかし、その数や量は東水田と同様に少なく、両者の水田の造営期間は長くなかったとみられる。なお、西水田では畦畔と水田面で試料を採取したが、両者に出現傾向の顕著な違いはみられなかった。

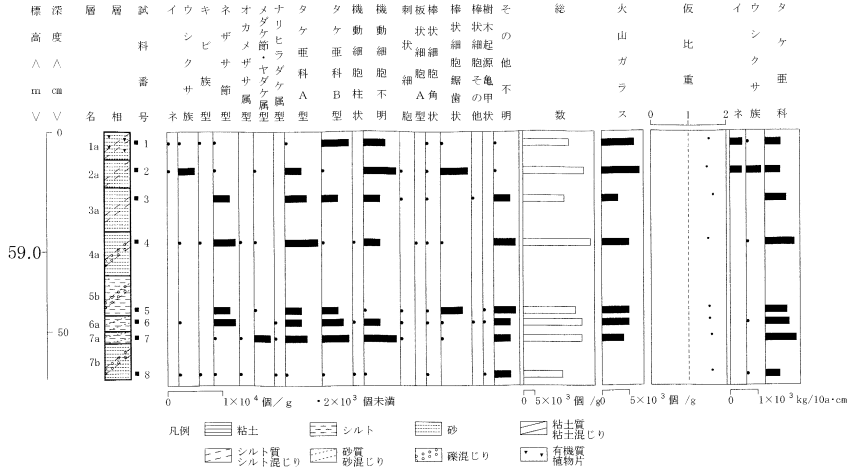
また、その他のプラント・オパールの出現傾向は地点1と同様で、やや高燥な土地条件を示す植物に代表される。こうした地層を利用した水田の造営であったとみられる。

さらに、地点11は東水田に隣接するが、ここからもわずかながらイネが検出されている。水田域を離れた地点12からは未検出であった。

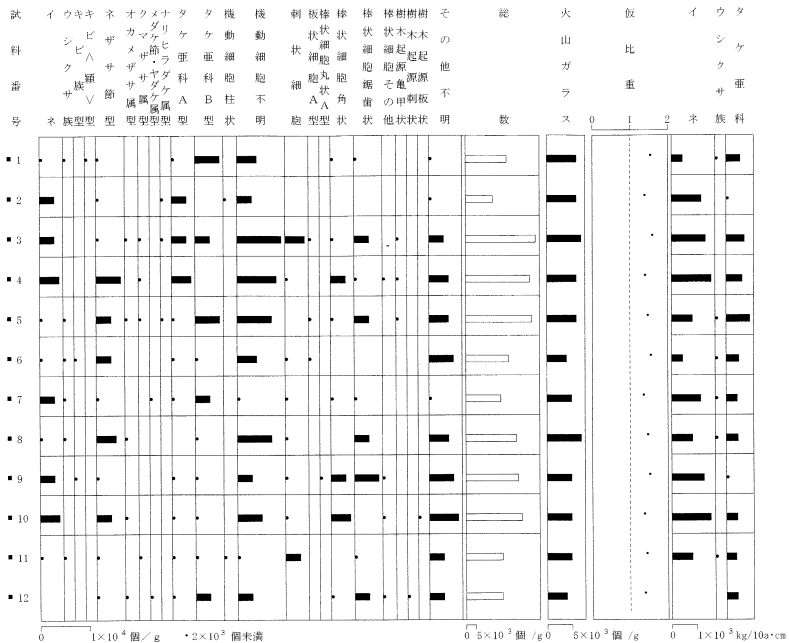
(3) まとめ

このように、今回の分析結果は、約700mあまり西南方に位置する220地点 (A O22区) の弥生前期水田の場合 [外山2002] とは異なり、全般的にプラント・オパールの検出数と量が少なく、また低湿な土地条件を示す植物はみられない。洪水堆積物を一時的に利用した稲作のあり方が考えられる。

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査



A: 地点1断面サンプル1~8



B: 地点1~12各最上層

図111 プラント・オパール検出状況 (試料採取地点は図90・91参照)

5 弥生中期～近世の遺跡

(1) 遺 構 (図版29～32, 図112～114)

黄色砂より上層は、校舎基礎による攪乱範囲が広く、包含層は調査区中央一帯を中心に高状にのこるにすぎない。以下おおむね時代順に説明する。

弥生中期～古代の遺構 (図112) 黄色砂上面の地形とあわせて表示する。ただし北東部は、中世の段階で表面の削平が著しいと判断されるので、等高線を省略する。

SR1・SR3は、層位の項で述べたように、弥生中期に生じて以降平安時代にかけて埋積していった自然流路の痕跡 (図版31-4～6, 図版32-1)。図中で梨地で表示したのは、黒褐色の粘質土が埋積していた流路状の窪みの範囲で、おおむね平安時代直前の様相。SR2は、Y=2430付近の東から西へ下る斜面裾に沿ってはしる幅1.5m深さ50cm程度の浅い自然流路。白色の砂礫層が埋積する。出土遺物はないが、層位的にみて平安時代のう

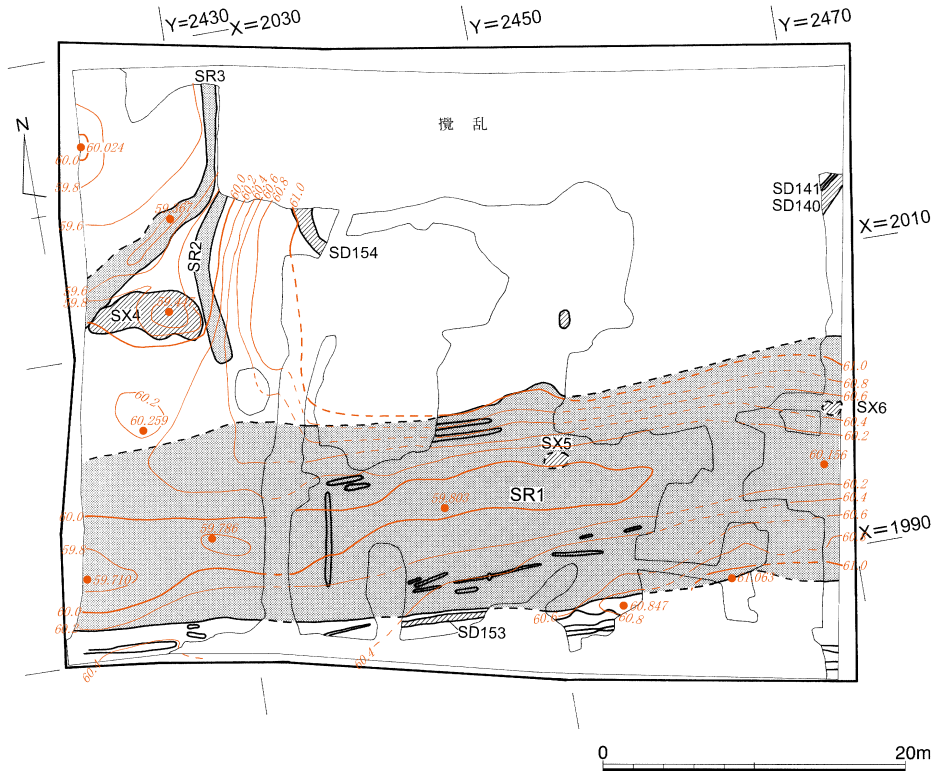


図112 黄色砂上面の地形と弥生中期～古代の遺構 縮尺1/500

ちに形成され埋積したものと見える。この斜面そのものは、弥生中期段階にSR3により黄色砂が削られることで形成された地形に由来すると想定される。したがってSR2は、斜面西側が埋積していく過程で裾部に一時的に生じた流れといえよう。

SX4は、東西6m南北2m程度の範囲で、窪みに堆積した黒色粘土層中に礫がまとまっていた(図版32-1・2)。礫の大きさは径10cmを頂点に、6cmから14cmまでで80%以上を占める。人工遺物はともなわない。平安時代以前の段階で、近辺からの転石が自然の営為により集まったものである可能性と、平安時代中期の土地利用に際して、地業として人為的に石を集めたものである可能性の双方が想定され、いずれとも決めがたい。

SX5・SX6は、SR1北肩の黄色シルト層上面～上部にかけて、弥生中期後葉(畿内IV期)の土器Ⅱ286・Ⅱ287の破片がまとまっていたもの(図版32-4・5)。SX5については次節で詳述する。東壁際のSX6は、大型の甕の破片が散在し、SX5よりも密集度は粗い。口縁から底部まで器形をうかがうことは可能だが、全体の4分の1程度の破片しかなく、調査区外に続いている可能性がある。なお、近接して石庖丁Ⅱ281も出土している(同6)。これらは、流路SR1が形成されて後の比較的早い段階の遺構とみられるので、流路を形成する洪水の発生は、弥生中期後葉までの間であったことがわかる。

SD140・SD141・SD153・SD154は黒褐色土を埋土とする溝。SD154は遺物が出土しておらず、明確な時期は不明だが、埋土から平安時代以前であることは確実。そのほかはいずれも平安時代中期の10世紀代の遺構。また、遺物は出土しないものの、SD153と同様な幅30cm前後の浅い小溝が多数検出されている。SR1に沿うような方向性がうかがわれることから、平安時代においてはSR1が埋積しきらず、土地利用や土地区画を規制していた可能性が高いといえる。

中世の遺構(図113) 中世を通じて、調査区西半Y=2430付近を南北に、X=1990付近を東西にはしるL字状の段差が形成されている。中世の遺構は、この段差より東方では、黒褐色土ないし黄色砂の上面ですべてが検出される。段差以西の低くなっている範囲では、灰色砂質土から茶褐色土の上面にかけてで検出される。ほとんどが中世後半期に帰属するとみられる。ここでは各時期をまとめて示した。

遺構の大半は幅20cm深さ5cm程度の小溝で、全域でみつかるとは限らない。若干方位を東に振った南北方向が主で、少数それに直交する東西方向がある。耕作にともなう鋤溝に類するものだろう。段差の内部では明灰色土の上面まで顕著に検出され、それ以下はみられなくなる。

SE2～SE10は、径1m～1.5m程度深さ最大で50cm前後の円筒形の土坑。特徴から

弥生中期～近世の遺跡

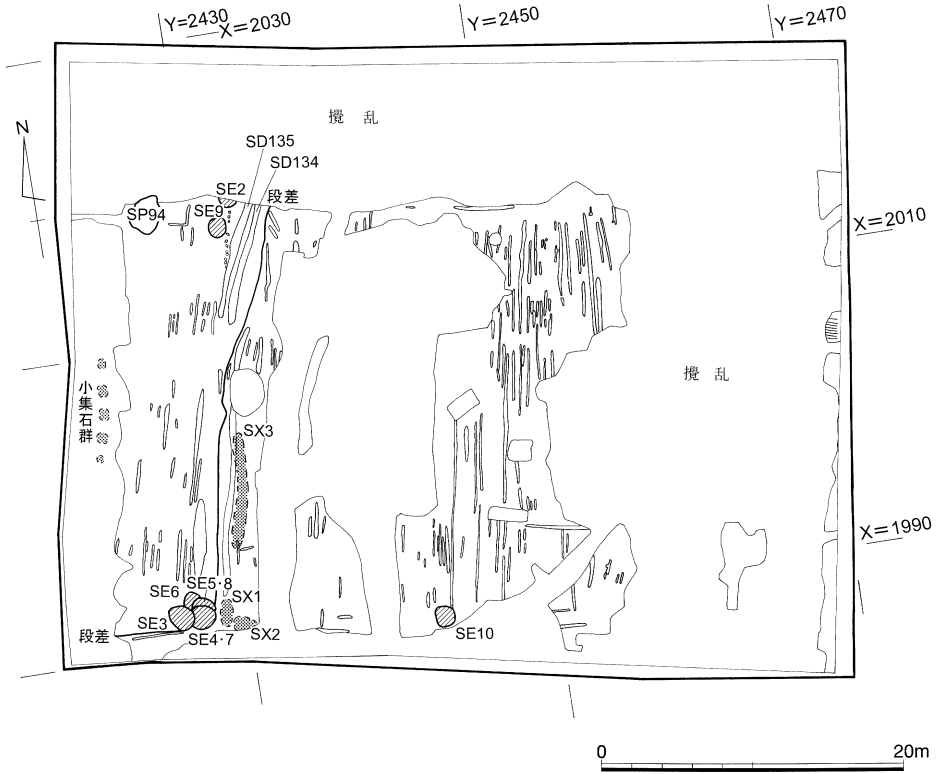


図113 中世の遺構 縮尺1/500

野壺とみられ、段差東南隅のコーナー付近では多数が切り合って存在する。SE 2 から灰釉系陶器（天目）が出土しているほかに遺物はほとんど出土しないが、近世遺物包含層を除去したのちに検出されることから、中世後半期には機能していたものとみられる。

SX 1～SX 3 は集石遺構。SX 1・SX 2 は、拳大程度の礫がまとまっていたもので、耕作時に障害となるものを寄せ集めたものとみることもできる。これに対してSX 3 は、人頭大程度までの比較的大きな礫を含み、南北方向に10mほどの細長い列状を呈している（図版31-3）。区画施設であった可能性もあるが、礫の大きさは不揃いであり、密度も粗い。茶褐色土中で検出されるものであるから、中世後半期の所産とみられる。このほか、灰色砂質土の上面で、径50cm程度に小礫が集まる5箇所を検出し、小集石群としている。南北に並ぶことから、なんらかの建物の基礎である可能性も考えられる。遺物をともなわないが、検出層位からみて中世前半期の遺構とみられる。

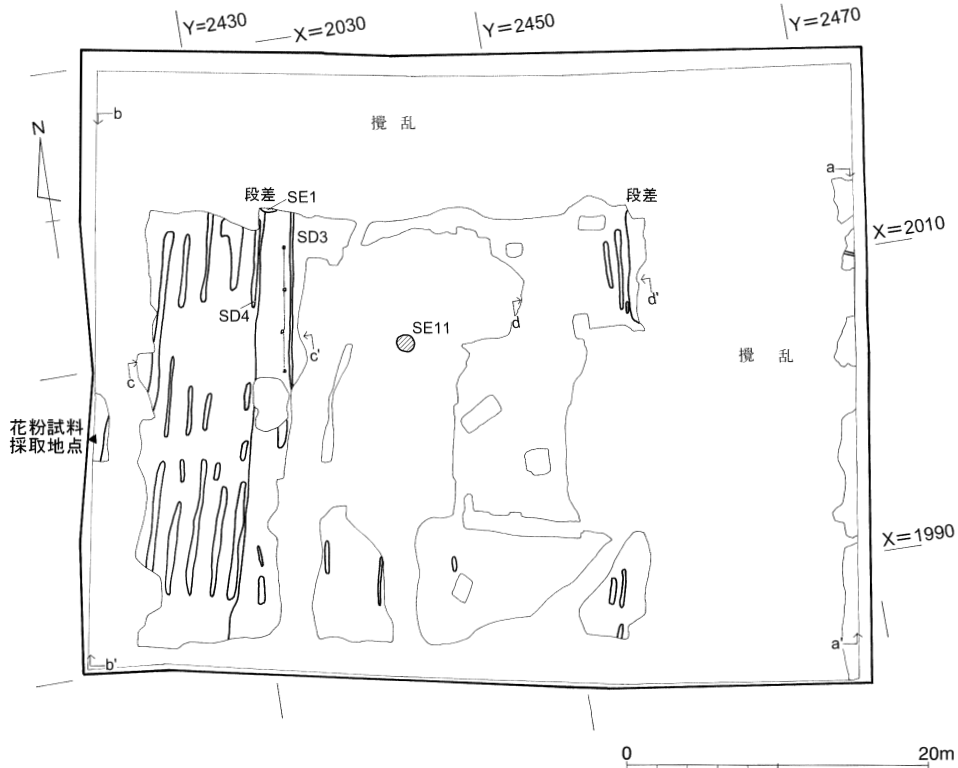


図114 近世の遺構 縮尺1/500

SD134・SD135は、南北方向の段差の裾に沿って、2条が並行してはしる中世後半期の溝。他の溝群と比べてひとまわり大きく深く、北に向かって下るようにしっかりと掘られている。斜面からの水や砂の流入を防ぐ役目を果たしていたものであろうか。

近世の遺構 (図114) Y=2430およびY=2460付近に、東から西へと下る段差の存在が確認される。前者については中世以前から存在していたものが継承されているが、かなり直線的に整えられたものとなっている。段差の内部においては、土壌の状況から、この時期は水田であったものと想定され、段差方向に沿った幅50cm程度のごく浅い溝列が、灰褐色土Ⅱ上面で確認されている(図版31-1)。耕作時の痕跡である可能性が高い。段差の上面においては、すべてを図示していないが、農耕用の柵のものとみられる15cm四方程度の正方形のピットが全域で多数あるほかに、顕著な遺構はみられない。

SE1は、漆喰を枠とする野壺。大半を破壊されていた。段差を切って構築されているので、近代以降に下る可能性もある。SE11は幕末期の井戸。遺構面から2m以上攪乱で

破壊され、底部30cmほどを検出し得た。底面の標高は58.702m。径1mほどの正円形で、刻印をもつ棧瓦片や木製品の残骸が出土した(図版31-2)。遺物の内容から、慶応2(1866)年に設置されたとされる土佐藩邸に附属する遺構とみられ、調査地点が藩邸敷地内に含まれていたことが確認された。南側の208地点においても、刻印棧瓦を出土する同期の井戸を確認しているが〔浜崎ほか1995 図59〕、井戸底の標高は今回よりおよそ2.5m低い。

(2) 遺物 (図版45～48, 図115～122)

弥生・古墳時代の遺物(図115) SX5・SX6出土の2個体, SR1・SR3の埋土および上層への混入品として土器が少量出土している。石庖丁は後に詳述する。

II277～II280は受け口状を呈する口縁部片。II277は、外反気味に立ち上がる口縁端部が細く尖るように横撫でされ、細いV字状刻みを施す。II278・II279は、まっすぐ上に立ち上がり、口縁端部も面をもつ。II280はやや薄手で外方に向かって立ち上がる口縁部で、端部は丸く収める。いずれも小片で確実さに欠けるが、II277は弥生中期後葉のⅣ期、II278・II279は弥生後期前半、II280は同後期後半の範疇かと想定しておく。

II282は円筒埴輪。外面に断面長方形の突帯が貼り付けられ横位に刷毛調整される。黄白色の胎土をもつ。II283～II285は須恵器で、それぞれ2段の透かし窓の部分が残る高杯脚部片、短い立ち上がりを有する杯身片、波状文が施される高杯杯部片。これらは5～6世紀代のもので、周辺に集落や墳墓が存在した可能性を示唆している。

II286はSX6出土の甕。復元口径31.2cm, 器高40.5cm。口縁部は短く外折し、横撫でにより端部がわずかに上方へ肥厚する。端面は浅く凹み、下端に薄い板状工具の木口による斜位方向の繊細な刺突がめぐる。胴部外面は、上半が縦位の刷毛、下半は粗く削りあげており、砂粒の移動・脱落痕が著しい。底部付近には一部再び刷毛調整が重ねられる。内面は、上半は平滑に整えられ、下半を軽く削り上げる。底部付近は撫で上げられ、底面は指頭圧痕の凹凸が著しい。削りと撫での境界は器壁の厚さや傾きの変換点となっており、製作上の単位を反映するものとみられる。暗茶褐色を呈し、大粒の石英砂粒を多量に含む。弥生中期後葉のⅣ期、瀬戸内系甕の系譜をひいた在地色の濃い製品といえる。

II287はSX5出土の壺。復元口径25.8cm, 器高36.0cm。頸部より上は強く横撫でされ、屈曲して立ち上がる口縁部の側面と端面に凹線を1条もつ。胴部外面は全面刷毛調整で、下半は縦位に、上半は向かって左上がりの斜位に、それぞれ底部側から上へ流れるように浅く施される。底部周辺のみ縦位の粗い篋磨きがされる。底部は凹み底で、反時計回りにひと撫でされ、外縁に小さな篋刻みがめぐる。内面は、底部付近が撫で、それより上は縦

位の刷毛調整で、底部側から上へ向かって浅く長くおこなう。Ⅱ286と同様、底部付近の撫でと刷毛調整の境界が器壁の厚さや傾きの変換点となっており、製作上の単位を反映する。一見するとⅤ期の近江系受け口状口縁甕を想起させるプロポーシオンだが、技法的特徴から中期後葉のⅣ期に位置づけられ、底部の別作りと尖底化の指向を重視するならば、よりⅤ期に近いⅣ期末葉の製品と評価する。

石 庖 丁（Ⅱ281） 濃紺色を呈する粘板岩製の片刃の石庖丁で、長さ137mm、幅38mm、厚さ6mm、重さ44gをはかる。SX6に近接して黄色シルトから出土したので、弥生中期後半に帰属すると判断する。素材獲得ないし整形の痕跡と思われる背部の多数の階段状剝離は、稜がかなり磨滅しているが、B面の刃部右辺の階段状剝離も同様の剝離の痕跡であるとするれば、器体全体は、刃中央部がわずかに研ぎ減りしていると考えられるものの、未使用時の法量を比較的好くとどめていると思われる。上面に水田が営まれていた黄灰色・暗灰褐色シルト質土出土のⅡ268と、石材・厚さ・刃部角・背部加工方法という点で特徴を共有するが、Ⅱ281は法量がそれよりも一回り大きく、また器面を研磨している点で異なる。A面は器面が平滑で研磨痕を明瞭に残すが、B面は器面が粗く研磨痕も確認できない。使用痕は（図版45右上）、A面にはほとんどまったく確認できない。B面には、植物質を対象としたときの光沢とは一致しないけれども、わずかに光沢が確認できる部分がある。刃部には、中央付近に刃縁に直交して、研磨による線状痕とは異なる線状痕がある。

孔は3つある。側縁寄りの孔（断面a）とその隣の孔（断面b）は、最小径もA面側の最大径も孔断面形もほぼ同様であるのに対し、器体中央の孔（断面c）は他の二孔とそれらがわずかず異なる。孔の上場については、A面側で磨滅を認められるのは、器体中央の孔では真ん中の孔側、両者に挟まれた真ん中の孔では両側の孔側と背部側であり、側縁寄りの孔にも真ん中の孔側にわずかに認められる。B面側で磨滅を認められるのは、器体中央の孔では背部側と真ん中の孔側、真ん中の孔では背部側と器体中央の孔側である。側縁寄りの孔のB面側には上場の磨滅は認められない。こうした孔の上場の磨滅を紐掛け用の角減らさないし紐擦れによる磨滅と考えるならば、3つの孔が同時に機能しえたかは不明であるが、側縁寄りの孔は紐穴としてはほとんど機能していないものと思われる。その原因として、この孔付近の背部からの素材獲得ないし整形時の加撃によって潜在的に生じていたひびと、その後のこの孔の穿孔時のさらなる衝撃によるひびとが、この孔のA面側の上場にわずかに磨滅痕跡を残す程度の使用段階に貫通して、孔のB面背部側の器面が剝落したことが指摘できる。

古代の遺物 (図116) II 288～II 293は黒灰色砂質土出土遺物。II 288は土師器皿。「て」字状口縁手法B₁類。II 289は土師器甕。頸部内面に篋状工具先端の刺突による斜線がめぐっている。II 290は黒色土器A類の椀。II 291は灰釉陶器底部。貼付高台で、外面は回転篋削り。内面は、見込みに重ね焼きの痕跡が円形に残り、その内側が露胎、外側に透明の灰釉が薄くのる。II 292は緑釉陶器底部。黄白色の胎土をもつ軟質焼成で、全面に淡緑色の施釉。底部は削り出しの偏平な円盤高台。II 293は須恵器杯蓋。宝珠形つまみをもち、外面は全面回転篋削りする。

II 294～II 315は灰色砂質土出土遺物。II 294～II 297は土師器皿。II 294はB₁類、II 295はB₂類、II 296はB₃類、II 297は二段撫で手法C₂類。II 298は土師器甕。II 299は黒色土器A類の椀。II 300～II 305は緑釉陶器底部。II 300は灰白色胎土の軟質焼成で、底部外面以外に淡緑色施釉。削り出しの輪高台。II 301は白色胎土の軟質焼成で、釉は剝落して不明。底部は削り出しの輪高台。II 302は硬質焼成で、全面に緑色施釉。丈の高い貼付高台を有する。II 303は硬質焼成で、底部外面以外を淡緑色施釉。削り出しの蛇ノ目高台だが、底面中央は削りが及ばず回転糸切痕がのこる。内面は全面篋磨き。II 304は硬質焼成で、底部外面以外を淡緑色施釉。削り出しの輪高台で、高台周辺以外は篋磨き調整。II 305は灰白色胎土の軟質焼製。釉は不明だが、当初より施釉されていない素地である可能性もある。わずかに外へ踏ん張る形態の貼付高台で、底面には回転糸切痕がのこる。II 306～II 312は灰釉陶器。いずれも貼付高台だが、II 309～II 311は丈高で内彎気味の「三日月高台」とよばれる形状を示す。II 306～II 308の高台も、丈は低いが類似した特徴を示す。これら6点はいずれも底部外面は回転篋削りと撫で調整。釉は体部に刷毛塗りで白濁気味の透明釉。なおII 308は底に「大」の墨書があり、II 311は見込みに1cm幅の墨書き線が残されている。II 312は特徴が異なり、底部外面に回転糸切り痕が残る。釉も体部に浸け掛けする。II 313は越州窯系青磁で、斜め上方にまっすぐ立ち上がる口縁部。II 314・II 315は須恵器。II 314は口縁端部が玉縁状に肥厚する鉢、II 315は胴部が強く張る短頸の壺。

II 316～II 322は灰茶褐色砂質土出土遺物。II 316は土師器皿でB₁類。II 317～II 320は緑釉陶器底部。いずれも全面施釉。II 317～II 319は、黄白色の軟質焼製で、削り出しの円盤状高台をもつ。釉調はそれぞれ淡黄緑色、淡緑色、黄緑色を呈する。II 320は硬質焼製で、削り出しの輪高台をもち、濃緑色を呈する。II 321は灰釉陶器底部。三日月高台を有し、底部外面は回転篋削り調整。II 322は須恵器鉢の口縁部。II 314と同種だが、口縁端部の玉縁状肥厚に鋭さが失われている。

Ⅱ323～Ⅱ326はS D 140出土遺物。Ⅱ323は土師器皿でB₁類。Ⅱ324は灰釉陶器底部。断面三角形の貼付高台を有する小片である。Ⅱ325は灰釉陶器段皿の口縁部。残存する全面に施釉されている。Ⅱ326は管状土錘。黄白色の土師質焼成で、一端に黒斑がある。

Ⅱ327はS D 153出土遺物で、土師器皿B₁類。Ⅱ328はS D 141出土遺物で、須恵器杯蓋。口縁部のみ的小片である。Ⅱ329は緑釉陶器耳皿。明灰色土より中世の遺物に混じって出土。硬質焼成で、まだらに濃緑色の釉が全面にみられる。こぶりの貼付高台をもち、見込みに一条の圈線がめぐる。Ⅱ330は表土掘削時採集の須恵器小壺。胴部に「君」と読める刻書がある。底部は回転糸切痕がのこる。

以上は、平安時代中期、9世紀後葉～10世紀前葉を中心に、少量11世紀代に下るものを含む内容である。とくに黒灰色砂質土については前者に限定され、灰色砂質土や灰茶褐色砂質土に、新しい時期が微量含まれるといえる。総量が多くはないが、土師器よりも緑釉陶器や灰釉陶器の優品が目立ち、遺存度もよい。残念ながら遺構にともなうまとまった出土ではないが、南側の208地点などの成果からも指摘されていたように、調査地一帯が平安中期に重要度の高い空間であったことをあらためて裏付ける内容といえる。

中世の遺物（図117～120） Ⅱ331～Ⅱ355は灰茶褐色土出土遺物。Ⅱ331～Ⅱ336は赤褐色を呈する土師器小皿。Ⅱ331は二段撫で手法C₃類。Ⅱ332は一段撫で手法D₃類、Ⅱ333はD₅類、Ⅱ334はD₆類、Ⅱ335はE₁類。Ⅱ336は口縁端部を上方に軽くつまみ上げただけのような浅い器形で、系統を異にするとと思われる。Ⅱ337・Ⅱ338は土師器大皿で、それぞれE₁類とE₄類。Ⅱ339は口径23cmをはかる特大の皿で、口縁部形態はD₅類。オオヤツカサと呼ばれる種類のものだろう。Ⅱ340は灰白色の小椀。底部は凹む形態とみられる。Ⅱ341は同種の胎土の小形の受皿。Ⅱ342は土師器羽釜。黄白色の胎土で、小形品である。Ⅱ343は瓦器椀。口縁端部内側に細い沈線が一条はしり、内面は密に篋磨きされている。Ⅱ344は瓦器羽釜ミニチュア。Ⅱ345は瓦器鍋。炭素吸着が不十分で、全体に灰色を呈する。Ⅱ346～Ⅱ348はいずれも龍泉窯系の青磁とみられる皿や椀。Ⅱ349は青白磁皿。薄い器壁で、内面に段をもつ。Ⅱ350～Ⅱ352は白磁で、口禿の皿口縁部と椀の底部。高台周辺の外面は露胎である。Ⅱ353は須恵器すり鉢の口縁部。端部は上方に大きく肥厚する。Ⅱ354は灰釉系陶器のミニチュア皿。Ⅱ355は鬼瓦。左側の脚端部で、斜方向の刻線と大部分が剥落している珠文帯がある。

Ⅱ356～Ⅱ360は暗茶褐色土出土遺物。Ⅱ356は灰色を呈する土師器皿で、F₄類。口唇部に煤が付着する。Ⅱ357は赤褐色を呈する土師器皿で、E₄類。Ⅱ358は灰白色の凹み底小

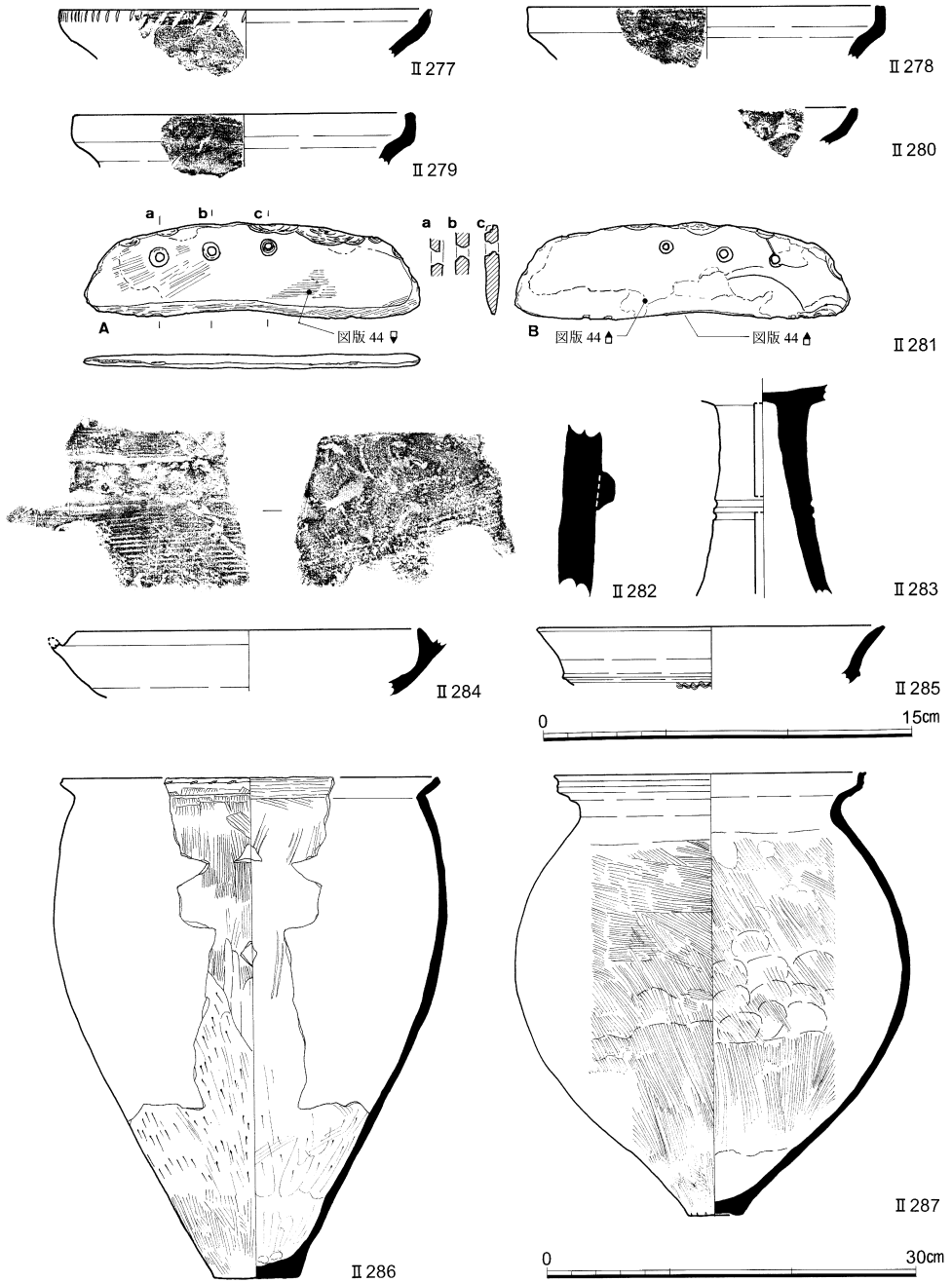


図115 S R 1 北肩黄色シルト出土遺物 (II 277弥生土器, II 281石庖丁), S R 1 砂礫出土遺物 (II 283須恵器), S X 5 出土遺物 (II 287弥生土器), S X 6 出土遺物 (II 286弥生土器), S R 2 出土遺物 (II 285須恵器), S R 3 出土遺物 (II 278~II 280弥生土器, II 284須恵器), 灰色砂質土出土遺物(1) (II 282埴輪) II 277~II 285縮尺 1/3, II 286・II 287 縮尺 1/6

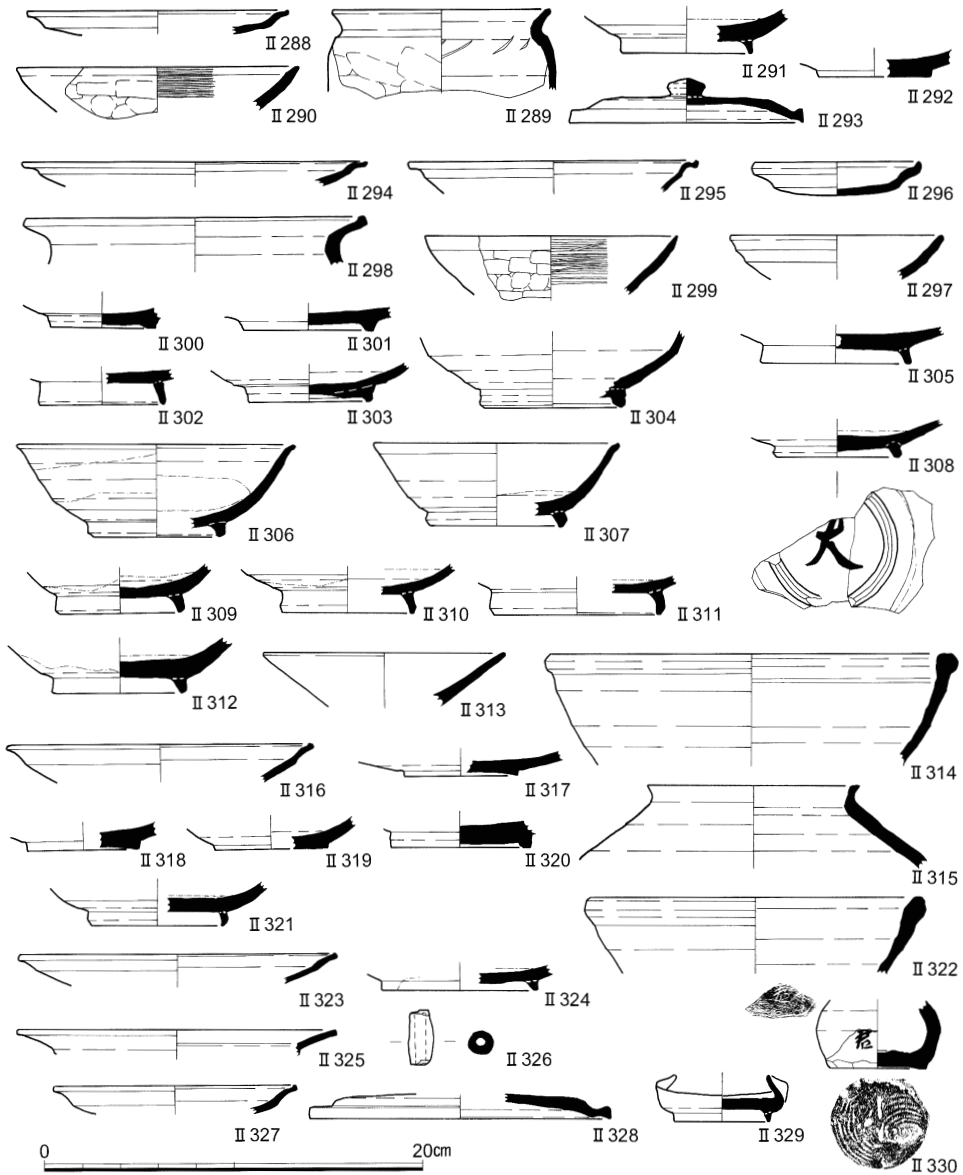


図116 S R 1 黒灰色砂質土出土遺物 (II 288・II 289土師器, II 290黒色土器, II 291灰釉陶器, II 292緑釉陶器, II 293須恵器), 灰色砂質土出土遺物(2) (II 294~II 298土師器, II 299黒色土器, II 300~II 305緑釉陶器, II 306~II 312灰釉陶器, II 313青磁, II 314・II 315須恵器), S R 1 灰茶褐色砂質土出土遺物 (II 316土師器, II 317~II 320緑釉陶器, II 321灰釉陶器, II 322須恵器), S D 140出土遺物 (II 323土師器, II 324・II 325灰釉陶器, II 326土錘), S D 153出土遺物 (II 327土師器), S D 141出土遺物 (II 328須恵器), 明灰色土出土遺物(1) (II 329緑釉陶器), 表土出土遺物 (II 330須恵器)

碗。Ⅱ359は青磁合子の蓋。Ⅱ360は青磁碗の底部で、見込みに花文が線で描かれる。高台の内側は露胎。

Ⅱ361～Ⅱ368は明灰色土出土遺物。Ⅱ361～Ⅱ364は赤褐色を呈する土師器皿で、それぞれC₃類・D₆類・D₃類・E₄類。Ⅱ365・Ⅱ366は灰白色を呈する土師器碗、Ⅱ367は同種の胎土の受皿。Ⅱ368は青磁梅瓶の蓋。内側は露胎で回転糸切痕が残る。

Ⅱ369～Ⅱ378は暗灰色土出土遺物。Ⅱ369～Ⅱ372は赤褐色を呈する土師器皿で、それぞれE₄類・E₄類・F₂類・F₃類。Ⅱ373は白磁合子のミニチュア。Ⅱ374は灰釉系陶器の碗底部。いわゆる古瀬戸で、底部は削り出しによる低い高台で露胎。内面に黄緑色の施釉。Ⅱ375は灰釉系陶器皿。これも古瀬戸で、わずかに残る見込みに卸し目が確認される。Ⅱ376は須恵器すり鉢の口縁。端部は強く外反したのち上方へ肥厚する。Ⅱ377は陶器壺の、細い頸部から強く張る胴部にかけての部分。外面には1条の沈線がめぐる。内面には縦位の刻線が口縁部に向かってのびる。常滑窯の三筋壺の系譜に連なる製品であろう。Ⅱ378は陶器すり鉢の口縁で、8条の卸し目がある。備前とみられる。

Ⅱ379～Ⅱ402は茶褐色土出土遺物。Ⅱ379～Ⅱ386は褐色を呈する土師器皿。Ⅱ379・Ⅱ383はE₄類、Ⅱ380～Ⅱ382はF₁類、Ⅱ384・Ⅱ385はF₂類、Ⅱ386はF₃類。Ⅱ387・Ⅱ388は灰白色を呈する土師器凹み底小碗。Ⅱ389は同種の胎土の受皿。Ⅱ390は土師器ミニチュア羽釜で、黄白色を呈する。Ⅱ391は瓦器火鉢の口縁。側面に重四角文のスタンプがめぐる。Ⅱ392は青磁洗の口縁。厚手の器壁で外面に鑄連弁文がめぐる。Ⅱ393・Ⅱ394は白磁で、底部と輪花の皿。いずれも釉調がくすんだ白色で、胎土もやや粗放である。Ⅱ395・Ⅱ396は灰釉系陶器の皿。いわゆる古瀬戸で、Ⅱ395の底面をのぞき、淡黄緑色に施釉されている。Ⅱ397はこの種の古瀬戸の鉢。短く外反する口縁部をもつ。Ⅱ399は陶器皿。高台内側を除き白色の長石釉がかかる志野。Ⅱ400は陶器すり鉢口縁。短く外反する口縁部で、内面に6条の卸し目がある。長石粒を含む赤褐色の胎土で、信楽とみられる。Ⅱ402は陶器の底部。暗赤色の胎土で、内面に暗褐色施釉を地とした黒色の筆書き文様がみられる。特徴から唐津の可能性が高い。

Ⅱ403・Ⅱ404は段差際の暗黄灰色土(図88-b層)出土遺物。Ⅱ403は青磁碗。高台内側以外を全面に黄褐色施釉。見込み中央にくずれた花文風の文様がある。Ⅱ404は陶器輪花皿。白色の長石釉が厚くかかる志野。

Ⅱ405～Ⅱ411は黄灰色土出土遺物。Ⅱ405～Ⅱ408は土師器皿で、Ⅱ405はE₄類、Ⅱ406はF₃類、Ⅱ407はF₂類、Ⅱ408は見込みに浅い圈線状のものが1条めぐり、F類よりも後

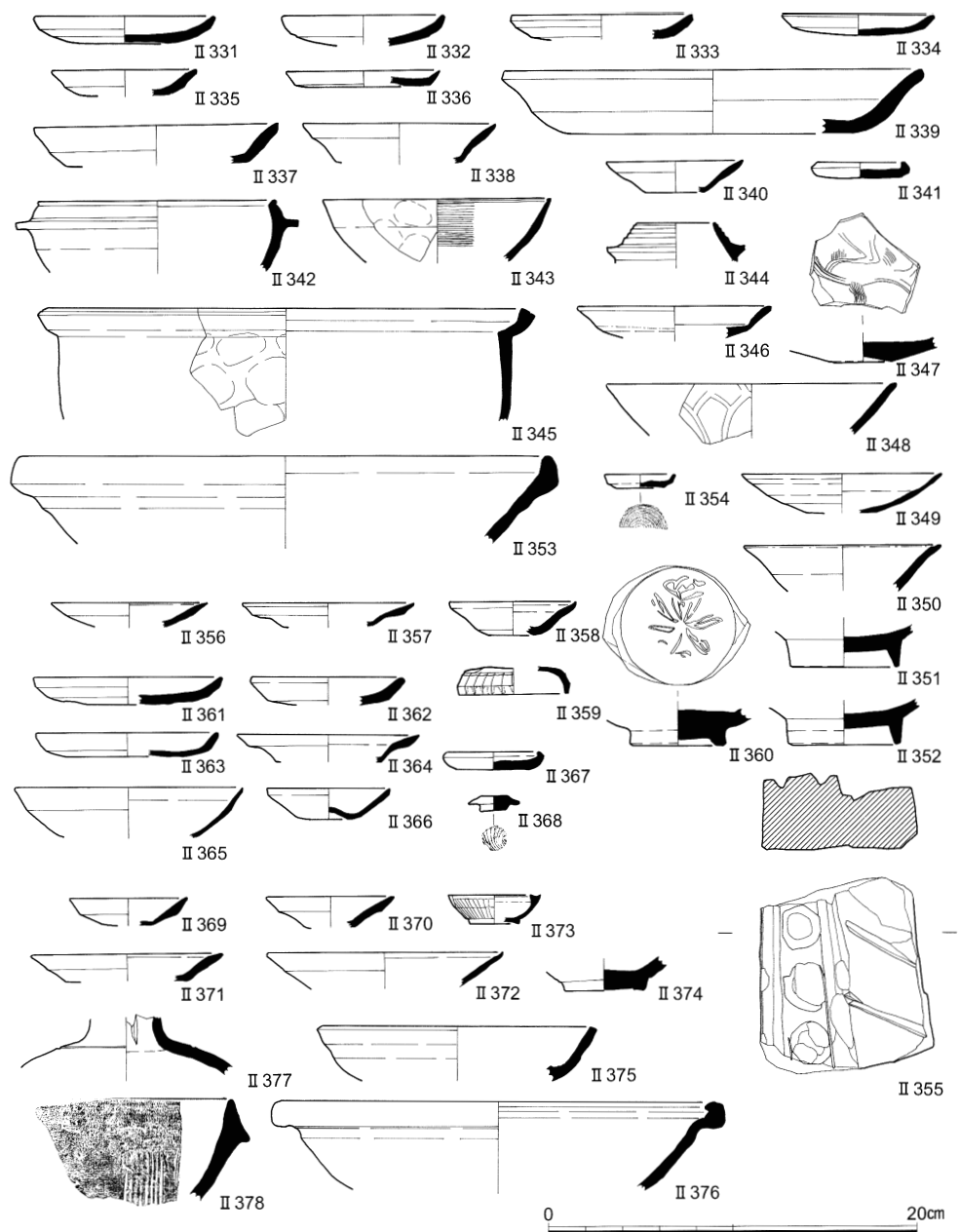


図117 灰茶褐色土出土遺物 (II 331~II 342土師器, II 343~II 345瓦器, II 346~II 348青磁, II 349青白磁, II 350~II 352白磁, II 353須恵器, II 354灰釉系陶器, II 355鬼瓦), 暗茶褐色土出土遺物 (II 356~II 358土師器, II 359・II 360青磁), 明灰色土出土遺物(2) (II 361~II 367土師器, II 368青磁), 暗灰色土出土遺物 (II 369~II 372土師器, II 373白磁, II 374・II 375灰釉系陶器, II 376須恵器, II 377・II 378陶器)

弥生中期～近世の遺跡

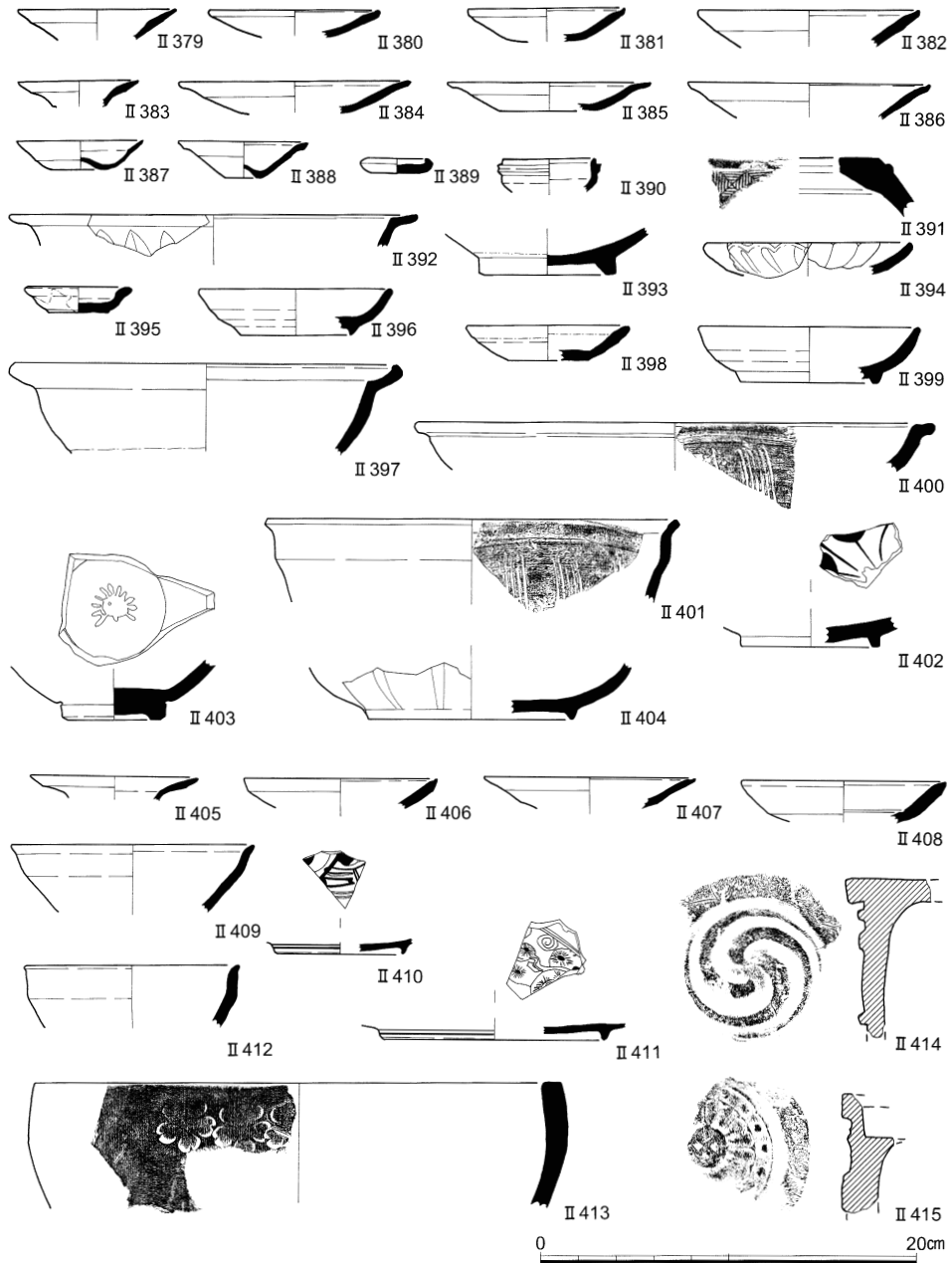


図118 茶褐色土出土遺物（II 379～II 390土師器，II 391瓦器，II 392青磁，II 393・II 394白磁，II 395～II 398灰釉系陶器，II 399～II 402陶器），暗黄灰色土出土遺物（II 403青磁，II 404陶器），黄灰色土出土遺物（II 405～II 408土師器，II 409灰釉系陶器，II 410・II 411青花），S E 2出土遺物（II 412灰釉系陶器），S D 134出土遺物（II 413瓦器，II 414・II 415軒丸瓦）

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

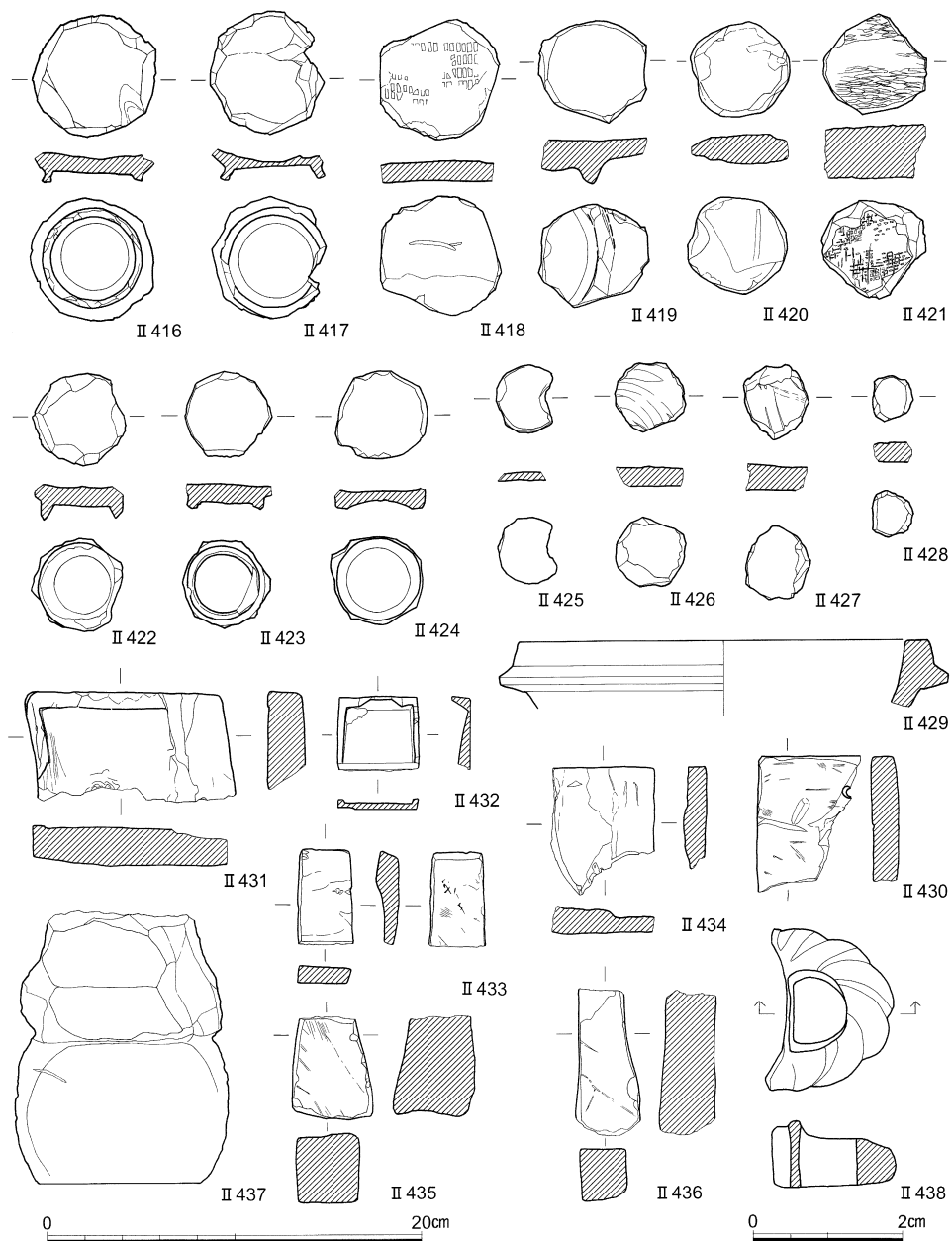


図119 加工円盤 (II 416・II 417・II 419・II 422・II 423・II 425・II 428茶褐色土, II 418暗灰色土, II 420・II 421 S X2, II 424黄灰色土, II 426・II 427茶褐色土), 石鍋 (II 429 S R 1 灰茶褐色砂質土), 滑石製温石 (II 430灰茶褐色土), 硯 (II 431明灰色土, II 432暗灰色土), 砥石 (II 433・II 434茶褐色土, II 435灰茶褐色土, II 436灰色砂質土), 一石五輪塔 (II 437茶褐色土), 青銅製刀栗形 (II 438暗茶褐色土) II 438縮尺1/1, ほか縮尺1/4

出の製品。Ⅱ409は灰釉系陶器天目の椀。Ⅱ410・Ⅱ411は磁器青花の皿底部。ともに器壁は薄く、高台の畳付は露胎。

Ⅱ412はS E 2出土遺物。灰釉系陶器天目の椀。

Ⅱ413～Ⅱ415はS D 134出土遺物。Ⅱ413は瓦器火鉢で、側面に桜花文のスタンプがある。Ⅱ414・Ⅱ415は軒丸瓦で、それぞれ左巴文と、中房に卍をもつ複弁蓮華文。

以上の中世遺物は、12世紀末葉～17世紀前半の長期にわたる。このうち、灰茶褐色土はおおむね14世紀前半代、暗茶褐色土・明灰色土は14世紀後半代、暗灰色土は15世紀前半代、茶褐色土は16世紀代、段差際の暗黄灰色土や黄灰色土などは17世紀前半代までのものを含む。遺物はいずれも小片で、長期にわたる耕地利用の過程で流入し堆積したのであろう。

加工円盤（Ⅱ416～Ⅱ428） 土器や瓦の破片を打ち欠き円盤状に加工したものが各層から総計25点出土した。素材は多様で、Ⅱ416・Ⅱ417は須恵器底部、Ⅱ418は常滑窯産陶器甕胴部、Ⅱ419は灰釉系陶器すり鉢底部、Ⅱ420は瓦器盤、Ⅱ421・Ⅱ427・Ⅱ428は硬質焼成の瓦、Ⅱ422は白磁椀、Ⅱ423は青磁椀、Ⅱ424は灰釉系陶器天目椀のそれぞれ底部、Ⅱ425は土師器皿底部、Ⅱ426は須恵器甕胴部。基本は側面を打ち欠いて形を整えるものだが、軟質のものでは明らかに研磨を加え仕上げている（Ⅱ420・Ⅱ425など）。破損の少ない20例の法量は、径で40mmと50mm前後、重さで20gと40g前後に、ある程度まとまりがみられた（図120）。同種の遺物は「円盤状土製品」とも呼ばれ、草戸千軒町遺跡など各地の中世集落遺跡で多数出土が報告されるが、用途に関する定説はない。今回、中世に耕作地と想定され、土器出土量が多くはない中で多数を抽出できたことが注意される。

石製品（Ⅱ429～Ⅱ437） Ⅱ429は滑石製石鍋。破損面を再加工した痕跡はない。Ⅱ430は滑石製板状製品。穿孔跡があり、両面とも擦過痕が著しい。類例からみて温石であろうが、片面がわずかにくぼむことから、ある時期硯として使用された可能性もある。

Ⅱ431・Ⅱ432は硯。Ⅱ431はおおぶりで厚手の製品で、黒灰色の粘板岩系の石材を用いている。側面は磨いて仕上げるが、裏面は素材の凹凸がそのまま残る。Ⅱ432は赤褐色の比較的軟質の石材を用いた小形品で、手前側の側面には擦り切りによる切断痕がそのまま残る。Ⅱ433～Ⅱ436は砥石。ただし、このうちⅡ433・Ⅱ434は、Ⅱ432の硯とまったく同じ石材であり、側面を整えているほかに顕著な使用痕跡も見られないことから、硯の素材ないし未製品である可能性も考えられる。Ⅱ435は黄褐色の、Ⅱ436は明灰色の、それぞれ目の細かい石材を用いた方柱状の製品。四面とも使用の痕跡が著しい。

Ⅱ437は凝灰岩製の一石五輪塔頂部付近。破損が著しい。このほか、図示していないが、

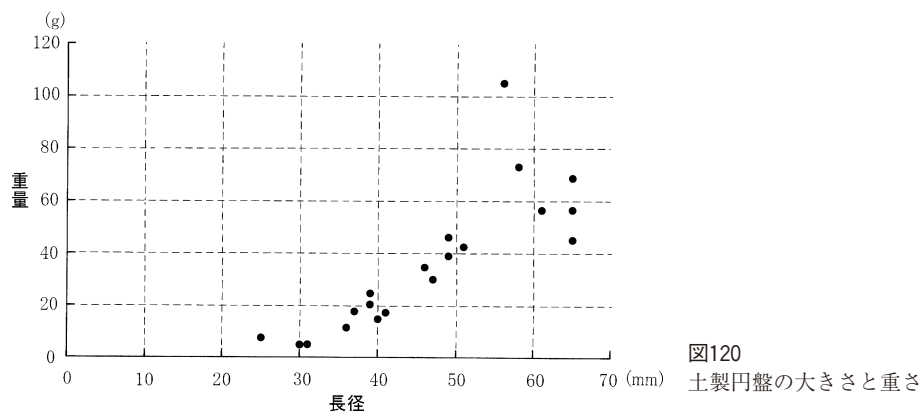


図120 土製円盤の大きさ重量

花崗岩製の径30cmに達する五輪塔水輪1点が、茶褐色土中より単独出土している。

青銅製品 (II 438) 鑄造の青銅製品で、刀装具のひとつで紐掛けとして鞘に取り付ける「栗形」が出土している。螺旋状に装飾されるの紐掛け部には、黒漆の付着をわずかに認める。ほぼ同種のものが草戸千軒町遺跡 S K 4326より出土している〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1995 Fig.4-55〕。

近世の遺物 (図121・122) 椀瓦については後述する。II 439～II 443は灰赤褐色土 II 出土遺物。II 439～II 441は土師器皿。II 439は直線的に立ち上がり口縁端部がわずかに外反する器形で、F₄類に近い特徴を有する。II 440は薄手の小皿で、口縁は内彎気味に立ち上がる。これらとともに底部との変換点で破損しており、見込みの圏線の有無は不明。II 441は丸底の小皿。II 442・II 443は磁器染付の椀。

II 444～II 451は灰赤褐色土 I 出土遺物。II 444・II 445は土師器皿。II 444は、器高の低い偏平な形態で、内面に墨書をもつ。II 445は手づくねで作った丸底の皿。II 446は陶器灯明皿。口縁部に帯状に煤が付着する。II 447は陶器椀の底部。削り出しの輪高台で、内側に「吉」の朱書がある。あるいは中世にさかのぼる遺物かもしれない。II 448・II 449は陶器椀。白色の胎土に淡黄色の釉が、高台周辺をのぞいて施される。京都・信楽系の製品であろう。II 450は磁器染付皿。II 451は磁器染付のくらわんか椀。

II 452～II 470は灰褐色土 I 出土遺物。II 452～II 455は土師器皿、いずれも偏平な器形で、見込みに圏線がめぐる。II 456～II 459は陶器灯明受皿。II 457～II 459は、受部がまっすぐ立ち上がる形態で、黄白色の胎土に、内面に淡黄灰色の釉。京都・信楽系の製品とみられる。一方II 456は、受部が内傾する形態で、淡赤褐色の胎土に、内面に厚い白色釉がかかるなど特徴がまったく異なる。別産地のものであろう。II 460・II 461は灯明皿。II 461は

弥生中期～近世の遺跡

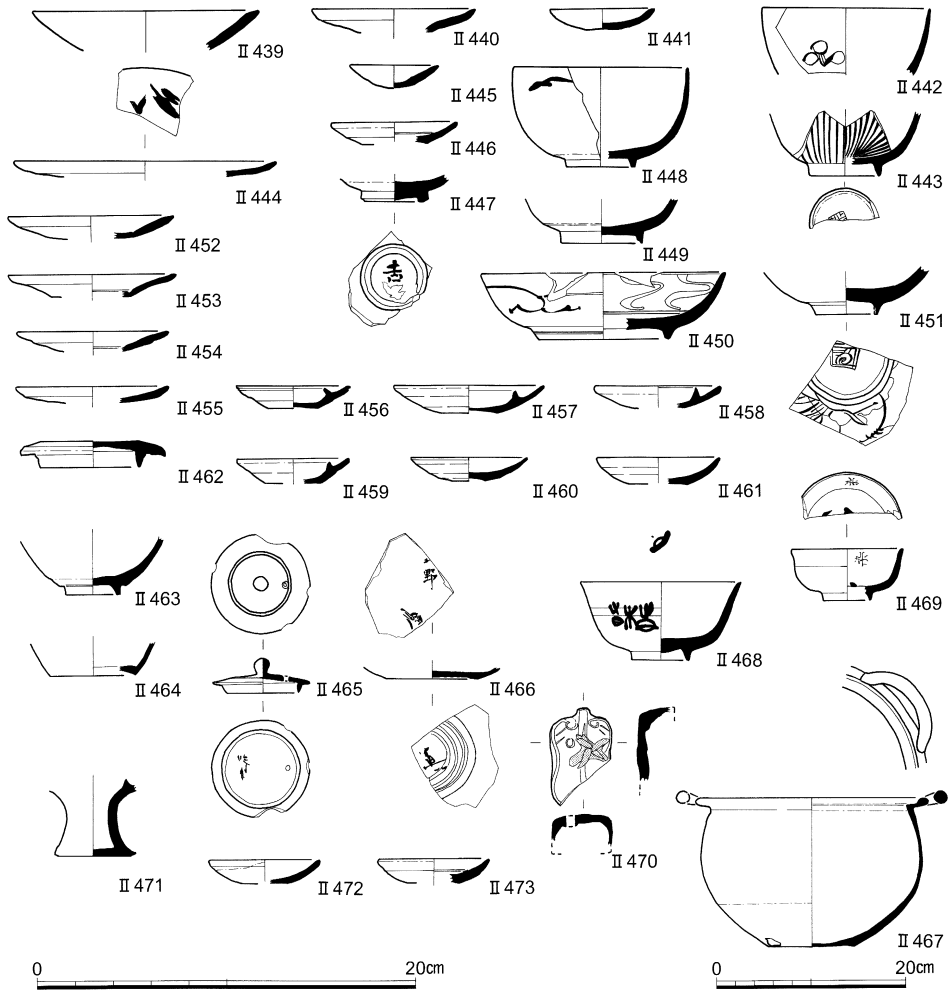


図121 灰赤褐色土Ⅱ出土遺物（Ⅱ439～Ⅱ441土師器），Ⅱ442・Ⅱ443磁器），灰赤褐色土Ⅰ出土遺物（Ⅱ444・Ⅱ445土師器，Ⅱ446～Ⅱ449陶器，Ⅱ450・Ⅱ451磁器），灰褐色土Ⅰ出土遺物（Ⅱ452～Ⅱ455土師器，Ⅱ456～Ⅱ467陶器，Ⅱ468～Ⅱ470磁器），赤褐色土出土遺物（Ⅱ471磁器，Ⅱ472・Ⅱ473陶器） Ⅱ467縮尺1/8，ほか縮尺1/4

口縁外面に煤の付着を認める。いずれも内面のみ施釉。Ⅱ462は陶器蓋。完形品で，外面のみ黄灰色の釉。Ⅱ463は陶器碗底部。底面外縁を水平にしっかりと削り，高台の存在を際立たせている。Ⅱ464は陶器底部。薄手の器壁で，急須などの底部か。内外面とも銹釉が施され，茶褐色を呈する。底面には布目があり，側面に「温吉」のスタンプが押されている。Ⅱ465は陶器蓋。白色の胎土に透明釉がかかる。外面に茶色の二重線，内面には黒

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

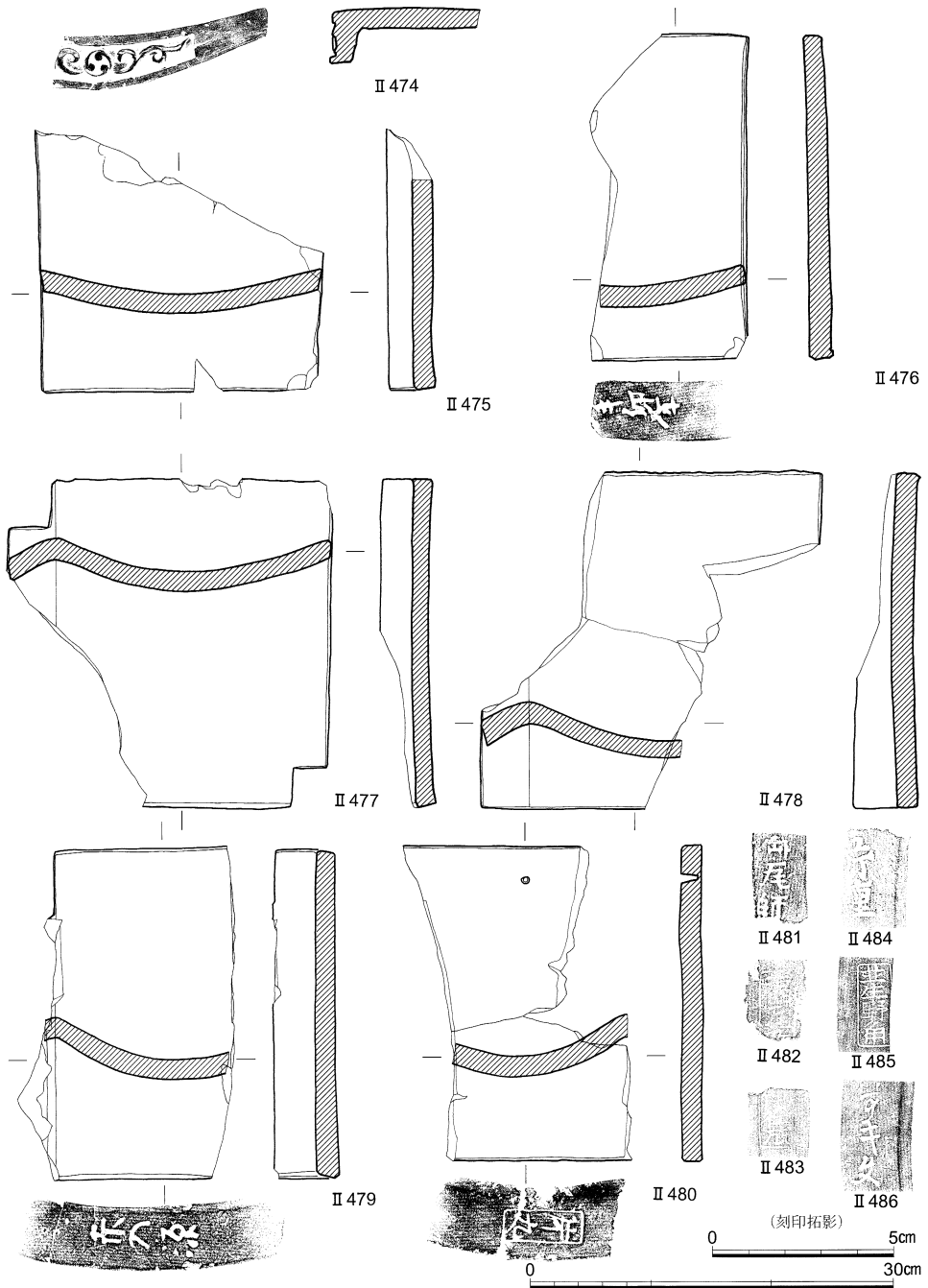


図122 近世棧瓦 (II 474・II 486表土, II 475・II 479・II 484~II 485赤褐色土, II 476~II 478 S E 11, II 480・II 483灰褐色土 I, II 481・II 482灰赤褐色土 I) 縮尺1/6(刻印拓影1/2)

色の線描きで銘があるが判読できない。Ⅱ466は陶器の底部。器壁は非常に薄い。焼成の甘い灰色の素地に、底面を除き黄色に施釉されている。内面に暗茶褐色の線描きで「北野」と鳥の絵、底面に同色で銘とみられる崩れた「道八」の文字がある。Ⅱ467は陶器鍋で、灰褐色土Ⅰ層中で多数の破片が一括出土した。口径25cm器高16cm。環状の把手が2方向に付くと想定されるが、片側は破損して失われている。それ以外は良く遺存するので、把手が破損したことにより不要品として廃棄されたのであろう。底部には瘤状の三足が貼り付けられているが、底面より浮いた位置にあり、脚としては機能しない。灰白色の胎土で釉は淡黄色、底部周辺と頸部内面の屈曲部付近が露胎。京都・信楽系の製品だろう。外面は胴部下端付近のみ帯状に煤が付着し、内面は底部が黒変している。Ⅱ468は磁器染付の椀。口縁先端部のみ銹釉で茶褐色を呈する。同種の製品は構内各所で出土している。Ⅱ469は磁器染付小椀。内面に「染」字が釉描きされているのがわかる。Ⅱ470は磁器染付の中空の製品で、1孔をもつ。特徴から水滴の底部が欠損したものとみられ、相撲の軍配をかたどったものと推測される。

Ⅱ471～Ⅱ473は赤褐色土出土遺物。Ⅱ471は陶器脚付灯明受皿。灰白色の胎土で、釉は黄灰色。底面は回転糸切り痕があり露胎、それ以外は全面施釉。Ⅱ472・Ⅱ473は陶器灯明皿。ともに黄白色の胎土で口縁端部周辺から内面全体に淡黄緑色の釉。見込みに粒状の目痕。京都・信楽系の製品だろう。

近世棧瓦（Ⅱ474～Ⅱ486） 灰赤褐色土Ⅰから表土にかけてと井戸SE11から、若干量が出土した。南側の208地点出土品と同銘の刻印をもつものがあり、この地に設営された幕末期土佐藩邸の所用瓦である。Ⅱ474は軒右棧瓦。中心飾りを三巴文、左右に唐草を配する。Ⅱ475・Ⅱ476は平瓦。Ⅱ476端面に刻印「キ卯平」。208地点では26点出土しており、本来「アキ卯平」とされる。Ⅱ477～Ⅱ479は右棧瓦。Ⅱ479は端面に刻印「赤の源」。Ⅱ480は左棧瓦とみられ、端面に枠囲み刻印「片九」。ほか、小片だが刻印が確認されたものは、その拓影のみ示す。Ⅱ481は「御瓦師」、Ⅱ482は枠囲み「福瓦作」、Ⅱ483は枠囲み「赤傳仕成」、Ⅱ484は「片重」、Ⅱ485は枠囲み「並生野角」、Ⅱ486は「アキ文」。このうちⅡ482「福瓦作」は、208地点では出土していない。

以上の近世遺物は、おおむね18・19世紀代のものである。このうち灰赤褐色土Ⅰ、灰褐色土Ⅰや赤褐色土には、例えばⅡ468などのように、瀬戸窯産とみられる磁器が存在するほか、棧瓦など明らかに幕末期以降の遺物が含まれる。一方灰赤褐色土Ⅱには、そうしたものはみられないので、おおむね18世紀代までを中心とする堆積層と判断される。

6 SX5の原位置論的検討

SX5は、SR1北肩のg層の上部で検出されたが(図87・112)、g層上面からの掘り込みはなかった。土器片の集中は掘削中に確認されたので、掘り込みがないか注意したが輪郭は見つからなかった。掘り込みは当初から存在しなかったのだろう。一個体分の土器(Ⅱ287)が単独で残存率も比較的高い状態で掘り込みもなく出土したこの遺構の、形成の要因を解釈するためには、堆積環境、出土状況、破片の特徴、といった情報を総合的に捉える必要があるが、この解釈には、土器の製作から取り上げまでの履歴についての解釈も必然的にとまなうことになる。ここでは、紙幅の都合もあるので、基礎的な情報の提示と概要の説明にとどめ、詳細な検討と踏み込んだ解釈は場を改めて提示することにする。

集中部から回収された土器片は150点弱であるが、遺物の存在に留意しながらの掘削をおこないかつ破片の存在を確認してからは丁寧に掘り下げているので、回収し損なった破片はごくわずかといえる。このうちの約130点の破片については、発掘調査時に三次元的な出土位置を記録している。また、整理作業時には、出土位置の記録のある破片それぞれについて、器面や破面の磨滅程度や接合面の密着度合いなども観察・記録したほか、遺構写真をもとにして出土時点での向きや口縁方位などの把握に努めた(図版32-5、図版49)。

土器片を包含していたg層は、黄色みの強いシルト質土で、層中には径5mmに満たない花崗岩風化砂粒が散在する。この地層は、東方から多量の礫をとまなつて黄色砂を削りながら進んできた白川系の水流が、南側にその礫を厚く堆積させて北側の黄色砂との間に東西方向の窪みをつくり、その窪みに緩やかに水を流しながらシルト分を運んできたことによって、形成されたと思われる。しかし、ラミナが確認されていないことと花崗岩粒が散在することから、水流のみによる堆積ではなく、水際のような環境だったと考えられる。

出土破片全体の標高は、南北方向では北側が高く東西方向では東側がいくぶん高いので、自然地形の特徴と同様である(図123・表14)。部位別分布は、東から西へと進むにつれて口縁部から胴部を経て底部へと移っていくが、出土時の口縁方位は、むしろ西を基調とする破片が多い。内面を上に向けて出土した破片は外面上向けの倍以上あり、器面の遺存状態も内面がやや磨滅している破片が最も多い。個々の破片の対応関係は単純ではないが、これらの傾向は、破片が水の影響で微動したことを示すかもしれない。破損後の移動がすすかだとすれば、内面上向けの出土破片が多い点は、破損時に内容物が存在していたことを示すかもしれないが、この解釈にも個々の破片についての詳細な分析を必要とする。

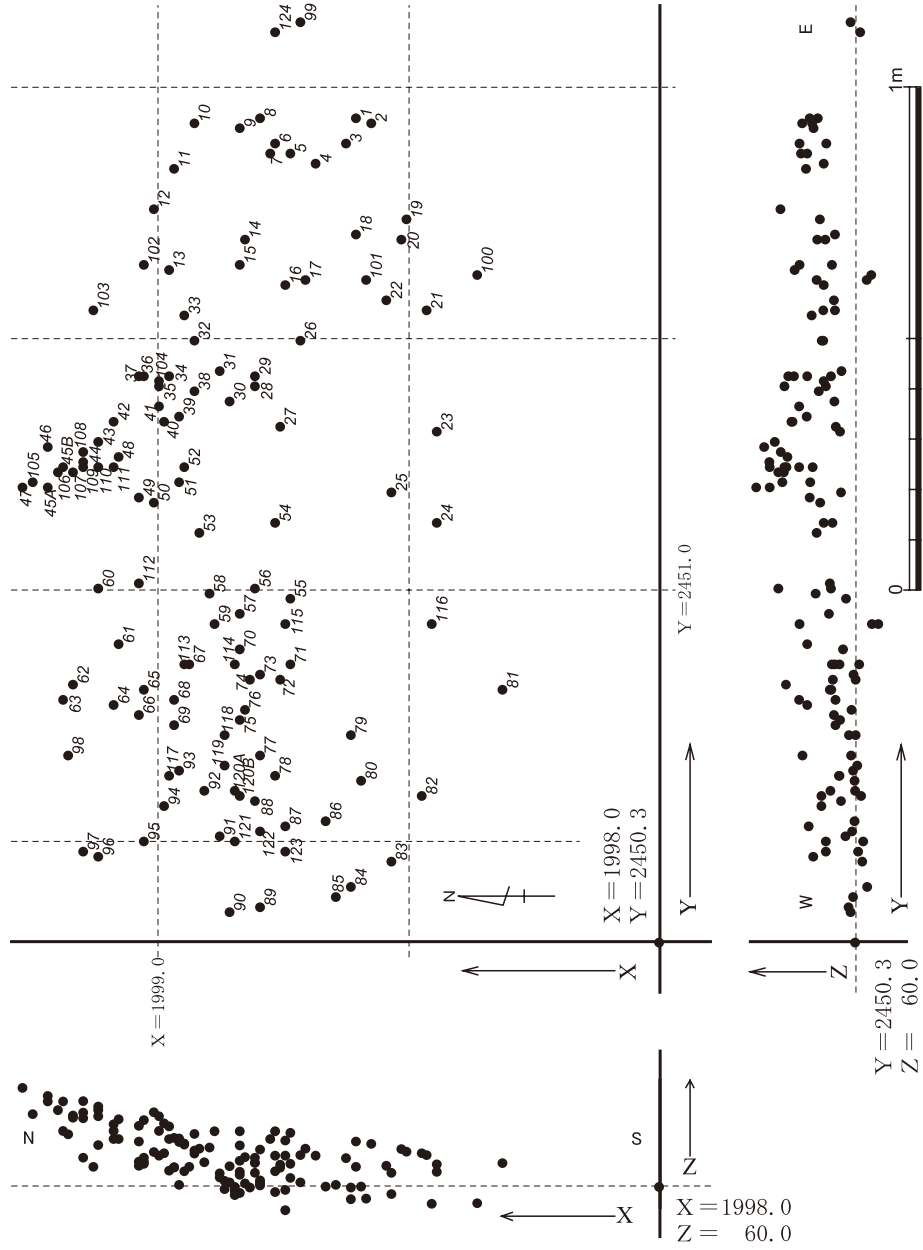


図123 S X 5出土土器片の分布 縮尺1/15

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

表14 S X 5 出土土器片観察表

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内摩滅	破面摩滅
1	胴	39	南	外	1998.600	2451.930	60.090	B/B	B2C3
2	胴	36	西	外	1998.570	2451.920	60.085	B/B	C3
3	口縁	81	西	内	1998.620	2451.880	60.057	B/B	B1C3
4	頸	64	東	内	1998.680	2451.840	60.062	A/B	B3C1
5	胴	32	南西	外	1998.730	2451.860	60.107	B/B	B2C1
6	胴	34	南東	内	1998.760	2451.880	60.110	A/B	B3C1
7	胴	44	北	内	1998.770	2451.860	60.095	A/B	B3C1
8	胴	50	地	立(北)	1998.790	2451.930	60.074	A/B	B4C1
9	胴上	74	西	外	1998.830	2451.910	60.082	B/A	B3C1
10	口縁	63	北	外	1998.920	2451.920	60.105	B/B	B4
11	胴	37	—	—	1998.960	2451.830	60.097	A/A	A1B3
12	胴	60	天	立(西)	1999.000	2451.750	60.148	B/A	C3
13	胴	74	南西	内	1998.970	2451.630	60.120	A/B	B1C3
14	胴	54	—	立(西か)	1998.820	2451.690	60.059	A/B	B3C1
15	胴	78	東	内	1998.830	2451.640	60.110	A/B	B3C2
16	胴	46	天南	立(東)	1998.740	2451.600	60.062	A/B	B4
17	口縁	80	東	内	1998.700	2451.610	60.076	A/B	B2
18	胴	48	東	内	1998.600	2451.700	60.040	A/B	B4C1
19	胴	28	北	外	1998.500	2451.730	60.070	A/A	B4
20	胴	35	西	内	1998.510	2451.690	60.075	A/A	B4
21	胴下	25	—	立(西)	1998.460	2451.550	60.063	A/A	B5
22	胴	67	北東	外	1998.540	2451.570	60.042	B/B	B3C1
23	胴	33	地南東	立(北東)	1998.440	2451.310	60.030	B/B	B3C1
24	頸	35	天	立(北)	1998.440	2451.130	60.045	A/B	B4
25	胴上	30	北西	外	1998.530	2451.190	60.028	B/B	B3C1D1
26	胴	47	北	外	1998.710	2451.490	60.063	B/A	B3
27	胴	85	南	内	1998.750	2451.320	60.038	A/B	A3B1
28	胴	21	北東	外	1998.800	2451.400	60.058	A/A	A2B1
29	胴	43	西	内	1998.800	2451.420	60.048	A/B	B3
30	胴	93	南東	内	1998.850	2451.370	60.041	A/B	B3C2
31	胴	73	天西	立(南)	1998.870	2451.430	60.027	A/B	B2C2
32	胴	66	南西	内	1998.920	2451.490	60.066	A/B	B3C1
33	胴	67	天南東	立(北東)	1998.940	2451.540	60.086	A/B	B3C1
34	胴	88	西	内	1998.970	2451.420	60.095	A/B	B3C2
35	胴上	46	天西	立(北)	1998.990	2451.400	60.140	A/B	B2C2
36	胴	63	—	立(—)	1999.020	2451.420	60.132	A/B	A1B4
37	胴	81	天南東	立(北東)	1999.030	2451.420	60.121	A/A	A1B3C3
38	胴	74	南	内	1998.920	2451.390	60.072	B/B	B3C3
39	口縁	105	西	内	1998.950	2451.340	60.096	A/B	B5
40	口縁	79	西	内	1998.980	2451.330	60.126	A/B	B5
41	口縁	75	北西	内	1998.990	2451.360	60.111	A/B	B3C1
42	口縁	100	西	内	1999.080	2451.330	60.124	A/B	B1C2
43	胴	33	西	内	1999.110	2451.290	60.159	A/B	B2C1
44	胴	91	西	内	1999.140	2451.250	60.170	A/B	B2C3

S X 5 の原位置論的検討

表14 つづき

番号	剥離	付着物	接合関係(接合状態)
1	内全		86(B),100(B)
2			32(B),33(C),51(B)
3	内外		4(C),10(C),99(B),124(B)
4			3(C),15(C),124(C),包(C),包4(B)
5			8(B),36(B),包(B),包(C)
6		内・断	なし
7			14(B),31(C),103(A),包1(B)
8			5(B),9(B),19(B),包(B),包(B)
9			8(B),19(C),99(C),包(B),包(B)
10	内		3(C),54(C),99(B)
11	内外	断	なし
12			13(B),53(C),55(C),103(C),包(C)
13			12(B),38(B),61(B),107(B),包(B)
14			7(B),31(B),32(B),33(B),103(×)
15			4(C),包4(B),包(C)
16			27(B),28(B),37(C),112(B)
17			94(C),124(B)
18			77(B),83(B),100(A),101(B)
19			8(B),9(C),20(B)
20			8(B),19(B),111(B),包(B)
21	外	内・外・断	なし
22	外		包(C)
23			29(B),36(B),包(C)
24	外		25(B),39(×),54(C),包(B)
25	内		24(B),36(C),包(B)
26			101(B),包1(C)
27			16(B),28(A),41(C),45A(B),47(C)
28			16(B),27(A),39(B),41(B),112(C)
29	外		23(B),30(A),110(A)
30	内外		29(A),36(C),37(B),110(B)
31	内外		7(C),14(B),32(B),包1(C)
32	内外		2(B),14(B),31(B),51(B),包8(C)
33			2(C),14(B),包(B)
34	外		35(A),38(C),45B(B),46(B),59(A),81(B),104(C),105(B),107(C)
35			34(A),40(B),42(C),59(B),81(B)
36	内		5(B),23(B),25(C),包(B),包(B)
37	内外		16(C),30(B),48(C),113(B),包(B),包(C)
38	外		13(B),34(C),81(C),107(A)
39	内外		24(×),28(B),41(A),54(B),112(B),包(C)
40			35(B),42(B),59(B),包(A),包(B)
41	内外		27(C),28(B),39(A)
42	外		35(C),40(B),50(B)
43			44(A),48(A),62(A)
44	内		43(A),45A(B),48(B),49(C),62(C)

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

表14 つづき

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内摩滅	破面摩滅
45A	胴	35	北	内	1999.210	2451.200	60.169	A/B	B2C1
45B	胴	98	西	内	1999.180	2451.240	60.169	A/B	A1B5C1
46	胴	50	北	内	1999.210	2451.280	60.180	A/B	B4
47	胴	56	西	内	1999.260	2451.200	60.196	A/B	B3?1
48	胴央	87	西	内	1999.070	2451.260	60.134	A/B	C4
49	胴央	85	南	内	1999.030	2451.180	60.090	B/B	B1C4
50	口縁	76	天	立(南)	1999.000	2451.170	60.069	A/A	B5
51	胴	38	北西	内	1998.950	2451.210	60.089	A/B	B5
52	胴下	55	天北西	立(南西)	1998.940	2451.240	60.084	A/A	C3
53	胴	49	南	内	1998.910	2451.110	60.076	A/B	B1C3
54	口縁	79	東	内	1998.760	2451.130	60.062	A/B	B4
55	胴央	68	東	外	1998.730	2450.980	60.018	B/B	B1C3
56	胴下	51	南	外	1998.800	2451.000	60.048	B/B	C4
57	胴下	43	南	内	1998.830	2450.950	60.052	B/B	B2C2
58	胴下	35	北東	外	1998.890	2450.990	60.078	A/B	B4
59	胴上	40	南東	外	1998.880	2450.930	60.110	B/B	B4
60	胴	50	南東	内	1999.110	2451.000	60.152	B/B	B4C1
61	胴央	81	北西	内	1999.070	2450.890	60.095	A/B	B3C2
62	胴央	62	南	内	1999.160	2450.810	60.137	B/B	B1C3
63	胴下	35	南西	内	1999.180	2450.780	60.111	A/B	B3
64	胴下	46	北西	内	1999.080	2450.770	60.095	A/B	B4
65	胴下	57	南	内	1999.020	2450.800	60.050	A/B	B5
66	胴下	22	—	—	1999.030	2450.750	60.042	B/B	B4
67	胴央	53	天	立(東)	1998.930	2450.850	60.040	A/B	B1C3
68	胴下	52	北	外	1998.960	2450.780	60.039	A/A	B4
69	胴下	41	西	内	1998.960	2450.730	60.039	A/B	B3C1
70	胴	33	—	内	1998.830	2450.880	60.024	B/A	A1B3
71	胴下	30	北東	外	1998.730	2450.850	60.046	A/A	B3
72	胴下	54	南東	内	1998.750	2450.820	60.044	A/B	B2C2
73	胴下	41	—	立(—)	1998.790	2450.830	60.003	A/B	B1C3
74	胴央	65	地西	立(北)	1998.810	2450.820	59.999	A/A	B2C2
75	胴下	34	北	外	1998.830	2450.740	60.030	A/B	B3C1
76	胴央	78	南西	内	1998.820	2450.760	60.007	A/B	B2C3
77	胴	42	西	内	1998.790	2450.670	60.008	A/A	B3C1
78	胴下	48	西	内	1998.760	2450.630	60.031	A/B	B3C1
79	胴央	43	西	内	1998.610	2450.710	59.999	B/B	B4C1
80	底	70	南	内	1998.590	2450.620	60.001	A/B	B5C1
81	胴	33	北東	外	1998.310	2450.800	60.047	B/B	B2C1
82	底近	29	南	内	1998.470	2450.590	60.067	A/B	B3
83	胴央	96	東	内	1998.530	2450.460	59.986	B/B	B3C3
84	底近	70	西	内	1998.610	2450.410	59.976	A/B	B3C3
85	胴下	33	西	内	1998.640	2450.390	60.004	B/B	B3
86	胴	82	南	内	1998.660	2450.540	60.001	B/B	B1C3
87	胴下	42	北東	外	1998.740	2450.530	60.092	B/B	B3C1

S X 5 の原位置論的検討

表14 つづき

番号	剥離	付着物	接合関係(接合状態)
45A	外		34(B),47(B),105(B)
45B	内外		27(B),44(B),47(B),49(C),106(C)
46			34(B),105(A),106(B),107(A)
47	外		27(C),45A(B),45B(B),104(C)
48	内		37(C),43(A),44(B),62(B),113(B),包(B)
49	内		44(C),45A(C),62(B),71(B),74(A),包5(B)
50	内外		42(B),94(B)
51			2(B),32(B),包8(C)
52	内		72(C),包(B),包(B)
53			12(C),55(C),103(B),包7(B),包1(C)
54			10(C),24(C),39(B),包(C)
55			12(C),53(C),包6(B),包(C)
56			包6(C),包(B),包(C)
57			73(C),包(B)
58			68(B),97(B)
59			34(A),35(B),40(B)
60	外		包(B),包(B)
61	内外		13(B),72(C),74(×),107(B)
62	内		43(A),44(C),48(B),49(B),包5(B),包(C)
63			98(A),122(B)
64			なし
65			76(C),78(A),包(B),包(C)
66		内・断	なし
67			113(A)
68			58(B),83(B),97(B)
69			115(B),121(B)
70	外全		なし
71	内		49(B),72(C),74(C)
72	内		52(C),61(C),71(C),74(C),包(×)
73			57(C),89(×),包5(C)
74	内外		49(A),61(×),71(C),72(C),107(B)
75			78(B),包(×)
76			65(C),83(B),101(×),包7(B),包(C)
77			18(B),83(B),86(B),100(B)
78			65(A),75(B)
79	内		包3(C)
80	外	剥離部	82(B),84(B),119(×)
81			34(B),35(B),38(C)
82			80(B),119(×),120B(C)
83			18(B),68(B),76(B),77(B),97(B),101(B),包(C)
84	内		80(B),119(C),包(B)
85			87(B),95(×),包(B)
86			1(B),77(B),包(A)
87			85(B),包(B),包(B)

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査

表14 つづき

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内磨減	破面磨減
88	洞下	30	—	内	1998.800	2450.580	60.028	A/B	B4C1
89	洞下	42	南西	内	1998.790	2450.370	60.013	B/A	B3C1
90	洞	68	西	立(北)	1998.850	2450.360	60.009	A/B	B2C3
91	底近	57	天北	立(東)	1998.870	2450.510	60.019	A/B	B4C1
92	洞下	43	南	立(東)	1998.900	2450.600	60.049	A/B	B5
93	底近	56	地東	立(南)	1998.950	2450.640	60.004	A/A	B3C3
94	口縁	59	北東	外	1998.980	2450.570	60.067	B/A	B2C3
95	底近	116	西	内	1999.020	2450.500	60.058	A/B	B7C1
96	洞下	48	—	内	1999.110	2450.470	60.083	A/B	B5
97	洞下	117	天	立(北)	1999.140	2450.480	60.058	A/A	B4C2
98	洞下	58	地東	立(北)	1999.170	2450.670	60.104	B/A	B5
99	頸	72	北	内	1998.710	2452.120	60.009	A/B	B4
100	洞	68	天	立(東)	1998.360	2451.620	59.968	B/A	B2C2
101	洞	70	南東	内	1998.580	2451.610	59.977	A/B	B1C4
102	洞下	24	—	外	1999.020	2451.640	60.046	A/A	B4C1
103	洞	57	西	外	1999.120	2451.550	60.040	B/B	B3C2
104	洞		北西	内	1998.990	2451.410	60.062	A/B	B2C1
105	洞	31	北西	内	1999.240	2451.210	60.144	A/B	A2B2
106	洞	43	西	内	1999.190	2451.230	60.152	A/B	A1B2C1
107	洞	76	北	外	1999.160	2451.230	60.141	A/A	B4C2
108	洞	39	東	外	1999.140	2451.270	60.147	B/A	B2C2
109	洞	31	—	—	1999.140	2451.240	60.136	A/A	A4
110	洞	56	北西	外	1999.110	2451.240	60.140	A/A	B3C2
111	洞	41	北東	内	1999.080	2451.240	60.111	A/B	A1B4
112	洞	45	—	立(—)	1999.030	2451.010	60.050	A/B	B2C2
113	洞央	63	地南	立(東)	1998.940	2450.850	60.031	A/B	B1C3
114	洞下	53	北	内	1998.840	2450.850	59.992	A/B	B3C1
115	洞下	26	西	外	1998.740	2450.930	59.954	A/B	B4
116	底近	32	南西	外	1998.450	2450.930	59.967	B/B	B4
117	洞下	41	—	内	1998.970	2450.630	60.032	A/B	B5
118	洞下	96	南	内	1998.860	2450.710	60.012	A/B	B2C2
119	底近	57	地東	立(北)	1998.860	2450.650	59.996	A/A	B4
120A	洞下	20	北西	内	1998.840	2450.600	60.000	B/B	B4
120B	底近	65	西	内	1998.830	2450.590	59.988	A/A	B3C2
121	洞下	40	地北	立(東)	1998.840	2450.500	59.984	B/B	B2C1
122	洞下	48	東	内	1998.790	2450.520	60.006	B/A	B5
123	洞下	28	—	内	1998.740	2450.480	59.994	B/B	B4
124	口縁	45	西	内	1998.760	2452.100	59.990	A/B	B3

口縁方位：出土時に破片の口縁側が示していた方位を八分表記。立位出土破片は天地を加味した八分表記。「—」は不明。

表裏(外)：出土時に天を向いていた破片の表裏。立位出土は外面の向いていた方位。「—」は不明。

外/内磨減：内外面の調整が、よくわかる(A)、わかりにくい部分が多い(B)。

破面磨減：破面が、ほとんど磨減していない(A)、ほとんど磨減していないが縁部がやや磨耗(B)、やや磨減し縁部も磨耗(C)。

数字は破面の合計数(「B2C2」ならば、破面の合計は4面で、状態Bの破面が2つと状態Cの破面が2つある。)

S X 5 の原位置論的検討

表14 つづき

番号	剥離	付着物	接合関係(接合状態)
88			なし
89			73(×),包(B)
90	内	断(底方)	なし
91			93(B),95(B),114(B),包2(B),包(B)
92	外		93(C),114(C),包(C)
93	内外		91(B),92(C),114(C),116(C)
94	内外		17(C),50(B)
95	内		85(×),91(B),98(B),120B(B),包(B),包(C),包(C),包(B)
96	内	外・断	なし
97			58(B),68(B),83(B),118(B),包(B)
98			63(A),95(B),包(B)
99	内		3(B),9(C),10(B),包(C)
100			1(B),18(A),77(B)
101			18(B),26(B),76(×),83(B)
102	外	内・断	なし
103			7(A),12(C),14(×),53(B),包1(B)
104	内外		34(C),47(C)
105			34(B),45B(B),46(A),106(B)
106			45A(C),46(B),105(B)
107			13(B),34(C),38(A),46(A),61(B),74(B)
108			110(A),包3(C)
109	外		110(A),111(A)
110	内外		29(A),30(B),108(A),109(A),包3(C)
111			20(B),109(A)
112			16(B),28(C),39(B)
113	内		37(B),48(B),67(A)
114	内		91(B),92(C),93(C),包(B),包(B)
115			69(B)
116			93(C)
117	内	剥離部	なし
118	内		97(B),119(A),120B(A),122(C),包(C)
119			80(×),82(×),84(C),118(A),120B(B)
120A			122(C),包(C)
120B	内		82(C),95(B),118(A),119(B)
121			包(C),69(B)
122			63(B),118(C),120A(C),包(B)
123			なし
124			3(B),4(C),17(B)

剥離：器面の内面や外面に剥離部があるもの（「全」はその全面が剥離）。空欄は剥離部なし。

付着物：黒色の付着物が器面ないし破面にあるもの（内：内面、外：外面、断：破面）。空欄は付着物なし。

接合関係：破面での接合が、ぴったりあう（A）、縁部に隙間がありやや不安定（B）、縁部に隙間があり不安定（C）。

数字は接合する破片の番号。「包」は出土位置を記録していない包含層出土の破片。

なお、土器片の器表面や破面の磨減状態については図版49に具体例を示している。

部位によって破片の形状にある程度の傾向がある（図124）。これには、製作技術と相関する要素と、破損理由と相関する要素とがあると思われる。こうした相関は、個々の破片の形状という側面に加え、接合によって明らかになる破損線の走向や切り合いからうかがえる破損の単位、接合破片の分布特性、などの側面にも反映されている。なお、器面の色調や状態などから、口縁や底部の付近には、何らかの使用痕跡と思われる特徴をもつ破片もある。現段階では、SX5について、内容物のある壺が落下した状況を想定している。

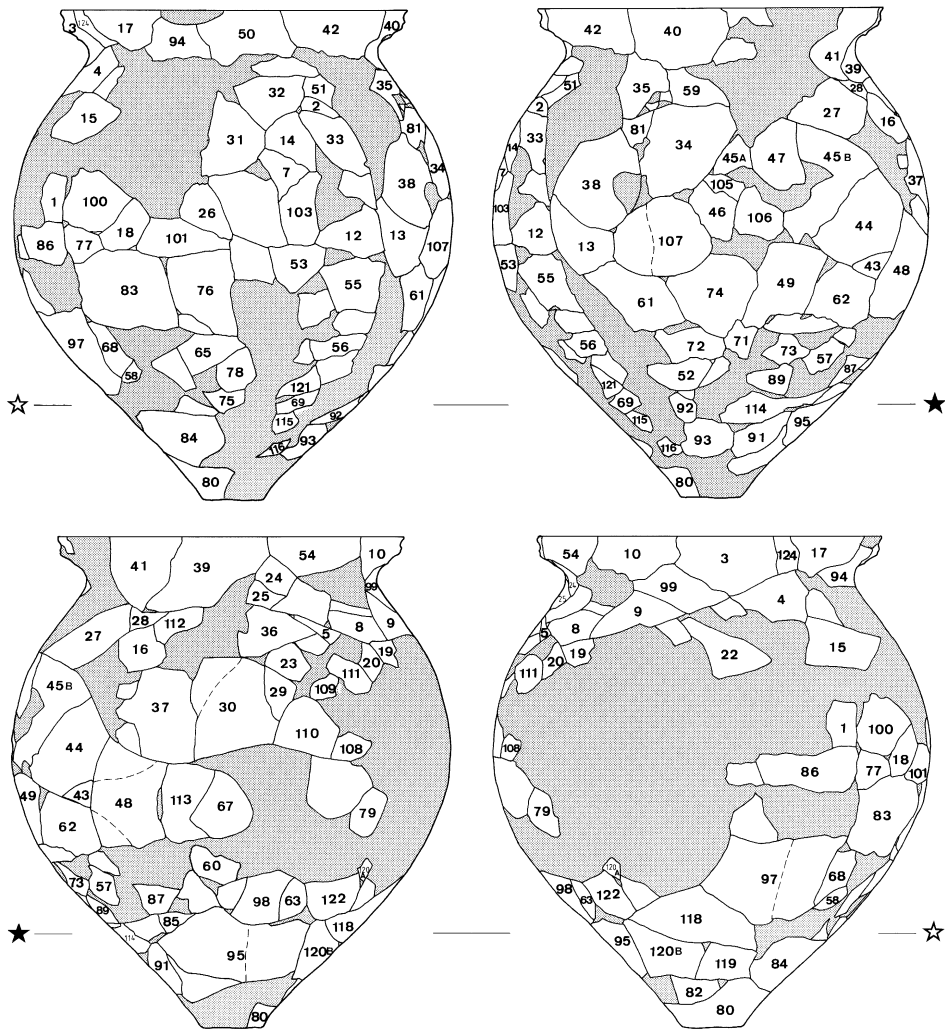


図124 SX5出土土器片の接合のしかた 縮尺約1/6

7 中近世層の花粉分析

経緯と経過 今回の調査区では、中世以降のものとみられる細い溝群が全域で多数検出され、耕作地としての土地利用が想定されている。このうち、とくに西半部の段差内ではこうした状況が複数層にわたってみられることから、これらの堆積層から連続的に試料を採取し花粉分析を実施することは、調査地での耕作や周辺植生の具体相の復元と、その長期にわたる連続的な変遷過程を把握するうえできわめて有効と考えられた。また、花粉分析を用いた歴史時代以降の植生や農耕史の検討事例がきわめて乏しい現状にあって、中世から近世にかけて都市近郊農村となっていくことが知られる調査地での分析は、貴重な比較事例を提供するものといえる。よって、今回、調査区西壁の表土以下の堆積層を採取して分析を実施することとした。

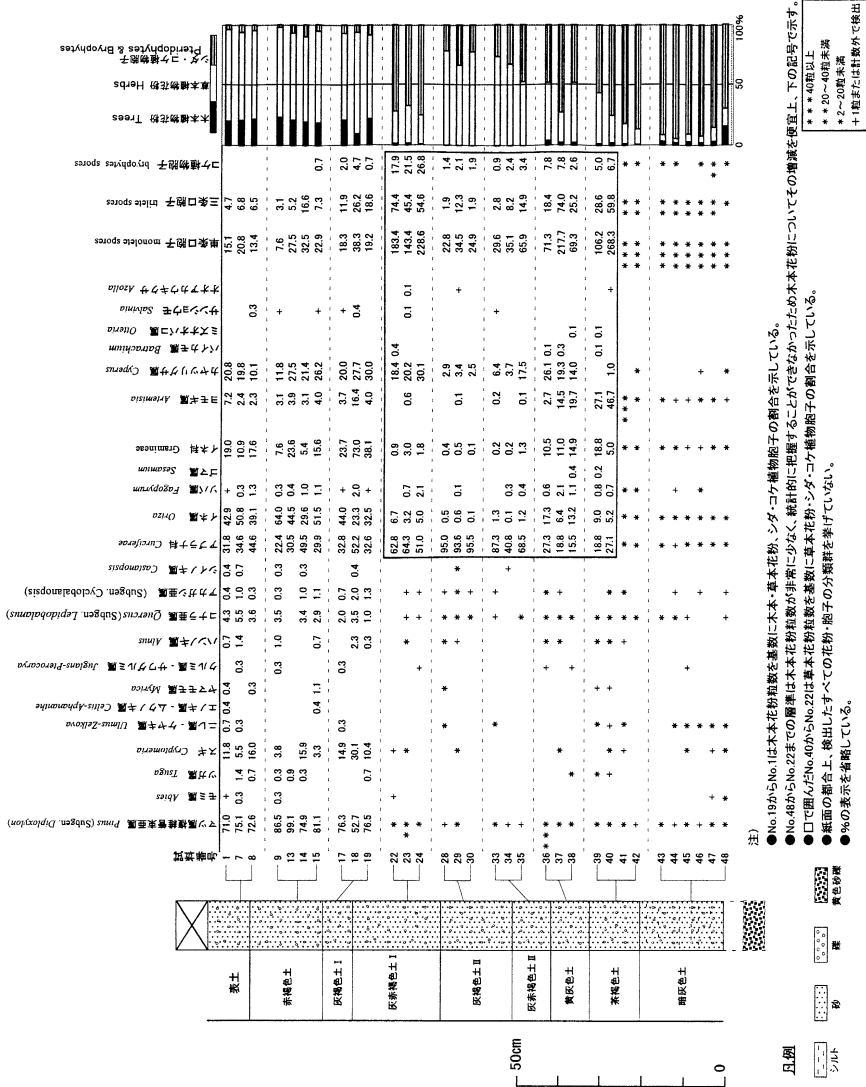
試料と層序 試料の採取地点は図114、層序は図89も参照。地層ごとに約3cmの厚さで連続的に採取した試料番号1～48（以下、No.1～48と表記）のうち計32試料を対象とする（図125柱状図）。なお、暗灰色土層より下位の試料も採取し検鏡しているが、花粉粒数がきわめて少なかったため、ここではとりあげていない。

分析方法 1)試料の湿潤重量(100～150g)を秤量。2)10%水酸化カリウム水溶液処理。3)植物遺体を篩別除去。4)傾瀉法と蒸発皿処理による碎屑物の除去。5)塩化亜鉛飽和水溶液による比重分離。6)フッ化水素酸処理。7)アセトリシス処理。8)グリセリンジェリーで封入。9)カバーガラスの周囲をネイルエナメルで密封。

分析結果 (図版50, 図125) No.48から22までの層準は木本花粉粒数が非常に少なく、統計的に把握することができなかった。しかし、このうち、No.40からNo.22は草本花粉粒数が統計上必要な250を越えることから、草本花粉粒数を基数に割合を出し草本花粉の出現傾向を表した。No.48からNo.41は、草本花粉粒数も非常に少ない。No.19からNo.1は木本花粉粒数が250を越えることから、木本花粉粒数を基数として、草本花粉、シダ植物・コケ植物胞子の出現率を表した(以上図125)。計数の過程では劣化・溶触によって同定不能の花粉も多かった。以下、特徴的花粉の出現傾向を略述する。

①草本花粉粒数が250を越えるNo.40-22では、アブラナ科とイネ属花粉が相対的に多く出現する。そのうち、No.35-22ではアブラナ科花粉の出現が顕著で、とくにNo.35-28では草本花粉を基数にした割合でイネ属花粉が1%前後しかあらわれないのに対し、アブラナ科花粉は90%前後あらわれている。一方、より上位のNo.24-22では、アブラナ科花粉が減

京都大学北部構内B C 28区の発掘調査



凡例

- No.19からNo.1は木本花粉粒数を基に、草本植物、シダ、コナラ植物花粉の割合を示している。
- No.48からNo.22までの層位は木本花粉粒数が非常に少なく、統計的に把握することができなかったため木本花粉についてその増減を便宜上、下の記号で示す。
- 口で囲んだNo.40からNo.22は草本花粉粒数を基に、草本植物、シダ、コナラ植物花粉の割合を示している。
- 紙面の都合上、抽出したすべての花粉・胞子の分類群を挙げていない。
- %の表示を省略している。

注)

- **** 6粒以上
- *** 20~40粒未満
- ** 2~20粒未満
- + 1粒または計数が未検出

図125 花粉ダイアグラム

少し、イネ属花粉が増加する。さらに、No.19-1ではイネ属の方がやや優勢となる。また、アブラナ科とイネ属以外の草本花粉とシダ植物の出現率が低下している。

②No.40と39は、他の層準で検出していない栽培植物のゴマ属花粉を含み、ソバ属や畑の雑草と考えられるヨモギ属、アカザ科やナデシコ科などの草本花粉をともなう。

③木本花粉粒数が250を越えるNo.19-1はマツ属花粉が圧倒的に多く出現する。

ま と め 調査地周辺の植生と農耕に関して、以上の分析結果に簡単な考察を加え、まとめとする。

No.40-22の草本花粉の主体がアブラナ科とイネ属花粉であることは、おおよそ中世後半期以降の栽培対象物が、これらを中心としていたということが考えられる。そして、ゴマ属やソバ属の栽培も含む多様なありようが、近世以降にアブラナ科の栽培へと集約していったことを反映している可能性がある。アブラナ科花粉の高比率の出現については、かつて他地域でも指摘されているが、品種の同定の問題も含めた課題が多く残されている〔藤田ほか1986〕。今後も検討を継続する必要がある。

木本花粉粒数が大幅に増加するNo.19-1は、幕末期以降に比定される層準である。この時期の周辺山域にアカマツの二次林が成立していたことを示すと考えられる。絵図と古地図の表記から、京都近郊の山域は、近世の禿げ山的景観から近代における松林へと変遷したと指摘されている〔小椋1992〕。今回は、これを示唆する結果となった。この段階の草本花粉の出現傾向は、イネ属を主体として裏作りにアブラナ科植物を栽培、雑草除去などの管理強化、という形態をうかがわせるものであった。これは、調査地が幕末の一時期に土佐藩邸敷地内となったことを契機とする変化であるのか、ひろく幕末期以降の一般的傾向ととらえるべきか、現状では判断できない。周辺での分析例の増加を待ちたい。

8 小 結

今回の発掘調査成果について、周辺での成果を参照しつつ、まとめておきたい。

弥生前期の水田遺構 縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の遠賀川式土器の包含層の上面において、小区画の水田遺構が確認できた。土石流にともなう堆積である厚い黄色砂に覆われており、一部を除き遺存状態は良好であった。包含層の遠賀川式土器は前期新段階のものまで含まれ、また、今回も含めて黄色砂より下層では弥生中期以降の土器は出土していないことから、水田の造営時期は弥生前期後葉～末に限定できる。

京都盆地における当該期の水田遺構としては、西南方700mにある220地点に次いで2例

目となる〔伊藤1999a〕。比叡山西南麓の扇状地上には、適地を選択して随所に開田されていた可能性がいっそう高まったと言えよう。とりわけ今回の事例は、東水田と西水田という2つのまとまりが示すように、平坦地を広面積に確保できない土地条件のなかで、微起伏を巧みに取り込んで小規模な水田単位が複数設定されていた状況が明らかとなった。保険として複数の小規模水田を開き、そのいくつかからでも必要最低限の収穫を確保したのか、あるいはシーズン単位で輪作したものとみられる。ただし、プラント・オパール分析では、検出はされたものの量が少なく、長期の耕作は想定できない、という結果であった。これは、220地点の場合とは対照的な結果であり、地形環境に対応した、短期移動型か安定した継続型かというような耕作形態の違いを反映するものか、たんに、短期間で埋没しただけのことであるのか、今後検討を深める必要がある。

なお、水田に対応する居住域は、東南約100mの6地点周辺の可能性が高いと考えられる〔伊藤1999b〕。一帯は、東方より張り出す尾根上の微高地で、今回の水田面標高との比高差は3～4m程度をはかる。ほぼ弥生前期新段階にまとまる土器が一定量出土しているほか、(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査では、土器棺墓とみられる遺構が複数確認されており〔長戸ほか1997・竜子1999〕、居住区が近接して存在すると考えても不自然ではない。今後調査の機会が生じる場合には、慎重な配慮が必要になろう。

縄文晩期・弥生前期の遺物 包含層中から5000点前後をとりあげた遺物は、縄文晩期末の船橋式・長原式段階の突帯文土器を主体として、ほかに少量の晩期中葉の篠原式、弥生前期遠賀川式土器、および若干の石器類であった。これらは、残念ながら層位的に明瞭に弁別される調査状況にはなかったが、小区画水田が造営されるに至るまでの、調査地一帯での活発な活動の存在を示している。このうち石器類の検討からは、挟み撃ちによる剥片剥離技術が多用されながら錐や石鏃が製作されていく過程が、剥片石器と礫石器との関係から推測され、調査地における石器製作を示唆する興味深い評価がえられた。一方、土器型式においては、晩期中葉の滋賀里Ⅳ式・口酒井式期の資料を欠いており、その段階は、北東方のより標高の高い一帯に活動の中心を移していたものとみられる。

なお、特異な資料として、浮線文土器と垂流遠賀川式土器の出土がある。前者については、西日本の複数の遺跡で出土が確認されつつあるので、晩期段階の広域交流網のなかに当遺跡も属していたことを裏付ける資料が、あらたに追加されたと評価できる。後者については、奈良県唐古・鍵遺跡で出土が紹介されているほかは〔橋本2003〕、近畿地方での類例を知らない。遺跡の地理的位置を反映したものであろうが、珍しい事例といえよう。

弥生中期以降の地形と遺跡形成 弥生前期末～中期初頭の鍵層として評価されてきた黄色砂を切って流れる大規模な洪水による流路SR1・SR3の存在と、その後の長期にわたる地形環境の変遷を明瞭に把握できたことも、今回の大きな調査成果である。これまで周辺では、調査地の北方100mに位置する54地点〔岡田・吉野1979〕および北東200mの229地点〔千葉ほか1998〕で中期前葉～中葉の方形周溝墓が確認されていたが、今回は中期後葉の土器が一括出土したほか、石庖丁の出土をみている。土石流により黄色砂が2mあまり埋積して前期の水田が廃絶し、それほど時を経ずに洪水による谷地形の形成があった後、中期のうちにすみやかに低地を利用した水稲耕作が再開されていたことが十分に予想される。今後は、このような弥生中期以降の遺跡についても、生産領域などの認定を視野に入れた調査にのぞみ、活動空間の変遷を具体的に復元することが課題となろう。

また今回、弥生中期後葉の壺1個体の破片がまとまって出土したSX5において、個々の破片の出土位置や遺存状態を詳細に検証する原位置論的な検討をとおして、当時の人の行動や身ぶりなどを推測する試みをおこなった。遺跡形成の担い手としてのひとびとのありようを実証的に復元するために、必要な検討作業を呈示した、意義深い事例となろう。

平安時代の遺跡の性格 古代以降には、上述の流路や谷地形の埋積が進行し、窪地や段差として地形に影響を及ぼしながらも、土地条件は安定したとみられる。今回まとまって出土した遺物は、土師器は薄手の「て」字状口縁手法、灰釉陶器はK90号窯式、緑釉陶器は畿内産がおおむね主体となっており、9世紀後葉～10世紀前葉に盛期をもつ遺跡の存在が示唆される。そして、灰釉陶器や緑釉陶器の比率が高く、なかに墨書をもつものが含まれる点は、遺跡の特殊性を反映したものといえよう。

南側の208地点においては、墨書甕に銭貨を納めた埋納遺構が複数見つかるなど、祭祀空間としての性格が想定されている〔浜崎ほか1995〕。今回は顕著な遺構が検出されていないが、遺跡の北へのひろがりともみて大過ない。その際問題となるのは、同じ北部構内において平安期の良好な資料が出土する東北部一帯との関連である。北東350mの221地点では、平安前期にさかのぼる瓦類がまとまって出土しているほか、土器類も9世紀前半～10世紀前葉と時間幅の長い資料が出土し、藤原基経の別業「山庄」とそれから発展した円覚寺との関係が推測されている〔千葉1998〕。今回の調査区をはじめとした西南部一帯では、瓦埴類の出土がなく、盛期が限定される状況にあることから、そのような別業や寺院といった施設に直接関係する空間と理解することは難しい。ただし、こうした開発が、扇状地上部の東北部から次第に西南部へとおよんだ可能性はあり、同一遺跡の拡大の結果か、性格の

異なる別遺跡の成立とみるかは、周辺の調査成果を待って結論を下す必要がある。

中世の耕地開発 中世の遺構で顕著であったのは、幅20cm程度で南北方向を中心に無数にはしる浅い溝群である。これらは、いわゆる鋤溝に類する耕作の痕跡といえる。包含層の薄い調査区東半においては、黄色砂の上面まで掘り下げないと輪郭が明瞭に確認できないが、複数層が埋積する調査区西半の段差内においては、14世紀代までの遺物包含層である明灰色土の上面から顕在化しはじめる。よって、調査区一帯が面的にひろく耕地化された時期は、中世後半期、それもおおむね15世紀代以降とみてよい。中世から近世にかけて、都市近郊の農村地帯となっていた様相をうかがわせる遺構といえる。以上の状況を考慮しておこなった花粉分析の結果では、アブラナ科の卓越などが示唆されており、栽培された作物を想定するうえで興味深い。今後、周辺地点での分析事例を増加させて比較材料とし、ひろく具体的な土地利用の変遷過程を明らかにすることが、課題となるだろう。

近世の土地利用 近世に関しても、土地利用は中世と同様であったとみられるが、段差内の堆積層は、固く締まった灰褐色土と酸化鉄の集積層である灰赤褐色土の互層となっており、低地で保水力のある部分を中心に水田となったことが想定される。

その後幕末期にこの地が土佐藩屋敷の敷地内となったことは、絵図の表記だけでなく、南側の208地点での南限を画する堀と内部の井戸、およびそれらからの刻印棧瓦の発見により具体的に裏付けられている。しかし、それ以外の範囲や屋敷内の様相については、北東側の109地点で瓦溜が見つかったのみであった〔浜崎1983〕。今回、近世の井戸SE11から同種の刻印瓦が出土したことから、調査地が藩邸敷地内にあることが示された。しかし、建物遺構はまったく検出できなかった。調査区西半の段差は、当該時期においても緩やかに残されている状態であったと想定され、埋積する水田耕作土にも断絶の様相はうかがえない。藩邸設置にあたり、敷地内が大がかりに整地された可能性は薄いと言える。

今回の報告に際し、以下の方々にご教示をいただきました。縄文晩期の浮線文土器に関して石川日出志氏（明治大学）、剝片石器製作技術に関して山中一郎氏（京都大学総合博物館）、石庖丁・礫石器石材に関して竹村恵二氏（京都大学理学研究科）、土石流に関して増田富士雄氏（京都大学理学研究科）、花粉試料の分析・同定に関して（故）那須孝悌氏（大阪市立自然史博物館）、坂本清子氏（大阪産業大学）、松江実千代氏（高槻市立第六中学校）、本郷美佐緒氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）、花粉試料採取に関して石井陽子氏（大阪市立自然史博物館）。末尾ながら厚く御礼申し上げます。